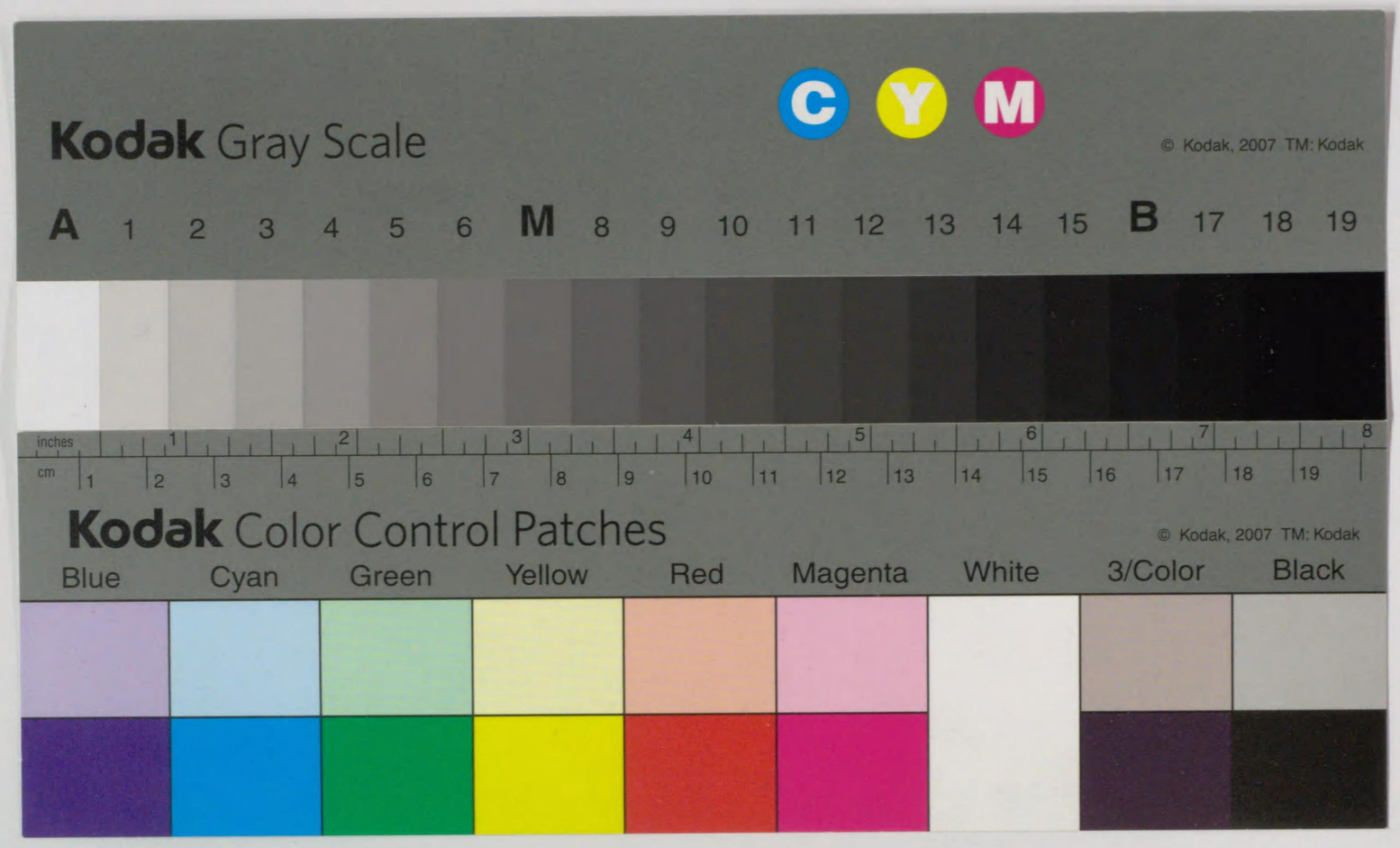


591
5
591-175
12005015261 69

252

帝國圖書館

貨幣理論

青木孝義譯

日本大學出版部刊

昭和四一・五・一〇 帝國圖書館

591-175

今夏私の成業を待ちわびつゝ
みまかりたまひし　母上の靈に捧ぐ

ヴイルブラント著
青木孝義譯

經濟思想史概論

（國民經濟學の發展）

大正十五年　大明堂書店

はしがき

本書は Prof. Dr. Ernst Wagemann : Allgemeine Geldlehre, 1923 Berlin の一篇より三篇に亘る貨幣理論を譯出したものである。

私がこの仕事を始めたのは大正十四年の末、西歐の旅より歸朝した翌年の秋からである。しかし校務の多忙に禍されて此ほど漸やく上梓の運びに至つたものである。

もとより貨幣論の如き難解な學問の研究は一朝一夕の業ではない。歐州大戰は貨幣論上に一つの大きな波紋を畫き、クナップを先頭とする一連のノミナリストの主張を實證的に證明したかの如く、この方面の實際的の研究材料は極めて豐富に提供された。しかも大戰中に於ける金本位制の動搖は貨幣の理論上に排金思想となつて現はれ、ノミナリストは貨幣の指圖證券說に於て凱歌を奏した。いまや貨幣論の研究に際して歐州大戰後の貨幣混亂の時代を樞要な場所に暮したワーゲマン氏の貨幣論を覗く事は最も有意義であると信する。本書の飜譯に當

つて私はできるだけ平易を旨とし專ら原著の眞義を誤つて讀者に傳へざらむ事に務めた次第である。然れ共私の不敏は本書の上に多くの負擔を殘して上梓の止むなきに立ち至つた。殊に行文の不練に於て一層然りである。希はくば識者の叱聲を賜はらば望外の幸である。

昭和四年盛夏

日本大學商學部研究室に於て

譯者

著者の序

古典經濟學は貨幣をもつて經濟現象を蔽ふ包被と考へ經濟生活の諸現象を科學的觀察に曝露するために除かんと試みたものである。それは單なる技工以上のものであつた。卽ちそれは彼等の最も重要なる方法の一つであつた。實に彼等の取扱ひたる貨幣の概念は、もしも彼等が多くの分野に於て、然らずんば科學的不結果の宣告を受けざらんと欲するならば、彼等をして恐らくこの方法をとらしめるものであつた。併し乍らかかる方法に依つて彼等は經濟學の最も優れたる問題の一つたる貨幣と經濟の關係に對する解決の權利を拋棄した。

彼等はそれにも拘らず再三且つ徹底的に其解決を企てたが併しこの問題を全く制御することは不可能であつた、卽ち常に近代の貨幣制度の領域に對して無能であつた。なんとなれば彼等は經濟より貨幣を隔離することに依り、例へば死んで居る有機體を解剖する生物學者が鼓動の打つて居る生命を觀察することを得なかつたと同樣なる狀態に落入つたからである。かくて貨幣理論は云はゞ貨幣の科學とな

り或は精々貨幣經濟の解剖學となつた。貨幣と經濟の活きたる關係は古典經濟學の貨幣概念に鋭く對立して、新しき貨幣概念が展開せられるに至つて初めて可能となつた。

この關係の研究は、その最初の主要部分を、余が公に示さんとする研究の出發點であつた。この研究を始めたる時に、余はこれより『一般貨幣論』が生ずるであらうと云ふことを豫見しなかつた。なんとなれば只だ漸進的にのみ問題への深入は余として益々廣汎なる考察に向はしめ、遂に過去及現在の諸々の重要なる貨幣理論の研討及西歐並に海外の經濟界の金本位制度史の究明に向はしめた。

貨幣論並に本位制度史の發展の過程と本質はこの第一卷に示すであらう。更に本書に於てこの研究を基礎として築き上げられる經濟は、就中經濟循環及發券政策、信用政策の敍述にあてるところの後の第二卷に於て更に發展せしむるために其大要を記述するであらう。

本書のかかる目的設定及成立方法に於ては研究の說明が敎科書的性質と著しく混同されたが、それは恐らく免がれ得ないところであつた。卽ちそれだけ最近十年間の貨幣上の諸事象並に問題が現象の眞の魔女の遊戲に追はれるようなことは少ないであらう。

一九二三年五月、

伯林に於て　エルンスト・ウーゲマン

貨幣理論目次

文獻に關する一般概觀……一
緒論……五
第一編　貨幣の根本觀……一
第一章　象徴説……一
第一節　マーカンチリズムと象徴説……一
第二節　貨幣象徴説……七
第三節　原理の擴張(富としての貨幣)……一三
第二章　金屬説……一六
第一節　金屬説の成立……一六
第二節　アダム・スミスに於ける商品としての貨幣……一八
第三節　貨幣の勞働價値學説……二三
第四節　貨幣の使用價値學説……二九

第五節　現代に於ける嚴格なる金屬主義の普及……三一
第六節　金屬說の新たなる修正……三七
第七節　原理の擴張(價値尺度としての貨幣)……四三
第三章　名目說……四七
第一節　名目說の成立……四七
第二節　貨幣債務の名目性に關する論爭……五三
第三節　貨幣の名目論的法理理論……五七
第四節　貨幣の名目論的經濟理論……六一
第五節　原理の擴張(價値單位としての貨幣)……七五
文　獻……七七
第二編　貨幣價値論……九〇
第四章　貨幣價値の內容……九〇
第一節　問題提出及術語……九〇
第二節　內的貨幣價値の擬制(素材價値)……九五
第三節　內的貨幣價値の擬制(職能價値)……一〇一
第四節　主觀的貨幣價値……一〇四
第五節　法理論的概念としての價値單位……一〇六
第六節　經濟心理概念としての價値單位……一一三
第七節　貨幣債務の內容……一一九
第五章　貨幣價値の根據……一二三
第一節　最も重要なる貨幣理論の解答……一二三
第二節　原始的貨幣の價値根據……一二七
第三節　近代貨幣の價値根據……一三四
第六章　貨幣價値の作用形態……一三九
第一節　貨幣の交換價値性質……一三九
第二節　借方價値としての貨幣……一四六
第三節　貨幣の定義……一五〇

第四節　貨幣職能論……一五五
第五節　要　約……一六一
文　獻……一六三
第三編　貨幣及價格論……一六九
第七章　商品價値學說……一六九
第一節　價格と價格形態……一六九
第二節　價格變動の外的決定原因(需要と供給の原則)……一七一
第三節　生產費說と勞働價値說……一七六
第四節　限界効用學說……一八四
第八章　貨幣數量學說……一九五
第一節　はしがき……一九五
第二節　貨幣價値の生產費學說と數量學說……一九七
第三節　貨幣の職能價値學說(本來的ならざる數量學說)……二〇一

第四節　象徵的數量學說……二〇五
第五節　金屬論者の數量學說と通貨學派……二一一
第六節　銀行學派……二一五
第七節　數量學說の新發展……二一七
第九章　價格均衡理論……二三〇
第一節　數量理論より均衡理論への推移……二三〇
第二節　經濟的均衡方程式……二三三
第三節　所得收益及價格……二四五
第四節　價格關係……二五三
文　獻……二六六

文献に関する一般概観

一文献摘要一

Adolf Soetbeer : Literaturnachweis über Geld-und Münzwesen, insbesondere über den Währungsstreit 1871–1891, 1892.

K. Helfferich : Das Geld, 1. Aufl., 1903. Forts. des obigen Literaturnachweises bis 1902.

C. Menger : Artikel Geld im Handwörterbuch der Staatswissenschaften, 3. Aufl., 1909, enthält ein Verzeichnis auch der Literaturübersichten für die Zeit vor, 1871.

E. Nasse : Das Geld-und Münzwesen. Schönbergs Handbuch der plitischen Oekonomie, 1. Bd. V111, Literaturangaben bei den einzelnen Abschnitten. 1. Aufl., 1882 4. Aufl,. bearbeitet von Lexis. 1896.

Ad. Wagner : Sozialökonomische Theorie des Geldes und Geldwesens, 2. Bd. der zweiten Abt. der Theoretischen Sozialökonomik, 1909, Literaturübersicht auf Seite 111–115.

G. F. Knapp : Staatliche Theorie des Geldes. Literaturübersicht im Anhang der 2. Aufl., 1918, 3.

Aufl. 1921.

D. Kinley: Money A study of the theory of the medium of exchange. New york, 1904, Literaturverzeichnis S. 391–409.

J. L. Laughlin: The principles of money, 1903. Autorenverzeichnis, S. 539 ff.

C. A. Conant: The principles of money and banking, 1905, Literaturverzeichnis im 2. Bde. S. 441–460.

11 参考文献

W. Roscher: Geschichte der Nationalökonomik in Deutschland, 1874.

E. Dühring: Kritische Geschichte der Nationalökonomie, 3. Aufl. 1879.

H. Eisenhart: Geschichte der Nationalökonomik, 2. Aufl. 1910.

Gide und Rist: Geschichte der volkswirtschaftlichen Lehrmeinungen, 2. deutsche Aufl. 1921.

O. Spann: Die Haupttheorien der Volkswirtschaftslehre, 10. Aufl. 1922.

R. Zuckerkandl: Zur Theorie des Preises mit besonderer Berücksichtigung der geschichtlichen Entwicklung, der Lehre. 1889.

K. Helfferich: Das Geld, (s. oben). 3. Aufl. 1916, insbes. 2 Buch, 1. u. 4. Abschnitt.

J. L. Laughlin: (s. oben). insbesondere Kap. 7 : History and literature of the quantity theory of money.

F. Hoffmann: Kritische Dogmengeschichte der Geldwerttheorien, 1907.

S. P. Altmann: Zur deutschen Geldlehre des 19. Jahrhunderts. Festschrift für Schmoller über die Entwicklung der deutschen Volkswirtschaftslehre im 19. Jahrhundert, 1908.

K. Diehl: Die Entwicklung der Wert–und Preistheorie im 19. Jahrhundert, ebenda.

H. Schumacher : Geschichte der deutschen Bankliteratur im 19. Jahrhundert, ebenda.

Kiichiro Soda: Geld und Wert, 1909.

S. P. Altmann: Artikel Quantitättheorie im Handwörterbuch der Staatswissenschaften, 3. Aufl., 1910.

L. v. Mieses: Zur Klassifikation der Geldtheorien. Archiv f. Sozialw. u. Sozalpolitik, 1917.

H. Döring: Die Geldtheorien seit Knapp. Greifswalder Staatswissenschaftliche Abhandlungen. Bd. 7, 1921, 2 Aufl. 1922.

R. Kerschagl: Die Lehre vom Gelde in der Wirtschaft, 1922.

加之に特に初學者のために充分に薦めることのできるものに次の文獻がある。

卽ち

Diehl und Monbert: Ausgewählte Lesestücke zum Studium der politischen Oekonomie, darunter 2 Bände zur Lehre vom Geld.

Jastrow: Textbücher zu Studien über Wirtschaft und Staat, Fd. 4, Geld und Kredit.

緒論

生物學に於ける生命の謎の如く、物理學に於けるエネルギーの如く、又歷史研究に於ける人類の問題の如き問題は、經濟學に於ては貨幣の問題である。總て之等の觀念形態には直接に知識され、且體驗される現象がその基礎に橫はつて居るが、併しそれは概念的把握並に限定より再三逃れんとするものである。

實際に於てはそれ等の問題はそれをめぐる無限の思想的勞作ありたるに拘らず、學門上常に根本に於て探求しつくされざるものの謎に滿ちたるものの特質を有する。

尤も最近數十年に於て貨幣に關する學說は正に斷然たる改造を經驗した。この發展は觀察分野の擴張には、新たなる事實材料の獲得に依つてより多く生じたるか、或ひは內的なる科學的なる成長よりもより多く生じたるか、その何れなるかを言ふことは容易でない。もとより西歐羅巴に於ける紙幣並に振替制度の異常なる發達は、たしかに前世紀七十年代の終り墺太利及ロシアに於て銀貨がそれを

表券上代表せる紙幣より遙かに著しく其價値を下落せしめたる如き獨特なる現象は貨幣論の研究をして全く新らしき問題の前に立たしめた。併し同時に總ての貨幣事象より可成り獨立に種々異りたる原理に於て、即ち社會學に於て、又は法律學に於て、經濟學に於て、又は私經濟學に於て、貨幣に關する一つの新らしい大根本觀が生ひ立つた。この新見解は先づ異樣なる刺戟を與へ且今日も尙幾多の方面より烈しく反對を被むつて居るに拘らず、益々支配的となりつゝある。

この革命は既に世界大戰前に遂行されつゝあつた。今や大戰とその影響は貨幣論に驚くべき大量の新らしい事實材料を提供した。この最近貨幣制度の領域に於て其本質上全く新らしき未知の現象は殆ど出現しなかつたとは云へども、而も經濟の運動現象は想像も及ばぬまでに上騰した高度資本主義經濟の經驗したる國民的社會的緊張の驚くべき爆發が從つて觀察者をして從來認識の困難なり し經濟的諸關係への注視を可能ならしめて居る。

特に歐羅巴に於ける紙幣經濟 巨大なる擴張は國民經濟の目の細かい織物を獨特な方法で改造しそして曝露した。總て以前の既知の量を遙かに越へて行は

れたる通貨膨脹は價値現象を顯微鏡の視野に於けるが如くに吾々の眼前に現はしめた。併し乍ら唯に紙幣本位の領域に於けるのみならず又金本位の支配下に於ても注意に價する現象が演ぜられた。只一例をとるならばアメリカ發見の後貴金屬の增加は二倍乃至三倍の一般物價騰貴を示した。世界大戰中は貴金屬生産は減少した。それにも拘らず金に現はれたる世界市場の價格は著しく進騰し、それは實に數年間にして當時の數十年間と同程度のものであつた。このことは新時代の始まつて以來西洋の文化圈内の經濟及貨幣制度に於て深刻なる變化を遂行せねばならなかつたと云ふ一例を極めて鋭く示すものである。茲に於て貨幣理論はレトルトに於ける如く、金は尙本位素材として、その古き意味を保持するや否やとの問題の回答に對し、從つて又例へば歐羅巴がアメリカに對して負ひたる巨大なる債務の本質と内容とに關する問題の解答に對して材料を提供するのである。

もとよりこの場合貨幣理論は通、常、一般の時代思潮よりも經濟現象に關係する

ことがより少ないかの如くである。實に吾々はそれが一つの全く固有の發展法則に從ふと云ふことを信ずるであらう。なんとなれば哲學又は法律學、經濟理論又は經濟政策の種々なる影響の下に於て吾々は無數の貨幣論的學說、及學說體系の現はれて居るのを見る。それ等は無限の多樣性あるに拘らず、云はゞ一つの獨立なる內的強制に從ひ、三樣の階梯卽ちヘーゲル的辯證法の三階段に於て相互に築き上げられるものである。

貨幣の第一の大なる根本觀として、シンボリズムが成立する。それは貨幣と貴金屬とを同置することに依り貴金屬を一般的貨幣象徵として、價値章標として、從つてこの意味に於て富の總體として理解する。第一に對する反(アンチテーゼ)として金屬說が成立する。それは同じく貨幣と貴金屬とを混同し、或ひは同置するが、併し貴金屬を、或ひは貨幣を最早一般價値象徵と解さずして寧ろ商品と解する。最後に兩者の合(ジンテーゼ)は名目說である。それは貴金屬を商品と看做すが併し貨幣を價値章標と看做す。

象徵說は去として重商論的著述家連の貨幣觀であつた。金屬說は古典經濟學及マルクス主義の貨幣理論であり又その修正されたる形態に於ては歷史學派及墺太利學派の貨幣理論である。名目論は漸やく最近二十年間にその發達の緖に就いた。この區別はもとより多くの制限を以つて行はれる。多くの重商論的著述家達は明かに貨幣は商品であると云つた。そうして吾々が金屬論者となすことを得る最近の多くの著述家連は貨幣と商品の對立を强調して居る。更に古典經濟學の支配下に於て又は歷史學派並に墺太利學派に於て既に早くも名目論的意見を述べたる若干の著述家が指摘される。にも拘らず金屬論を經て象徵論より名目說に至る大なる發展線は誤認さるべきではない。

貨幣理論

第一編　貨幣の根本觀

第一章　象徴説

第一節　マーカンチリズムと象徴説

十六世紀より十八世紀に至る經濟學の著者は、國家が經濟を指導し、形成する、と云ふ見解に依れば、國家と經濟とは全く分離することのできないものであつて、正しく有機的に相互に結ばれたものの如く、即ち國家の生産力は立法及行政に依つて發展せしめられ、從て交通及商業が益々發展すると彼等は考へた、其の主要點は、總じて商業的なる活動又は經濟的取引就中外國貿易の增大に置かれた。

故にアダム・スミス(Adam Smith)以來、此の全思想範圍を稱して重商制度(Merkantil-

system と名付けた。重商主義（マーカンチリズム）の限界内に於て、或る貨幣學說、即ち貨幣に關する意見が代表され、これがマーカンチリズムにとつて極めて特色あるものである。マーカンチリヂムは、其見解を恐らくそれ自から創造したものでなく、寧ろ其見解を祖述し、そして其學說を一連の思想に附加した。從て、詳說すればマーカンチリズムの大なる反對者アダム・スミスは、恰度此點から出發して重商主義（マーカンチリズム）の見解及論據を破壞せむと企てた程左樣にマーカンチリズムの從來の思想を敷衍した。

もとよりアダム・スミスは重商主義者の見解及學說を破壞することに對して、只だ一定の詭辨論を使用することに依つてのみ成功した。案の如く重商主義者の貨幣論は面目を失して、其面目を回復する事のできなかつたことは、實にスミスの詭辨論の罪であつたと云へよう。

アダム・スミスが重商主義（マーカンチリスト）者を非難した點は、已に其昔アリストテレスがミダス王の傳說を指して、一般に行はれる處の誤謬であると言へる如く指摘したものと同樣な點である。『なぜなれば人々は屢々富を貨幣の中に求めた』とアリストテレスは述べてゐる。（註一）。反之其言ふ如く、富と貨幣とを區別するの必要がある。一般に

說明される事は如何に多くの貨幣を有つて富むものと考へても何物も腹のたしにはならぬと云ふ事が起る、と云ふ事が指摘されるではないか、卽ち昔話しに依れば自分のあくなき希望の爲めに與へられたる一切の物が金に化けたと云ふ、彼のミダス王の經驗した通りに屢々貨幣の所有は餓死するものを助けないところのものである、此事は眞に有意義であると言ふて居る。

これと全く同じ方法でアダム・スミスは、彼の時代の經濟政策的見解に反對した。其見解に對する非難と云ふのは貴金屬の意義を遙かに過重視して、實に貨幣と富とを混同した點が誤謬である。所謂『富者と同樣に富める國は貨幣を過剩に所持する國だと考へられ、然して、金や銀を一國內に推積する事が其國を富ます最も簡單なる方法だと人々は考へてゐる』と。

又他の場所でスミスは英國の貿易に關する權威ある著述者が次の言葉を以つて初めてゐる、卽ち一國の富は金及銀のみならず、其國の土地や家屋や一切の消費物に在る、しかしながら其論の進むに從つて土地や家屋や消費財物が彼の著者の記憶から全く失はれたかの如くであつて、從て以來著述者が使用せる論調は概ね

總ての富が金と銀とであつて、一國民の工業及商業の大なる任務は、それ等の貴金屬の增加であると言ふ前提に基いて居る』と述べて居る。又一般に行はれてゐる見解に從へば、一切の歐羅巴の國民が、あらゆる可能なる方法をつくして、如何にすれば金及銀を推積する事が出來るかと云ふ事の工夫が凝らされた。

此說明、卽ち重商主義者にとつては貨幣が一切の國民經濟的の富の總和であると云ふ說明が、獨逸及英國、就中英國の文獻に於て發達し、遂に學問的常套語となつた。彼れ以前にオイゲン・デューリング(Eugen Dühring)がそうであつた如く、ゾンバルト(Sombart)は此見解に對して抗議した、言ひ換れば彼は重商主義者は金や銀を喰ひ盡し得る如き意見を有つてゐたかの如き見解に對しての抗議であつた。實にマーカンチリズムの見解に於ては屢々貴金屬が國民經濟的なる富の核心として觀察されたかの如き多くの箇所を示す事が出來る。又更にロッシェル(Roscher)と共に言ひ得る如く貴金屬の意義に關して『不明瞭にして熱狂的なる觀念』が表現され多くの場合指摘される、例へばホーネック(Hornick)は——一六八四年——金及銀を名付けて『吾々の最上の血液であり、吾々の力の最も內部的——本質的精髓である』と。

又ロック(Locke)は——一六九一年——金と銀とは一國民の動產の最も確實にして又最も本質的な部分である、從て貴金屬の增加は國民經濟學の極めて重要なる目的である、と言つた。ジョン・ロー(John Law)は——一七〇五年——曰く『一國家の富及力を構成する商業と人口が貨幣の分量と運動とに基ずく』と。ベロニィ(Belloni)も亦同樣に——一七五〇年——貨幣に內在する生產力に就て述べて居る。一七五八年ユスティ(Justi)は『世界の今日の狀態に依れば富は專ら此金屬の所有に歸する』と。多くの重商主義者は貴金屬は通常の商品と尠からず異つて居る事を力說して居る、卽ちジェ・ジィー(J. Gee)は——一七三八年——『貨幣を他の品物と同樣に商品と間違へて考へる人々の頑迷さ』を歎いて居る。

扨て之等又は同樣な言葉から次の如き結論が生れるであらう。重商主義的なる學說そのものは——重商主義者の學說に從へば——貴金屬と富とを同置化するが如く結論するならば、それは全く誤謬である。重商主義者は貨幣が富を『代表する』(repräsentiere)と云ふ見解であるならば彼等は勿論貨幣を商品に對立せしめ、そして現實の財貨に對立せしむる事になる。しかも重商主義者は其事柄に關して

絶へず全く明確に主張したと云ふ譯ではない、しかし尙且つ重商主義者の見解に對して極め不公平であつたアダム・スミスが自から强調する如く重商主義者は多くの場合國家の本來の富が土地と家屋と商品とであると云ふ指示から屢々出發して居るとは言へ、それを常に明瞭に主張したと云ふ譯ではない。しかし多くの場合明確に主張した事は貴金屬は單なる章標(Zeichen)に過ぎない、一つの卽ち『價値の象徴』(Wertsymbol)であると云ふ事であつた。斯くの如き言葉を吾人は例へばメランヒトン(Melanchton)やセバスチアン・フランク(Sebastian Frank)の論文中に散見する事が出來る。モンタナリ(Montanari)か——一六八三年——毛皮の貨幣より證明せむと試みたる事項は、貨幣に本質を與へる爲めの、眞實にして唯一なる形式は國家の權威であると云ふ事であつた。又ロックは——一六九一年——貨幣を目して有價物を獲得する爲めの抵當物(Unterpfand)であつて、金及銀か人間相互間の協約に依つて擬制的價値を有つと云ひ、ダベナント(Davenant)も亦同樣に——一六九九年——尙ほ貴金屬の計算を容易ならしむる爲めの遊戲用の貨幣だと批評した。バークレー(Berkley)は——一七三五年——貨幣の眞の概念は商品や尺度や擔保でなく、寧ろ指圖證(Anweisung)若くは計算標(ticket or counter)であると教へた。モンテスキュー(Montesquieu)は——一七四八年——金及銀を擬制的なる富と名付けた。其後フォルヴォンネ(Forbonnais)も亦——一七五八年——貨幣を評して專ら本源的價値を有する處の商品を流通せしむる單なる手段であると云つて居る。

(註1) Aristoteles: Politik. 1 Buch, 9. Kap.

(註2) Roscher: Grundlagen der Nationalökonomie, 17. Aufl. S. 276ff.; Karl Marx. Das Kapital, 9. Aufl., 1 v. Engels. S. 57——Lavgin, a. a. O.——Hoffmann a. a. O.

第二節　貨幣象徴説

吾人が象徴説と名付けむとした重商主義的貨幣學説を最も明瞭に代表したる者はヒユーム(Hume)——一七五二年——であつた。但し『彼れの一般の經濟政策的見解に依れば彼れは、マーカンチリズムの反對者であつたが』恐らく彼であつたと信ずる。(註三)最も徹底的にヒユームは貨幣の代表的の價値特質を指摘した人である、卽ち『實際には常にその祖國に於て一度も貨幣を見た事のないスシセン人、アナハル

シス(Seythen Anacharsis)の惡賢(ヴルイ)い言葉に依れば、金銀が希臘人に支拂ひと計算とを容易ならしめる以外に役立たない様に思はれたと云ふ事であつた。もとより貨幣は商品及勞働の代表者に過ぎなくして、商品と勞働とを評價し比較する手段に過ぎない事は明かである。鑄貨(金、銀、銅貨)が多量に散在する處には同量の商品を象徴する爲めの鑄貨の大量が必要である。夫故に或國民を個々に觀察すれば大量の貨幣は何等の結果も(善き結果も、惡い結果も)持ち來さないのであると、恰かも一商人の帳簿に於て尠ない書體で濟む處のアラビヤ數字の代りに多くの書體を必要とする處のローマ數字を使用せむとする場合に生ずる區別はないのと殆ど同じである』。斯くの如くにしてヒユームが貨幣と金屬との間を決して區別せず貨幣を價格象徴と解すると云ふ事は極めて明瞭である。

從てヒユームの貨幣論は、彼が導き出した結論に於てでなくとも、尠くとも其内容よりすれば全く象徴説的であり、從て又重商主義的である。なんとなれば彼に依れば全く貨幣量其ものは差別なきものであり、人工的な貨幣を供給する事は無用であると云ふ事である。ヒユームは貴金屬供給に依つて一時經濟に活力を與へると云ふ事に贊成はしたけれ共、畢竟するに次の如く考へた、『一國に貨幣が缺乏すると云ふ事は、一國自身にとつて決して危險ではない、一つの共同團體(コンポリズム)にとつての眞の富は人間と商品とであるから』と。ヒユームは此言葉を以て同時に象徴主義から自由貿易論を追ひ出す必要はないと論じた。勿論以下漸次に論ずる如くに貨幣から其特別の地位を奪ひ取つて、貨幣を總ての商品と同樣に並べた場合に自由貿易の目的はより容易に理解される樣になつた。

更に又反對にある重商主義的著述者達は正しく貴金屬(其の著者にとつては貨幣)は商品であると强調したと抗辨されよう。例へばボーダン(Bolin)は既に——一五八三年——貨幣は他の經濟的財と同樣に價値を失ふ事があり得ると說明した。ヨハン・ヨハキム・ベツヒヤー(Johann Joachim Becher)は——一六六八年——に明かに貨幣を商品と名付けたが、而し勿論それと同時に又『國家の神經とも精神』とも名付けた。又ノース(North)は——一六九一年に——貨幣は供給と需要とが潮の干滿に從ふ處の商品であると云ひ。ペエテイ(Petty)も亦——一七六九年——貨幣の價値を穀物の價値と同樣に生産費より計算せむと試みた。併し根本に於て重商主義者が常に意識し

た事ではないが、而も重商主義者の意見に依れば、彼等の要求及目的の背後には、彼等には貨幣であるところの貴金屬を以て價値標準、又は價値の象徴と解し、若くは商品及富の代表物と解し、又此意義に於てのみ——專ら此意義に於てのみ——富の總體概念として理解した。唯だかくてのみ——一體に國民經濟的なる考慮に基いた限りに於て——貴金屬供給の重商主義的なる政策が理解されるのであらう。斯様に需要制限を行はず、專ら金と銀とを能ふ限り多量に一國内に引き入れる事に對して忠實であつた重商主義政策は、總じて國民經濟學的な想察に基いた限りに於て貴金屬供給のマーカンチリズムを了解したのであつた。然もこれは或は直接な方法に依るも『貨幣均衡制度』(Geldbilanzsystem) 或は極めて有利なる輸出超過を齎す事を以て『商業均衡制度』(Handelsbilanzsystem)に依るもかまわず、其場合は一方に於ては其目的を工業の促進に依つて遂行し、又他方に於ては其目的を外國貿易の促進に依つて達成せむと努力する。

斯る努力は重商主義者に於て象徴的なる貨幣見解を前提しなければ全く明かにされないであらう。なんとなれば例へば重商主義者が實際に貴金屬を一つの

商品と看做さむとするならば、重商主義者は必らず貨幣需要に——各々具體的なる貨幣需要と同樣——制限が畫される、と云ふ結果に到達すべき筈であらう。然し其の意見は重商主義者の考へなかつた處である、けれ共象徴説的貨幣觀より出發すれば貨幣需要に關する問題に對して——ヒュームと共に貨幣數量そのものは無差別であると結論しないならば——只だ一つの答へあるのみ。卽ち『個々の國民經濟の爲めにはなるべく多くの貨幣量が望ましい』と云ふ答へである。其の結論は重商主義者と共に國民經濟と世界經濟の一部分として而も實に私人企業の如く看做す場合にのみ可能である。

併しながら特に重商主義者の數量説に對して象徴主義的貨幣見解を基礎付けないで、そして總貨幣量と總財貨量との間の價値均衡を是認する處の重商主義者の數量説を了解する事が出來るであらうか——ダバンツアティ(Davanzati)の『地球上の總ての物は現存する金、銀、銅と等しい』と云ふ命題を思ひ浮べて見るがよい。又ロック(Locke)の『一方の皿に總ての商品を盛り、他方の皿に總ての貨幣を盛りたる天秤の比喩』に依つて此の思想を説明せむとした試みをも思ひ浮べて見るがよい。

一般に貨幣を只價値象徴として、だが價値それ自體としては理解しなく、又指圖證券の一種類とし、商品としては解しない場合には、かゝる方程式を建る事が出來ようと思ふ。貨幣が人間から左程に高く評價されない理由は特定品質の貴金屬の一個片を現はすが故に、人間が交換取引に於て自分が與へた物に對して同額の物を得ると云ふ爲めには貨幣が一つの擔保となるから評價されると云ふ事を、偶々ロックが直接に表はした事に依つて想ひ起されるであらう。

ジユモラー(Schmoller)が其著述を重商主義の絶項だと考へたジエームス・スチアート(James Steuart)は、同時に强く貨幣の象徴的特質を力說した。其際同著述に於て彼は既に貨幣と商品(卽ち金銀)との間を全く分離した。玆に於て乎最後の偉大なる重商主義者を同時に名目主義の最先驅者と名付ける事を得た。彼は又計算貨幣(Recheng ld)に就て說明せる章下に『斯くの如く金屬、卽ち貨幣(Geld)と鑄貨(Münzen)とは其の根本に於て全く多樣であるに拘らず、貨幣と鑄貨とは正しく同樣なる意味に在る限りに於て長く貨幣として役立つた。いま吾々が貨幣を論ずるに當り特別に二つの觀念から區別せねばならぬ。若し之を混同するならば必ずや全

對象を不明確ならしむるに至るであらう。

吾人が計算貨幣と名付ける處のものは、賣買物の關係的價値の測定に對して案出されたる任意に等分される尺度に他ならぬ。その結果計算貨幣は價格である鑄貨と殆ど全く異つたものであつて、從て又其の計算貨幣が總ての商品にとつて尺度となり、比例上の等價物を與へる事の出來る何物でもない場合には、そは存在する事を得る』。

(註三) 重商主義の貨幣說は通常金屬說とも稱せられる、これは明かに貨幣と貴金屬とを同一視したる結果である。しかれ共古典學者は同時に金屬說としての特徵を表はす貨幣理論から之れを根本に於て區別する。從て古典學者にとつては貴金屬は商品であるが、然し重商論者にとつては商品章標(Warenzeichen)である。

第三節　原理の擴張(富としての貨幣)

若し吾々が象徵說をマーカンチリズムの貨幣學說と名付けるならば、次の制限が必要である。貨幣學說は屢々重商主義的著述から直接且つ明解に代表されて居ると云ふよりも、寧ろ間接に無意識的に代表されて居ると謂ふ制限を必要とす

る。象徴主義(Symbolismus)の貨幣見解にヒユームが與へた處の明解なる定義に於てもスチアートに依り象徴主義の貨幣見解が經驗した處を一層深める事に於ても、全く象徴學説は他の人々に由つては殆ど説明されなかつた。

否屢々科學的なる思索の低い段階にあるとは云へ、貨幣と富の同置の素朴なる形式に於て象徴學説は示されたのであつた。それ故に貨幣は一切の象徴が容易にそれに從ふ處の運命に從ふ、總ての象徴が容易に代表するところのものとして考へられる處である。卽ち貨幣が代表すると云ふ思索からは富(Reichtum)を意味し、貨幣は財産(Vermögen)であり、貨幣は富(Reichtum)であると云ふ見解が容易に成立する。若しも吾々が章標(Zeichen)と本質(Wesen)との混同、及び假象(Schein)と存在(Sein)との混同又は概念(Begriff)と事實(Tatsache)との混同である處のものであるならば、其は恐らく一般的、心理學的の衝動である。この衝動は個人の極めて幼稚なる時代に於て、そして文化の初期に於て強く顯はれた處のものである。人類學者は自然民族(Naturvölkern)に於て象徴が如何なる役目を遂行したかを教へてゐる。この傾向は歐羅巴の文化史(Geistesgeschichte)の各方面に亘て探及する事は無駄な骨折りであらう。從つて恐らく明かであらうと思ふ事は變態な教義(Dogma)卽ち中世の煩瑣(スコラ)哲學の實在論や、又は國家と王位の覇持者の同置としての形式に於ける(ルイ十四世の朕は國家也)(L'état c'est moi代表の國法的思想と云ふものは貨幣の重商主義的見解と同一の心理的根據を有するものである。その見解は象徴(シンボール)(Symbols)の粗野に物化する事に依つて、結局貨幣は富それ自體であるとの見解にまで變形したまでである。この變形に於てのみアダム・スミスの與へたる説明が一致するのである、との純粋なる形態に於て貨幣の象徴論的特質がしかも全く意識されてゐる。

第二章　金屬說

第一節　金屬說の成立

君主が神秘的な而も中世的な威名を失墜して一般市民の中に下つた佛蘭西革命時代に於ては貨幣も亦單純なる商品に下つて、君主概念と貨幣概念とは同時に其象徴的品性と云ふ衣を脫ぎ捨てた。が而し同時に『朕は國家なり』(L'état c'est moi.)と言はれた古い君主思想の象徴の唯物化に當面して勃落した如く、又象徴的貨幣理論の唯物化も亦貨幣は商品なりとの考察を餘儀なくせしめられた。吾々が若し人間思想の一切の規制の發展に於ける細かひ關係に立ち入らむとするならば此の書の埒外に逸出するであらう。又斯くして國法的及經濟理論的思想構成に於ける最も固有なる比較を指示する事は無駄な思想遊戲の結果として印される危險を犯す事になるであらう。從て吾々は政治的個人主義並に自由主義から發生した自由貿易學說が既にアダム・スミスの許に新しい貨幣理論に對立するに至り、否實に貨幣に關する全く新しい根本觀を樹立するに至つたと云ふ斷定を以て

滿足する。故に叙上の事項は國民經濟學史上に於ける新時代の發端であつたのみならず、又アダム・スミスが『諸國民の富』に關する彼の大著述を公表するや、特に貨幣學說史上に於ても其最初であつた。なる程吾々が已に觀察した如くスミス以前に多くのマーカンチリズムの著者は、屢々貨幣を以て商品と呼んで來た。カンチロン(Cantillon)さへ——一七五五年——極めて明瞭に『貨幣は契約に依つて價値を有する』と、云ふロック(Locke)の理論に對して抗議すると共に、貨幣に對して他のあらゆる商品の如くに專ら一つの價値を與へたに過ぎなかつた。しかしアダム・スミスは最初貨幣は經濟財に他ならない、と云ふ命題から完全なる理論的推論を導き出したる人であつて、その故を以てクナップ(Knapp)が彼れの貨幣論を名付けた如く、金屬說の創造者となつたのである。吾々はこの呼稱を容認するけれ共クナップと全く異れる意義に於て使用する。卽ちクナップは科學的な論爭の理由からしてその呼稱を以て直接に貨幣と金屬との混同と解して居るが、これに反して我々は其呼稱を以て貨幣職能を直接にその素材價値に歸せむとする限りに於て貨幣と金屬とを混同せんとする總ての貨幣理論、或は貨幣をその商品性質の點より

して金屬に同置せむとする總ての貨幣理論を意味するのである。

第二節　アダム・スミスに於ける商品としての貨幣

アダム・スミスの貨幣學說は彼れがマーカンチリズムに反對したる全論證と最も密接に關係する。否彼れの貨幣學說はマーカンチリズムの商業政策に反對する論戰及其根本に横たはる處の有利なる貿易均衡の意義に關する思想を獲得せむとする努力より出發したと恐らくは言ひ得るであらう。

アダム・スミスは金屬の保存或は增加は『總ての他の有用なる商品を保存し、增加するよりもより多く政府の注意を要する』と言ふ假說を詭辨的(Sophistisch)に論じた。從て彼れはアメリカの金銀寶庫の開發に於て專ら歐羅巴に對してのみ或る幾分の利益を見たに過ぎない。卽ちそうなると、それに應じて金銀貯藏がより多く生產され得ると云ふ事の利益である。けれ共通貨政策的には貴金屬の增加は寧ろ一つの損害であらう、なんとなれば金及銀はその價値下落の結果は以前よりは鑄貨としてより一層不適當であらう。卽ち買手は今や以前と同樣なる目的を達する爲めにより大なる量を負擔しなければならぬであらうから、『不必要なる金銀の輸入又は金屬の保留に依つて一國の富を增大せんとする事は、恰かも一家族がより一層美しい食卓を圍まむが爲めに不必要なる數量の食料貯藏を維持する事を家族に强ゆると同樣に愚なことではないか』と。

アダム・スミスはこの觀念を徹底的に固執して機械並に商品貯藏とならんで貨幣を「社會の總資本」(Gesamtkapitals der Gesellschaft)の一部分として居る。從て彼れにとつて貨幣は金屬と同樣單純に一つの商品である。それに依つて彼れは自己の經濟政策上の思想の普及に對する有利なる出發點を得た。もとより彼れは又象徵論的貨幣觀を承認する事に依つて、ヒュームの前例に從つて貨幣の數量それ自體は無關係であつて、其結果貴金屬の供給に向けられたる貿易政策は誤りであると云ふ結論に達する事を得たであらう。而も其後スミスの議論は確實性を持つことが困難であつたらう、或はそれが專ら貨幣を價値章標(Wertzeichen)であると言ふ思想は了解されなかつたか、然らずむばアダム・スミスに依つて否認され貨幣及富の混同に歸することになるであらう。

アダム・スミスは自ら尚全く象徴主義の貨幣理論から脫して居なかつたと言ふことは彼れの說明の若干が物語て居る。例へば彼の貨幣に關する第二編目の第二章に『貨幣に依て社會の總所得が分配されるのであるが、結局に於てこの所得の一部分であり且貨幣の媒介に依つて流通する財貨より嚴密に區別されねばならぬ』と述べて居る。更にスミスは『社會の所得は專ら財貨に存立して、それに依つて以て財貨が流出する車輪に存するのではない』と述べ、又其後には『何人にとつても貨幣は貨幣に於て支拂はれないで一箇のギニー(Guinee)(英國の往時の貨幣)に對する毎週の手形(Anweisung)として支拂はれるであらうならば、彼れの所得は一片の紙片に存するのではなくて、寧ろそれに依つて得ることの出來るであらうものに存するのである。其處で一ギニーは最寄りの總商人に對して提出されたる一定量の生活手段並に享樂手段に對する手形として看做される。それを支拂はれる人の所得は金貨に於ても、彼れがそれに代へて所有し得る處のものにも、又はそれと交換し得るものにも存しない。若し金貨が何物とも交換され得ないならば、それは恰かも破產商人の手形と同樣に殆ど效果なき紙であつて同時に何等の價値も有しない』と說明して居る。

もとより金屬說の根本思想はそれが應用に當つて最も困難なる場合、そして從つて單に技術的構成に依つてのみ收受することが出來る樣な場合に、即ち信用の範圍に於て最も鋭く現はれて居る。この場合にこの觀察方法を押し通して行けば行くほど、アダム・スミスはマーカンチリストと共に貨幣と金屬との間を根本的に區別しなかつたことになる。勿論スミスは紙幣に就ても亦述べると同時に銀行券をも紙幣の最も顯著なる種類として示したのであるが、スミスは國民經濟上の意義を非常に高く評價した。『金、銀貨に代へて紙を代置する事は非常に高價な交易手段を僅かしかかゝらぬ、そうして屢々好都合なる交易手段に依つて置き代へることになる。流通は新しい車輪に依つて動き之が生產並に保持は古い車輪の場合よりも一層費用がかゝらなくなる』と。それにも拘らずスミスに依れば銀行券は唯一つの補充物に過ぎないのであつて『常に貨幣がその爲にもたなければならない信用に依つて金銀貨と同樣な流通能力』を得る。アダム・スミスはたとへ銀行券を紙幣とも名付けて居るとは言へ、彼れは銀行券を以つて固有の貨幣とは

看做して居ない。なぜなれば『一國内に容易に流通し得る總ての種類の貨幣は一括してそれ等の紙幣がその代りとなつて居る金銀或は商取引を平等のものと考へ、紙幣が存在しないならば流通するであらう處の金銀の價値以上の額になることを得ないからである』と。

惟ふにアダム・スミスに依つて代表される貨幣學説は其の後繼者に依つて更に二つの方面に發展した。一方に於てはリカルドー(Ricardo)、シニオール(Senior)、ジョン・スチアート・ミル(John Stuart Mill)並にカール・マルクスに依つて構成されたる貨幣の勞働價値學説が成立し、他方に於てはクニース(Knies)に依つて基礎付けられたる貨幣の使用價値學説が成立した。

第三節　貨幣の勞働價値學説

リカルドーも亦アダム・スミスと同じく貨幣を貴金屬と同視し、そしてそれを商品と看做して居る。リカルドーはマルサスに書を送つて曰く『貨幣並に商品の價値決定及その輸入輸出を規定する法則に關する限りに於ては貨幣と他の總ての商品との間の區別は存しない』と。又彼れは其著經濟原論に於て曰ふには『金も銀も共に他の總ての財と同樣に金銀を生産し、又市場に送り出す爲めに必要なる勞働量に比例してのみ價値を有するものである。即ち金が銀よりも約十五倍程高價であると云ふのは金に對する需要の大なるが爲めに非ず、又銀の供給が金の供給よりも十五倍量なりと云ふにも非ずして、專らその金の一定量の生産に十五倍の勞働量を必要とするからである』と。又リカルドーは他の場合に於て『もとより勞賃並に資本利潤、從つて生産費を決定的なものとして居る』と。總じてリカルドーは彼れの貨幣論に於て首尾一貫したものではない。彼れは一般に貨幣と貴金屬とを區別しなかつた、とは云へ彼れはひとたび鑄貨は鑄造料に依つて鑄造せざる金屬片とは異なると說明し、進んで貨幣量が貨幣價値を決定すると說く。故にリカルドーに從へば貨幣價値は金屬貨の價値に於ては信用手段の利用に就中銀行券の流通に依存し、また紙幣貨の價値の場合に於ては貨幣は單純に其數量の制限に依つて一つの價値を保存すると。かくて紙で造られたる流通手段は途方もなく高い造幣料を基礎として貨幣價値の極めて高度に於ける造幣料がそれに依

存するところの貨幣個片(Geldstücke)として解され得る。惡貨も亦呼稱價値(Nennwert)に適應する限度の數量に於て流通し得る。從て吾人はリカルドーの場合に於ても又象徴說的貨幣見解の重要なる證跡を發見する。(註四)

リカルドーに依存しつゝ、しかも彼れよりも一層徹底的にナッソア・ダブリュー・シニオール(Nassau W. Senior)が——一八二九年——に試みたる『貨幣の價値』(Wert des Geldes)に關する三つの講義に於て、又——一八三〇年——に發表した『貨幣生産費論』(Kosten des Geldbeschaffung)の講義に於て、貨幣の價値が內部的原因に關係する限り、永きに渡りて見るならば生産費に依つてのみ決定するであらう、と謂ふ見解を代表して居る。彼れは極めて根本的なる研究に於て此の命題を種々なる方面より明瞭にした。

ジョン・スチアート・ミルは——一八四八年——其著『經濟原論』(Grundsätzen der Politischen Ökonomie)に於て、其重要點に就てリカルドーの貨幣論並に貨幣價値は貴金屬の生產費に依存する、とのシニオールの說明に同意して居る。彼れは『每週及每年誰でもが得るポンド若くはシルリングは決して彼等の本來の所得ではない、と說明して居る場合に强く象徴說的見解を述べて居る。卽ちポンド又はシルリングは人々が任意に商店で支拂ひに差出す事が出來、そうしてあらゆる希望の商品の正當の一定量を得る事ができる一種の切符又は證券である』と。

故に古典學派の金屬說は其の觀念通りには完成されなかつた。金屬說は完全に象徴說的貨幣見解から脫することが出來ず、又貨幣の價値は勞働又は費用に依つて決定されると云ふ根本思想を完全に純粹なものに發展さすことは能なかつた。勞働量とは何を意味するかは明瞭ではなかつたし、勞働及び勞働に對する代償との間も判然と區別されては居なかつた。カール・マルクスは初めて——一八六七年——『資本論』(Das Kapital)を出版したが——それ自體の中に矛盾なくして創り上げられた貨幣の勞働價値學說を代表して居る。彼れの學說は嚴格な第一の金屬說的貨幣學說であり、クニースの使用價値學說の中に第二のものを認めるであらう。

カール・マルクスは說明して居る。『貨幣は商品である』と云ふ事は『夫故に貨幣の完成されたる形態より出發して、其後に貨幣を分析せむとするものにとつて一の發見たるに止まる。交換過程はそれがこれを貨幣に轉化する處の商品に其價値

を與へずして寧ろその特種形態を與へる。この兩者の規定を混同するならば金、銀の價値を想像上のものと考へる誤りをおかすであらう。貨幣はその一定の職能に於ける貨幣はそれ自身の單なる章標(Zeichen)に依つて代置され得るが故に、貨幣は單なる章標であるとの別な他の誤謬を生じた』と(資本論五十六頁)。

更にマルクスは說明して『あらゆる商品と同樣に貨幣はそれ自身の價値量(Wertgrösse)を唯相對的に商品で表現し得る。貨幣自身の價値はその生產する爲めに要する勞働時間に依つて決定され、又其中に同じ長さの勞働時間が夫に凝結して居る處の總ゆる他の商品の數量を以て表はされる』と(資本論五十七頁)。敍上のことを彼れは詳細に次の如くに說明した。即ち『金の第一の職能は商品世界にその價値表現の材料を提供し、又は商品價値を同一名稱の量として卽ち質的に平等な且量的に比較し得る量として示す點に存する。かくて金は價値の一般尺度として職能を現はし、そして唯此の職能に依つてのみ特種なる等價商品たる金は初て貨幣となる。商品は決して貨幣に依つて通約されるのではない、寧ろその反對である。總ての商品は價値としては對象化されたる人間勞働、從つてそれ自體

通約し得るが故に商品はその價値を同一の特種商品に於て共通に計られ、そうして之等はそれに依つてその特種の商品を自からの共通な價値尺度、卽ち貨幣に轉化することが出來得るのである。價値尺度としての貨幣は商品に內在的なる價値尺度の・勞働時間の・必然的な現象形態である』と(資本論五十九頁)。

譯者註 (1) カウツキイ版には金(Gold)とある。

マルクスは流通過程に於て貨幣と金とは別々に分離し得られる事を見逃さなかつた。卽ち『若も貨幣流通自體が鑄貨(Münze)の名義上の成分(Nominalgehalt)より實質成分(Realgehalt)を分ち、卽ち其職能上の存在より金屬存在を分離するならば貨幣流通は鑄貨たる職能に於ける金屬貨幣を他の素材から造られたる標號(Marke)又は象徵に依て代へらるへき可能性を潛在的に保持して居る』と(資本論八十九頁)。

マルクスは又通用最輕量(Passiergewicht)及補助貨幣(Scheidmünze)に關する法律的決定は貨幣の象徵的特質の承認を表はすと云ふことを示して居る。從つて彼れが更に進んで『金屬の貨幣標號(Geldmarken)に於ては尙ほ多少純粹なる象徵的性質を藏する。紙幣に於てはそれは外觀的に顯はれて居る』と(資本論九十頁)。しかれ共

マルクスも亦アダム・スミスと同じく紙幣の中に金屬の代用物を觀て居る。『紙幣流通の特別法則はそれが金を代表する割合からのみ生ずるを得る』と。(資本論九十一頁)。『紙幣は金の章標(Goldzeichen)又は貨幣章標(Geldzeichen)である。商品價値に對する其關係は、それが觀念上紙幣に依つて象徴的、感覺的に示されたると同額の金量に表現される點に存する。紙幣が金量を代表する限りに於てのみ、總ての他の商品量と同樣に價値量である處のそれは價値章標(Wertzeichn)である』と(資本論九十二頁)。貨幣の勞働價値學說の其後の代表者はヒルファデイング(Hilferding)とオッペンハイマー(Oppenheimer)とであつて、前者はカール・マルクスの貨幣論の發展に於て、後者は勞働價値說の洗練に於ての代表者である。

(註四) リカルドーの貨幣論に於ける不統一は彼れか其見解を種々な著述に書いたと云ふ點から明かである。第一に《貴金屬の高價と銀行券の價値下落の論證》と云ふ、彼れの一八〇九年に著したる研究に於て、其後一八一一年ボサンケエ(Bosanque)に送つた論爭論文に於て、更に一八一六年に發表したる《提案》及終りに一八一七年に公表せる《國民經濟及租稅原理》等に於てである。

第四節　貨幣の使用價値學說

古典學派の金屬的貨幣說がカアール・マルクスに依り勞働價値說に於て爲されたる完成と、徹底的なる研究を以つてより一層明瞭にカール・クニース(Karl Knies)に依つて爲し遂げられた貨幣の使用價値說とは好一對である。

勞働價値學說は自然的に一步進んだ疑問を生んだ。卽ち勞働費用(Arbeitaufwand)が價値を決定すると云ふ假說を以て滿足することなく、財貨を生產するに一定の犧牲が拂はれると云ふ事は如何にして起つたかを更に進んで研究した。この疑問こそ使用價値の概念に到達する處のものであつた。

アダム・スミス自身は明瞭に使用價値を專ら効用と同置した、卽ち彼れは効用の他に稀小性の契機をも抱括してゐる使用價値に關する後の時代の概念を知らなかつた。爾來佛蘭西並に英國の文献が一般に使用價値學說を長ひ間その觀察の範圍から遠ざけて居た間、及獨逸の社會主義の文献も亦使用價値概念を輕視して居たのであるが、あたかも使用價値學說の爲めに周到なる注意を深く育ぐむこと

に献身した獨逸並に墺太利に於ける所謂『ブルジョア的』(bürgerliche)經濟學に依つて使用價値學說が漸次に仕上げられて、遂に限界効用學說となつてより高度の完成を見た。ラアウ(Rau)シエフレー(Schäffle)及メンガー(Menger)に依る價値論はこの途上に於ける重要な段階にあつた。(註五)しかれ共使用價値概念の發達が完成されるより以前、已にクニースは――一八七三年初版――其著述に於て使用價値を彼れの學說の根本と爲した。

クニースは古典學派及カール・マルクスと同じく貨幣を商品と解する。『貨幣は物を測定する爲めの、換言すれば或一定の量的に決定し得る目的物として、即ち量的比例を確定する爲めに測定さるべきもののそれ自體を一定の特種なる量に於て占むる處の其の後の對象物のみを計量器として、即ち計量手段として利用することが出來る自然法則的必然性である』,クニース貨幣論(Das Geld)一四七頁)。長さは長さを以つて、平面は唯平面を以つて、重さは重さを以つてのみ計られ得る。『だからたとへ種々の具體的財貨を抱括する經濟價値の特種量が一般に評價され又測定されることが出來又出來なければならぬならば、そうしてその限りに於てはそれは專らそれ自體經濟價値を有ち、即ちそれ自體經濟財である處の對象物に依つてのみ可能な事である』。『從て更に貨幣の何たるかを說明せむとするならばそれに依つて經濟價値を表章し、評價し、そして測定されると云ふ意義に於ける貨幣は專ら一つの價値對象であり、即ち自己の經濟的價値を有する處の一つのものに他ならない』(クニース貨幣論一四八頁)。もとより價値は貨幣箇片(Geldstücke)の重量に依らなく『寧ろ貨幣の價値に依る』。即ちその重量に關して決定される貨幣箇片の價値量に依つて測定される』(クニース貨幣論一五〇頁)。

併しながらかゝる價値の根據は何處に存在するか？　マルクスが人間の勞働がこの價値を創造するものと考へるならばそれは誤りであらう。吾々の慾求が『パン、靴、書物等に依つて滿足されるのは彼等の中には勞働が藏されて居るが故ではないのは、恰かも吾々が太陽の光線、水、又は空氣を求め、用ふる場合之れ等の中に少しも勞働が含まれてないが故では同じである』(クニースの貨幣論一五六頁)。唯勞働が使用價値を形成する限りに於てのみ勞働は價値を創造する。そうして貨幣の交換價値も亦或る使用價値に基ずく、從て商品と貨幣とは双方の

側の使用價値に應じて相互に交換される。もとより之れは唯々『共通の使用價値』に還元する事に依つてのみ可能である、(クニースの貨幣論一六〇頁)。『しかも總ての種々なる使用財貨は、使用財貨としての共通の單位を有することは今や事實である』と、(クニースの貨幣論一六〇頁)。

已にカール・マルクスが徹底的に力說した如く使用價値に取つては普編妥當な公分母が存在しなひが故に、クニースはもとよりこの使用價値のこの單位に關して何等詳細に述べることを得なかつたのである。

この故に使用價値の概念を貨幣に當嵌める事には成功しなかつた、又此處から價格理論を構成した場合も同樣成就されなかつた。なる程限界効用理論(Grenznutzentheorie)は鋭くこの概念を分析した、が而かも正にその場合使用價値は財貨から直ちに貨幣に移し得られないと云ふことが發見せられた。

(註五) Böhm-Bawerk: Artikel, Wert" i. Hd St. Bd. 8. S. 159.

第五節　現代に於ける嚴格なる金屬主義の普及

獨逸國に於ては今日も尙金屬主義の傳統を嚴格に墨守せむとする者は尠い。即ち貨幣單位は一定の重量單位としての貴金屬以上のものに他ならず、總て硬貨(Münzstück)は商品が一般的交換財として職務を遂行し且つ其商品の價値が他の財貨の價値の計量に役立つところの商品である、と解するものである。今日獨逸の經濟學者ロッツ(Lotz)とデール(Diehl)とはこの見解に最も接近して居る、ロッツは國民經濟辭典に於て、卽ち極めて影響の多ひ文獻に於て彼れの貨幣觀を代表したが、それは意識的に名目說に對立して金屬的な立場に立つて居る。彼れが貨幣として觀察する處のものは一般的交換手段として、又一般的價値尺度として、又價値貯藏手段として、又價値輸送手段として職能を遂行する處のものである。ロッツに從へば支拂ひにあたつて貨幣はその素材價値に依つて貨幣自身を受け取る。彼れは曰ふ『たとひ二十マルクの錢を要求する處の人は又二十マルクの錢を他の有用物若くは勞務に代へて受け取る爲めに、それを有たむと欲するとも、而かも今日の經濟制度の貨幣を、生產手段並に享樂手段に對する指圖證券として示すことは誤謬である』と、(九九〇頁)。又紙幣經濟の場合に於ても貴金屬は其性質上價値

尺度として排除されるものではない。吾々は成る程紙幣單位で計算するけれ共しかし實際には紙幣單位の價値を再び更に流通場裡より消失し動搖する處の價格で以つて紙幣單位に依り支拂はれる貴金屬で再び其價値を測定するであらう、(九九三頁)。

デールも同樣に現今の經濟制度に於て素材價値なき貨幣は不可能であらうと云ふ見解である。嚴格に金屬主義的見解を代表する處の著述者はリヒアード・ヒルデブラント(Richard Hildebrand)であつて又大體に於てアルフレッド・ランスブルグ(Alfred. Lansburgh)とせられて居る。

けれ共 今この金屬主義の理論は一般に行はれない、殊に獨逸國に於ては殆ど存しない。尤も佛蘭西國に於ては金屬主義が尙確かに指導的なる如くである。今若し十九世紀の中葉に於ける佛蘭西の國民經濟學の文獻に一瞥を投ずるならば其文獻は一般經濟學に於ける如く貨幣理論に於ても亦古典學派に密接に依頼することが明瞭であらう。金屬說の傳統を嚴密に遵奉する者はシュバリエー(Chevalier)とクルセルシエヌイ(Courcelle-Seneuil)とである。余(Wagemann)の見る限りでは新らしい佛蘭西の著作者も亦全く金屬主義的な方向を辿つて居る、就中佛蘭西の有力なる經濟學者ルロア・ボリュー(Leroy-Beaulieu)は其著『經濟學の理論と實際』(Traité théorique et pratique d'économie politique)の第三卷に於て有力に物語つて居る、其の著述の一版は一八九六年に公表されたのであるが。

とのことは同樣にモーリス・ブロック(Maurice Blok)の『アダム・スミス以來の經濟學の進歩』(„Les progrès de la science économique depuis Adam Smith"2.Bd., Kap 23,2. Aufl.,1897.)並にアルノーネ(Arnaune)の『貨幣,信用,交換』(La monnaie, le crédit et le change), 1894,3. Aufl.,1906.)に於て同樣に當て嵌る。この書は佛蘭西に於てレオンセイ(Léon Say)及レオンカェアン(Lyoncaen)の兩氏の批評から生じたる如く大なる賞讃を博した。これに反して他の意見は顯著に現はれて居ない、卽ち貨幣は全く商品と異つた法則に從ひ而も硬貨は消耗するに拘らず『法律がそれに一定の價値を與へて居る』が故にその通用力を有つて居ると云ふことを其著貨幣問題(La question monétaire 一八九四年)に於て極めて徹底的に力說した處のボアンサー(Poinsard)の見解の如き、又は『貨幣は價値を下落するであらうか?(La monnaie peut-elle etre supprimee?)と

云ふ論文『國際經濟年報』(Revue économique internationale, 1908 發行)に於てクナップを引用したるアンシオ(Ansiaux)の如きに過ぎない。

今日英國又はアメリカの文献に於ても亦嚴格なる金屬主義が大多數の後繼者を有する。即ち一部分は寧ろシエボンス(Jevons)の所謂『貨幣と交換の機構』—一八八九年—たる限界効用理論により、より多く關連を有つ。その金屬主義者には特にラウリン(Laughlin)の卓越せる著述である處の貨幣原理論(一九〇三年)を數へる。修正的の金屬主義特に紙幣の職能價値學說を代表するものは『貨幣論』(Money, 1878.)の著者ウヲーカー(Walker)である。英國及アメリカの著作者は數量說(Quantitätstheorie)を徹底的に固執することに依つて金屬主義から分離する。けれ共稀には著者は例へばホートレー(Hawtrey)の『通貨と信用』(Currency and credit, 1919.)に於ける如き、明瞭なる名目主義的方向を辿つて居る著述家もある。又著明なるシュエーデンの國民經濟學者ウイックゼル(Wicksell)並にカッセル(Cassel)も亦金屬主義的思想から出發して數量理論に達し、從て同時に名目主義的見解に到達した。

第六節　金屬說の新たなる修正

今日は獨乙に於ける多くの貨幣理論家に依つて本來の形式から二つの點に於て異る處の金屬論的貨幣理論の改善されたる形式が代表される。

しかも第一に彼等貨幣理論家は貨幣と商品との間に、從て又貨幣と貨幣素材との間をも嚴格に區別する限りに於て代表されて居る。また次には彼等理論家は其の通用價値が貴金屬の價値との、あらゆる直接的なる關係を失つた素材價値のない貨幣が存在すると云ふことを承認する限りに於て代表された。從て彼等に取つては貨幣は金屬と同樣に商品ではあるが、もつとも異れる種類(verschiedener Art)の商品である。

すでに古い金屬論者は時として貨幣と商品との間の區別に就て指摘した。けれ共最近數十年に於て漸く一般的に—大體に於て古典派の貨幣學說を固執する學者に於ても然りであるが—貨幣商品間の區別を强調することが行はれ普通のようになつた。

貨幣に就ての誤れる理論は貨幣を商品より以下のものと考へる理論の中に、あるひは貨幣を商品より以上のものと考へる理論の中に集められると云ふ命題を嘗て提出した處のロッシャー(Roscher)すら、他の場合に於て——しかもこの矛盾の爲めマルクスから嘲笑されたのであるが(註六)——貨幣は他の商品から區別する處の特性を有すると云ふことを指摘して居る。ヒルデブラント(B. Hildebrand)は——一八八三年に公表したる『貨幣理論』(Theorie des Geldes)に於て特に力強く貨幣と商品との對立を指摘し、且つ全く不等にもこの思想に對する優位を要求し得ると信じた。しかるにこの思想は最早顧られなかつた。他の經濟的客體は消費に役立つが、貨幣は流通の爲めに決定されて居ると云ふことが强調された。かくてヘルフェリッヒは商品はそれ自からの爲めに獲得されるけれ共貨幣は又更に與へられる爲めにのみ獲得されると說明して居る(註七)。

夫故に一つの客體は消費財貨たる事を得るし、又貨幣たることを得るが同時に兩者たることを得ない。けれ共貨幣と商品との間に全く强ひ境界線は引かれない。而も要するに何時でも商品に交換され得る處の完全な價値を有する金屬貨幣は固有の貨幣と看做される。

偖て嚴格なる金屬論的な貨幣觀よりの第二の異說が重要である、卽ち其商品價値から誘離されたる貨幣價値を容認するものである。そこには已にリカルドーの場合に其萠芽を見出したところの職能價値(Funktionswert)の概念が發生した。この概念の助力を以つて素材價値を有たず或はその流通に適應しない處の素材價値をすら有せずして支拂ひに當てられる處の貨幣が存在すると云ふ特種な現象を了解せんと試みられた。若ひとたび貨幣と商品との間を嚴格に區別せむとするならば商品の價値根據は貨幣の價値根據と異なるといふ觀念に容易に到達する。併しながら今や貨幣と商品とはそれにも拘らず相互に交換されると云ふことは如何に可能なるや？と云ふ問題が發生する。總ての交換運動の發動力が常に專ら交換に依つて、より高度の價値を追及せむとする經濟主體の努力に於てのみ存在すると云ふ思想を吾々が固持する限りに於ては、そして貨幣に對する商品提供あるひは商品に對する貨幣の提供を交換事象として觀察する限りに於ては、而かも其價値根據は異つたものであるとは雖も貨幣も亦商品と同種の價値を

有しなければならぬと云ふ見解に結就せざるを得ない。

偖て此處に在る矛盾を一つの、より高ひ統一に導かんとする職能價値の概念を提出することである。價値は稀小性(Seltenheit)と効用性(Nützlichkeit)との結合であると云はれて居た。卽ち數量制限は經濟財貨の場合に於けると同じく又素材價値なき貨幣の場合にも存在し、またもしそれが流通すべきものであるならば存在せねばならぬ。けれ共紙幣(Zettelgeld)の効用は何處に存在するか？　この問ひに對しては貨幣職能自身の中に存すると答へなければならぬと信ぜられて居た。もとよりこの場合には効用性の概念が商品の場合には私經濟的に理解されるけれ共、貨幣の場合に於ては國民經濟的意義に理解されると云ふことを看過し若くは意識的に其事實を飛躍した。

職能價値の概念は通常素材價値概念に代つて補充的に提出される。從つて人々は出來得る限り貨幣價値を貴金屬價値の助けを以て說明せむと試み、而して金屬根據を缺く場合に於てのみ純粹なる職能概念にたよつた。もとより之れと並むで充分な重量を有する金屬貨幣も亦——貨幣職能自身に依つて——特別に評價されると云ふことが屢々唱へられた。この思想は時として恐らく總ての金屬論者に於て又嚴密な金屬論者に於ても顯れて居る。けれ共この思想は明白に一つの循還論法を意味するが故に好んで退ぞけられる。

職能價値概念の發達と共に金屬論はすでに全く克服されざるや否やと云ふことが問題となり得るであらう。けれ共そのことは問題にならない。なんとなれば名目論は商品に代へて貨幣を提供することはそれ自體獨立なる二つの價値交換であるかの如き觀念の完全な排除に依つてはじめて成立するからである。名目說にとつては貨幣はまつたく單に價値章標(Wertzeichen)に過ぎず、そして一つの借りもの、價値、卽ち反射價値を有するにすぎない。反之職能價値理論に取つては貨幣は分析的方法に依つて明かとなるところの獨自の內在的價値を有する。從つて總ての有力な職能價値理論は就中貨幣供給並に貨幣需要に關する研究に依つて內在的貨幣價値を決定する試みに歸着する。

修正された金屬論特に職能價値理論はアドルフ・ワグナー(Adolph Wagner.)メンガー(Menger.)レキシス(Lexis)フイリポビイチ(Philippovich)ヘルフェリッヒ(Helfferich)ホン・ミ

ーゼス(v. Mises)等に依つて代表される。多くの若い經濟學者達も亦職能價値理論に從ふ。一つの典型的な用式の說明は職能價値理論を國家辭典に於けるメンガーの論文に見出す。メンガーの云ふ貨幣は商品である、といふ命題は今日も尙ある程度まで眞理である。貨幣は其交易價値(Verkehrswert)をなによりも且つ直接に交易の客體と同樣な原因より導き出し、卽ち金屬貨幣は其素材並に其鑄造の價値から導き出し、紙幣(Urkundengeld)は其の所有に結ばれてある處の權利要求の價値から導き出す。『貨幣は其他の商品の領域內に於て特別な性質を示すと云ふことは貨幣は商品なりとの命題に少しも矛盾するものではない、恰かも街路とは多くの點に於て他の地所(田畑・牧場・森林・建築場等)から而も極めて明瞭に區別される事情はそれ等の街路や道路が地所であるといふ事實を否定しないと同樣である』。メンガーは更に進んで曰はく『吾々は貨幣を規定通りに貨幣素材の効用的性質に依るに非ずして、むしろ尠くともなによりも先づ而も直接に其の交易價値の爲めに吾々に依つて市場に齎らされる財貨に代つて獲得せむと務めると云ふことは同樣に正しい。併しながら之をば總て貨幣の交換手段としての機能を專ら明かにするものであつて……一般に商品としての貨幣特質の反證ではない』と(五六六頁)。

從てメンガーは又彼にとつて貨幣の側に存するところの價格構成の決定原因の總體である所謂『貨幣の內在的交換價値の問題』をも亦詳細に研究した。『總ての市場現象の公平なる分析は吾々に深く認識せしむる、卽ち其影響たるや貨幣の變化的の流通量、通貨に對する國民經濟の變化的需要、貨幣金屬の生產費の增減、(紙幣的(Urkundengeld)使用の擴大の多少、及び貨幣の側に於ける價格形成の決定原因に存する、其他多くの變化が貨幣と購買財貨の交換比例に及ぼすところのものである』(五九三頁)。

(註六) Karl Marx, Das Kapital, S. 58.

(註七) Helfferich, Das Geld, 2. Aufl. S. 4.

第七節　原理の擴張

〔價値尺度としての貨幣〕

吾々が總括して言ひ得る如く純粋なる金屬說は貴金屬並に貨幣の混同に依り貨幣は商品であると云ふ見解によつて特徴付けられる。尤も其商品の價値はそれを生産するに必要なる勞働に依るか、それが與へる欲望滿足の程度に依るか何れかに拘らず素材的なるものより生ずるものである。純正金屬說も亦素材價値なき交換手段並に支拂手段の存在を否定するものではない。けれ共純粋金屬說は貨幣を以つて自からの價値をある一つの素材からある一定の形式に於けるその價値を導き來る處の貨幣代替物として示した、卽ち或は經濟主體が金屬に於けるその轉形を保證されたものと考へるか或は又經濟主體がその轉形を金屬の代表者と看做すかの何れであるかを問はない。修正された金屬說は貨幣と貨幣素材間の混同を取り去つて居る、けれ共素材價値を持つことを要しない。けれ共しかも其內的價値を有し而して總ての經濟財と同樣なる價値構成の法則に從ふ處の商品を貨幣の中に見て居る。象徵說が貨幣シンボルを物質化し、卽ち貨幣と財産とを混同する危險を再三犯した樣に、斯くて修正されたる金屬說も亦再三貨幣を一定重量の貴金屬として表章する立場に落入つたのである。加之に貨幣が或は手から手に轉々するものと考へられ、又經濟的の取引を媒介するものと考へられ、又他の場合にはゼーブルス(Sèvres 佛蘭西の町名)に於ける白金(プラチナ)米突尺の如くに度量衡單位としての職能を有すると定義されて居る。例へば之れと同じく鐵道が二つの職能たる人間輸送及貨物輸送を共に行ふ如くに貨幣は同時に一般的交換手段として並びに價値尺度としての職能を應用する。假令金屬論者が價値測定は米突尺に依る長さの測定と同樣な結果を生じないことに就て全く明かに知つて居るとは云へ、しかも金屬論者は價格構成を終局に於て貨幣素材の價値とそれに換へて購買される商品の價値との比較に歸着すると云ふ誤謬にたやすく落ち入つて居る。カール・デールは曰ふ『生產者は買ふことを欲する消費者を促し得なければならぬ、卽ちこの場合消費者は、例へば金の如き一般に好まれる對象物に就て、消費者が生產者の商品に對して幾ばくを與へんと欲するであらうかと云ふことを評價する』と。ベンデイクセンは斯くの如き見解を否認して居る。卽ちなんとなれば別莊の買手が其の別莊のねうちを金塊の形態で何時現はしたことがあるか？

金屬論の創始者、アダム・スミス、リカルド、マルクス、及クニース等には價格構成のかゝる機構を假定することを氣付くことは恐らく困難であらう。彼等はその演釋に依つて事物の背後を觀察せむと務め、そうして價格を決定する所の終局の力を追及せむと試みた。けれ共それは遙かに財貨の價値の直接なる評價を貴金屬の價値によらしめて企てると云ふことを信ずることは彼等には出來なかつたことである。

第三章　名目說

第一節　名目說の成立

アダム・スミスの大著の出版が貨幣の學說史に於ける一時代を劃した如く、又グオルグ・フリードリヒ・クナップ(Georg Friedrich Knapp)が『貨幣國定說』(Staatliche Theorie des Ge'(les)を公表した時、それは貨幣學の發展史上に於ける又轉回點であつた。

アダム・スミスが曰ふ如く一般說は『財產は貨幣卽ち金及銀にある』と云ふ見解である。それ故に世人は彼れに依るとジンボリストである。しかるにクナップの說明に曰はく『世人はメタリストであり、反之理論人はノミナリストたらざるを得ない、なんとなれば價値單位を金屬容積として定義することは一般に可能ではないからである』と。(註八)それ故に彼等二人は共に貨幣理論の全時代を支配するところの一つの思想たる大思想が陳腐になつたと云ふ事に依て云はゞ概念磨損に依つて勃落したと云ふことを無意識的に發表したのである。

アダム・スミスもクナップも共に決して全く新しい貨幣學說を創造することは

出來なかつた、がしかし彼等は革命的な效果を齎らした、なんとなれば概念世界の爲めに彼等が武裝する處の概念世界は衰へて來た。古い思想は特に誤謬として證明することは出來なかつた。が古い思想が決して正當に理解されなかつたが爲めに新しい思想的武具が必要になつたのである。たしかにまた多くの新しい問題も現はれた、其問題は古い構想を以つてはもはや全く支配し得ないところのものであつた。

茲に於てか吾々はマーカンチリステンの最後の大學者たるヂエームス・スチアート(James Stenart)のもとに於て名目論への强い傾向が存在したことを想ひ起すであらう。けれ共金屬說の支配のもとに於てはこの思想は特別に發達せしむるを得なかつた。

勿論金屬說は長い間それ自から象徵的の觀方を全く回避することは出來なかつた。象徵的の觀方は古典學派の場合に於て繰返して金屬的貨幣理論の中に侵入して居るのみならず、それは後の極めて有名な多くの著述家に於ても隱れ家を見出して居た。一七九七年にカント(Kant)すら貨幣は單に目的に對する手段であつて商品に對立して決してそれ自身に價値を有たないと云ふことを强調して居る。

フイヒテ(Fichte)は彼れの封鎖商業國家のユートピア中に實質價値なき貨幣を導入して居る。アダム・ミューラー(Adam Müller)——一八一六年——は彼れの著述『一新貨幣理論の研究』(Versuch einer neuen Theorie des Geldes)に於て金屬貨幣は決して重量及純分に依るに非ずして、寧ろ先づ『一定の貨幣名稱に於て流通地域を限ることに依り、略言すれば或る一つの國法と一種の結ばれることに依つて』鑄貨となると云ふ意見を代表する。彼にとつては貨幣は單に經濟の有機的の一部分としてのみ考へられて居る。『貨幣は國家の有機體內の血液である』。之に關連して彼は貨幣を總ての價値の或は一般に經濟のシンボルと看做して居る。『國家が人間の性質に對應する如き總ての內的精神的統一の活きたる表現であり、法規が法律學上の表現である如く貨幣は其經濟的表現である』と。フフエランド(Hufeland)は彼れの貨幣並に貨幣流通に就ての學說に於て——一八一九年——貨幣は物に對して交換價値を有するが而し必らずしも使用價値を有するものではないと說明して居る。

彼れに從へば貨幣素材は一つの內部的の價値或は費用價格を指示することを得る、が而し貨幣素材は貨幣の交換價値にとつては論理上決定的なものではない。彼は貨幣の交換價値を使用價値に歸せしめなく寧ろ一つの社會的實際に歸せしめて居る。ザムエル・オツペンハイム(Samuel Oppenheim)は——一八五五年——彼の『貨幣の性質』に關する著述に於て消費財貨としての貨幣素材より生ずる貨幣は結局に於て貨幣箇片の使用價値より獨立に購買力並に交換價値を獲得したと云ふことの思想を辯護した。

しかし一般にこの思想は餘りに現はれなかつた、或は全く無稽なものとして除けられた。カール・マルクスは貨幣を單なる章標として說明する思想を拒絕して居る、卽ち商品に具體化したる社會的事實を人間の勝手な反省の產物と考へる誤りに他ならない(註九)』と。又ロッシエル(Roscher)は骨董蒐集の樣に昔からの言葉を蒐集したが、これに從へば貨幣は單なる章標であり或は全く富の總和であると述べて居る(註一〇)。

それにも拘らず異說を全く壓迫することを得なかつた、しかも壓迫することを得なければ得ない程それ丈金屬說的貨幣理論が其根本思想の嚴密さを輕減せざるを得なかつたが、之は吾人の已に見た如く二重の和解、卽ち又は貨幣と貨幣素材との根本的對立及職能價値の概念の導入とに依つて生じたものである。かくて漸次に名目說的思想は生きようと務めた。それに就ては如何に商品の概念が漸次貨幣概念から解放され、そうして如何に貴金屬は商品であるが、しかし貨幣は只價値シンボルであると云ふ見解が益々明瞭に構成されて行くかと云ふことを觀察するのは極めて興味のあることである。この過程が完成された時、金屬說並に象徵說の總合が完成されたのである。之に依つてはじめて名目說が完全なる生命に目覺めたのであつた。

名目說はそれ自身二系列の大思想に於て發達した、勿論この兩者は極めて密接に關係するけれ共しかし自から嚴別されて居る、一つは一般貨幣理論的のものであり、他は特種本位貨幣理論的のものである。

前者は貨幣を以つて一般社會的及經濟的現象として考へ、後者は特別なる形態就中貨幣の法的性質を把握するものである。

名目說への發展に於ては本位貨幣理論が指導的であつた。なんとなれば名目說の最初大なる思想構造が法律史及法理論の基礎上に立ち、そして國民經濟的範疇としてよりも寧ろ法律的範疇を問題にする處の一思想家に依つて形成されたからである。この偶然に加へて名目說はまづ容易に有機的になつた處のものを切斷するところの定義の法的快刀に拘らず或は寧ろ正にその爲めに經濟理論的研究に殆ど危險とならむとしたる概念の上に基礎を置て居る。

クナップの直接の先驅者は或は本位貨幣理論の方面に求められ——オットー・ヘイン(Otto Heyn)は其の最も著しい代表者であるが——或は又貨幣債務本質に關する法理論的論議の一方面に求められる。茲に存在する問題は貨幣本位變更の場合に於ける貨幣債權の內容如何の問題にする處の一思想家に依つて形成された る、卽ち債務者は契約締結の當時に貨幣學を代表する處の金屬量を負擔しなければならぬか？ 又債務者は立法者がその素材的內容を如何に決定するかに無關係に只價値單位量をのみ負擔するか？

(註 八) Staatliche Theorie des Geldes, S. 9.

(註 九) Karl Marx: Das Kapital, S. 57.

(註一〇) Roscher: Gründlagen der Nationalökonomie, S. 277.

第二節 貨幣債務の名目性に關する論爭

商品として一定せる鑄貨は又實體として殆ど特定物でなく寧ろ數量を對象に持つと云ふことを貨幣債務の本質と見た處のローマ法に續いて重商主義的貨幣觀より、しかも象徵主義より、寧ろ當時の國家的の貨幣政策より、法的の名目價値說が生じた。それは貨幣を鑄造するところの領主は同時に又その通用を規定する權力を有つと云ふ見解より出發し、そして金屬含有量に無關係に且つ只表記(Aufschrifs)卽ち國家の命令のみが決定的であると云ふことを結論するものである。(註一一)

けれ共十六——十七世紀に於て已にこの原理と相對立して財貨の內部的品質たる內在價値(bonitas intrinseca)卽ち含有金屬が債務の內容を構成すると云ふ見解が發達した。たとへ名目價値の通用をできる限り國家並に法規が確保せむと試みたとは云へ、卽ち法學者に依つて再參『一般的見解の學說』(communis opinio doctor-

ium)として——このことは又全く商業並に交易の見解と對應するものではあるが——又それが金屬含有量に由來すると云ふことが特別に强調されたのである。(註一二)

貨幣債務の内容に關する新理論の全體がザビニイ(Savigny)に依つて最初に基礎付けられた、其理論は金屬說的の感じを與へるけれ共ある點に於ては象徵說的或いは名目說的の理論である。

ザビニイは支拂手段の呼稱價値、(Nennwert)金屬價値(Metallwert)並に流通價値(Kurswert)を區別する。呼稱價値は國家の意思に從て貨幣に與へられる處の價値であり、金屬價値は貨幣に含有されて居る純銀又は純金の重量價値であり、流通價値は支拂手段として常に呼稱價値單位が購買する貴金屬である。

ザビニイに依れば呼稱價値も金屬價値も標準的なものに非ずして寧ろ流通價値である、卽ち彼の見解に依れば貨幣は『購買力』若くは『抽象的財産力』を現はすが故に支拂手段に代へて購買し得る處のものが決定的である。

ザビニイは價値に代へて貨幣價値單位毎に購はるべき金及銀の數量に依つて購買力が最もよく示されると云ふ事を認めて居る、其結果貨幣債務の内容は彼に從へば貴金屬が債務成立の當時に債務の示す金額を以て購買することを得る貴金屬量に存する。これを以て紙幣が直接に少しも金屬價値を有たないに拘らず紙幣を以ても支拂ひを爲すことを得る。

ザビニイの理論は彼れが貨幣を抽象的財産力と解する限りに於ては名目主義的である。これに依つて彼れは内的貨幣價値の觀念から離れて居る。もとより彼れは同時に貨幣單位と貨幣債務との間の一定の關係以上には追及しないところの法的名目價値理論から遠ざかつて居る。それ故に彼の見解は古い金屬價値理論の法律政策的の立場に極めて接近して居る。(註一三)

ザビニイの流通價値理論は長い間獨逸の法學を支配した。而し彼れの流通價値理論はその後それと似て非なる關係にある金屬價値理論と同樣に强い反對を蒙つカー(Bekker)に依つて代表されたところの金屬價値理論と同樣に强い反對を蒙つた。この兩理論が同樣な論議を以て、例へばハルトマン(Hartmann)及フエルフエリツヒ(Helferich)に依つて論爭された。この論議の一つは名目的に確立されて居る貨幣債務の決濟に必要なる金額に於ける事實上たへ難き不斷の變動に依る、

そして經濟の信用上の紛糾に現はれるところの混亂に依つて居る。他は法制の事實上卽ち殆ど總ての國の現行法に關連のあるものである。なんとなれば立法者は名目價値理論に依つては行はない處の極めて僅かの例外を設けなければならぬ。

かくてハルトマンは次の結論に到達して居る『法律的量としての貨幣はその本質上正にその依存するこの各個の金屬種類に基礎を置て居るのではない。貨幣は寧ろ金屬種類から切り離すことができ、そして他の素材と法律的に同樣な量として他の金屬の對應的な保證單位に依つて存續することが出來る』と。ヘルフエリツヒ(註一四)はこの見解に贊成して曰く『鑄造されたる貨幣又は紙幣を法律的支拂手段として承認して居るところでは、其處では貨幣債務の內容は本位貨幣の給付が價値上本位貨幣で支拂はれる標準に依る一定の金屬量の給付に存しなく寧ろ一般的には貨幣債務の對象は法規に依つて法定通貨として承認され、そしてそれは又同時に法規に依つて一定の呼稱價値卽ち一定の通用性を賦與されたところの呼稱價値に依つて決定されたる貨幣箇片の一定數である』と。

（註一一）Seidler：Die Schwankungen des Geldwertes und die juristische Lehre von den Geldschulden. Conrads Jahrbücher 1894, S. 687.

（註一二）Siehe unten das Kapitel über die Merkantilverfassung des Geldes, die das Leben beherrschte, während gleichzeitig die Wirtschaftspolitik dem Symbolismus und der Nominalwerttheorie huldigte.

（註一三）Julius Lehmann：Die Geldentwertung als Gesetzgebungsproblem des Privatrechts, 1922.

（註一四）Helfferich：Das Geld, 2 Aufl., S.333.

第三節　貨幣の名目論的法律理論

偖クナップは彼の國定貨幣說(die Staatliche Theorie des Geldes)と云ふ驚くべき建築學に依つて學問の建物を貨幣債務の名目的思想の上に打ち建てて居る。

クナップは彼の理論を『重要なる文化國家に於ける支拂制度に關して十九世紀中に完成されたところの法制史的事實の敎義的綜合と』自から名付けて居る(註一五)。吾々は更に立入つてそれを解說しなければならぬであらうが、玆には只だ學說史的スケッチの範圍內に於て必要なるものを畫くを要するであらう。

貴金屬は商品である。元來支拂はこの商品に依つてなされた、けれ共吾々の文

化國に於ては全く異つた支拂手段を有する、卽ち委托取引を除外するならば『法規に依つて權威的に價値單位に於ける一定『通用力』(Geltung)を賦與されたる表章箇片の讓渡に依つて』支拂は行はれる。クナップは此の箇片を名付けて『表券的支拂要具』(chartale Zahlungsmittel)若くは貨幣と稱する。

故に彼に依れば貨幣の概念は貨幣素材の性質と何等關する處はない。卽ちこの貨幣が金又は銀若くは紙に依つて造られて居る如何は貨幣の概念にとつて全く無關係である。

だから貨幣の概念は二つの要素のみを含み、卽ち只二つの要素がのみ支拂要具の表券性を構成する、そが第一は價値單位を表はすと云ふことであり(マルク・フラン或はルーブル)第二はそが法に依り卽ち國家の命令に依つて通用し從て貨幣が公布的通用性を有すると云ふことである。

しかし價値單位とは何んぞや？ クナップに從へばそれは金屬の價値と何等關係がない。從てマルクはポンドの $\frac{1}{1395}$ の純金であると云ふ定めは全く誤りであらう。たとへ純粹の金本位が行はれて居る場合であつても價値單位を以て一

定の金屬量と考へるのは誤りであらう』と。『價値單位は已に名目的なものとなつて居る、價値單位は吾々の法規に從ふところの歷史的に定められたる概念である。『マルク』なる價値單位の定義は次の如くである、卽ち一マルクは先行したる價値單位ターレルの(獨乙の銀貨)三分の一である』と。

而し如何にして貨幣が支拂に使用されるに至つたか？ これに就ても亦クナップは決して貨幣が或る素材價値を表章するが故にはあらずと答へて居る。金本位の場合に貨幣が金を伴ふならばそれは技術的經濟的理由から必要又は適當と考へられたからであるが法律の見地よりするならば不必要である。蓋し貨幣は支拂力を有し立法又さように規定するが故にのみ、殊に債務はそれに依つて消却すべきことを命ずるが故に通用力を有する。

かゝるものとしての貨幣は正に商品ではない。從て貨幣の價値或は貨幣の內在的價値に關して如何に論ずることを得るか？ 貨幣素材そのものはなるほど價値を有つことが出來る、だが而し貨幣素材は貨幣それ自身とは何等關係がない。クナップ自からは貨幣價値一般に關する說明には立ち入らない。——もつとも第

二版に於て初めて辯護的に述べて居るが、――寧ろ只この貨幣價値概念の排撃に務めて居る、『吾人は價値なる概念を支拂手段自體に、從てまた貨幣に當て嵌むべきでなくて只それ自身支拂手段でない處のもの(Ding)に當嵌めるべきである、なんとなれば吾々が價値を問題にする場合に於ては常にその時々の支拂手段を比較對象物として前提するからである』(註一六)と。

かくてクナップは最も重要なる、實に最も重要なる經濟上の一根本概念を彼れの考察より排除して居る。そは彼が著述の正に冒頭に於て貨幣理論は專ら法制史的であることが能ると述べて居るのは、卽ちそれである。この主張は貨幣が法的生活の一現象であり本位貨幣を以て貨幣制度の法的に秩序立てられたる部面と解する限りに於て眞實である。もとよりクナップは吾々が觀察した如く貨幣を以て全ての支拂手段と考へずして寧ろ法規に依つて通用力を與へられたる支拂手段のみを解する。それ故に彼の定義した貨幣理論は單に一つの本位貨幣理論に過ぎない。それにも拘らず彼は其他の支拂手段をも考へて居る、而も加之それに對して特別なる言葉を與へて居る、卽ち金屬評量制(Autometallismus)及振替支拂制(Girozahlung)と云ふ言葉である、而もそれ等の言葉は彼クナップの關心を引くものであつて、又たゞ法理論的立場からのみ關心を引くものである。

けれ共貨幣は彼の反對者が强調する如く、結婚は單なる契約以上のものであり、そして法律的事實であるばかりではない、而も正當に强調する如く貨幣は只に理論的觀察に依つては其本質上一般に理解され得ない如く貨幣も亦只に本位貨幣であるのみならず寧ろそれ以上に經濟、そして全社會生活の一つの根本現象である。そして若しクナップの天才的な法理論に依つて貨幣の經濟理論が蔽ひつくされるとするならば慥かにこのクナップの法理論にはその意味上極めて包括的な原理としての優越が與へられるであらう。

(註一五) H. d. St. Bd. IV, S. 610.

(註一六) Knapp: Staatliche Theorie des Geldes, S. 25.

第四節　貨幣の名目論的經濟理論

吾々がもし名目論は法理論的觀察より獨立して經濟理論の地盤の上に發達す

ることを得たるや否やを問題にせむとするならば、已にクナップ以前に於て二つの方面に概念上進出して居たことを知る。それは主觀的價値論の思想行程と數量説のそれとであつて、從て個人主義的原子論的經濟觀（individualitti ch-atmistischen Wirtschaftauffassung）の方面と、そして之れに對立されるところの普編主義的有機的經濟觀（universalistische—organischen Wirtschaftsauffassung）の方面に於てである。（註一七）

生物學（Biologie）が有機體を細胞から理解せんと務め或は遡に細胞を有機體の基礎となつて居る規律性より理解せんと務める如く社會學的觀察も亦個體から社會概念に進歩し或は又反對の道程をもとることができる。そして社會就中國家を個體以前に存するものと（アリストテレス）看做すことができる。主觀的價値論は現に個人主義的觀察に基ずくものにしてこの關係に於て主觀的價値論は古典的經濟學の正當なる後繼者である。なんとなれば古典派經濟學にとつても、又は主觀的價値論にとつても、依つて以て吾人が經濟上の諸關係を説明するところのものは各經濟主體の動機及衝動であるけれ共重商論的見解の胎内に成長したところの數量學説は國家として結合された社會を以て根本的のものと解して居る。從て數量理論は總ての經濟上の出來事が經濟主體の意思決定に依つて遂行されることを全く看過して居る。數量説にとつては社會の意思が、或は重商主義者が自然法の言葉に依つて表現したところに依ると人間の契約が決定的なものである、從て數量理論は實際に於て古典學派の學者に依つて個人主義的に改造され從て改惡されたのである。

而れども數量説は其本來の意義よりすれば普編主義的經濟論である。從てその本質上數量理論は金屬論に屬しなく寧ろ象徴論（Symbolismus）又は名目論（Nominalismus）に屬する。なんとなれば數量理論は財貨の總體が一定の原理に基いて總財産力に對立するところの共同社會の觀念を前提するからである。

國定貨幣説と叙上の如く解されたるクナップの數量説との密接なる關係は——總てリカルドーに依り而して後に限界効用説の意義に於ても亦ミーゼスに依つて改造されたる形態に於てではなく——もしもクナップにとつて國家が貨幣に通用力を與へるものが支拂團體（Zahlungsgemeinschaft）としての特質に於ける國家であると云ふことを觀るならば明瞭に意識されるであらう。而もクナップは結局に於て銀行券

制度（Banknotenwesen）並に振替制度（Girowesen）に於て支拂取引を支配するところのものは私的支拂團體であることを得ると云ふことを自から認めて居る。偖ェルスター（Elster）（註一八）は、支拂團體の概念をよりより明かにした。彼れは次の如き結論に到達して居る、卽ち『支拂團體が存在しない限り貨幣も支拂も存しないと云ふこと、又生產團體及消費團體が出現しない限り支拂團體は思想し得ない』と云ふことである。而して彼は又純粹なる數量說を奉ずるところのマーカンチリズムの經濟理論に——恐らく全く無意識的であるが——近付いて居る。

數量說の思想世界より名目說が發達し始めたと云ふことは、もし吾々が一九〇〇年に發行されたるジンメル（Simmel）の『貨幣哲學』（Philosophie des Geldes）に就て之が貨幣理論の核心を窮めるならば全く明瞭である。ジンメルは曰く『已に一見して貨幣は云はゞ一つの黨派を爲し、而してそれを以て支拂はれる財貨の總體は他の黨派を爲し、從てもし貨幣の純粹なる本質を問題とするならば、それは實際に單に貨幣として而も貨幣に副次的な一切の諸定義より切り離して取扱はれなければならぬ——基よりこの場合ジンメルは次の如く附言する——第二次的な定義は貨幣をそれに對立する黨派に而も更に同置するものである』（八十六頁）。貨幣はジンメルに取つては抽象的財產價値を有し『この一般的財產價値は正に價値を構成するところの物の相對性を表現するに他ならぬ』（八十八頁）。『貨幣が直接に價値のある物相互間の價値關係を表現すると云ふことは基より貨幣をこの關係に結ばずして他の秩序の中に現はして居る』（八十九頁）。彼れは又進んで『貨幣は直接に享樂され得ないが故に（後に論ぜらるべき例外が貨幣の個有な性質を否定するものではあるが貨幣はあらゆる主觀的關係に結ばれては居ない』（九十七頁）。貨幣は永久に單なる手段であり單なる象徵（Symbol）である（九十八頁）。貨幣を以て象徵を形成する能力が其最高の勝利を勝ち得た（九十九頁）。從てジンメルは次の問題を否定する『卽ち價値の尺度、交換、表章の役目を果すために貨幣それ自身價値であり或は價値であらねばならぬであらうかどうか？』と云ふこと或は若も貨幣は價値と本質を等しうすることなくして價値を代表する通貨（Rechenmar ke）の如く個有の素材價値なくして單なる章標（Zeichen）又は象徵（Symbol）であるならば之等の役目をつくすに充分であるかどうかと云ふ問題である』（百〇一頁）

と云ふ疑問を否定する。なんとなれば貨幣、商品、交換の領域に於ては各商品がその價格に對する關係は其時々の經濟的に働きのある總ての商品が其時々に働きのある貨幣に對する關係と同樣であるからであらう。『この後者たる貨幣が他のものと明瞭な質的の密接な關係を有するかどうかと云ふ疑問はこの場合全く重要でないことである。從て商品が20Mに價するとき之は貨幣貯藏一般の$\frac{1}{20}$であり、Mは一般に商品と異つたものであるとするもそれは完全に商品を測定することを得る……。もし一個の商品を直接に一つの貨幣價値に同置するならば商品と其尺度は同一本質であらねばならぬと云ふことは正當の要求であつたであらう、而し吾々は單なる交換及價値決定の目的にとつては專ら種々な(若くは總ての)商品相互の關係を(從て個々の商品分割の結果を)決定し、そして貨幣額即ち效果ある貨幣貯藏の相等分數に同置されねばならぬ』(百〇六頁)。『斯くて貨幣の世界と具體的價値の世界との關係はスピノーザ(Spinoza)の場合に於ける思惟と擴大(Denken und Ausdehnung)の如き觀を有する、即ち一つは決して他に關係しないなんとなれば總ては已にそれ自體として又その言葉に於て已に全世界を表現して居るからで、即ち價値の總和は一般に物の價値の總和と貨幣の價値の總和とを加へたものより成立せずして寧ろ一方に於ては物の形態に於て他方に於ては貨幣の形態に於て實現されるところの一定量の價値である』(百三十五頁)。

要するにジンメルも基より偶々一つの職能價値學說に落入つて居る、貨幣は其役目を果すと云ふことに依つて、更に彼の記するところに依れば貨幣は終りに具體的個々的なる價値となり、從て貨幣は而も同時に對立するところの幾多の關連と條件とに落入る、かくてその價値に於ては供給と需要とに依存すると云ふのである(八十九頁)。又『基より貨幣は先づ價値であるが故に貨幣職能を果すことを得るが、而し次に貨幣は貨幣職能を果すが故に價値となる』と(百九十二頁)——

近代の數量理論家に於ては已に明瞭に名目主義的貨幣學說の影響が現はれて居る、即ち彼等はこの影響を直ちに同化すると云ふことは兩學說の血族關係を物語るものである。

アービング・フイシャー(Irving Fischer)ガクナップを引證して次の如く強調して居る(註一九)、貨幣の價値構成に當つて決定的なるものは貨幣箇片(Geldstücke)の『重量ではなくして寧ろ數量』であると。『この實際は大いに強調されねばならぬ、それは之に依つて總ての他の財貨から貨幣を區別する處のものであり、その中に貨幣の購買力の特質が他の財貨に對する關係に於て現はれて居るところのものである。砂糖は例へば磅(ポンド)の重量に於ける數量に依つて需要されるが貨幣は決して斯様な特性を有しない。砂糖の價値は砂糖の實際の數量に關係する。砂糖の數量が百萬磅(ポンド)から百萬ッエントナーに變つたならば一ッエントナーは一磅(ポンド)の以前の價値を有すると云ふ結論は生じない。而し現在の流通貨幣が或重量の百萬單位から他の重量の百萬單位に變化するならば、各單位の價値は不變化のままである』と。

同樣にシュムペター(Schumpeter)(註二〇)も亦彼の數重量論的研究に於て——同じくクナップ及其學說に關說して——意識的に名目說から出發した、その際彼は基より本來の『國定說』(Staatlichen Theorie)に贊成するものではない。彼にとつて貨幣は『貨幣の社會的意味に從つて』享樂財貨に對する指圖證(Anweisung)である。『各經濟主體は彼れの貨幣所得をそれに代つて取得し得る財貨の觀點の下に於て觀察する——それは一つの指圖證と全く同じくそれに依つて與へられる現實の、從つて全く心理的な所得の觀點に於て觀察するのである』(六三七頁)。『指圖證理論(Anweisungstheorie)の立場からは、かの貨幣素材の價値を越へて貨幣の購買力に至るところの誘引的な道が吾々には塞がれて居る。貨幣はその本質上決して財貨(Gut)ではない、假令貨幣が偶々或る價値のある素材より成るとするも又財貨ではない』。『貨幣は購買力を有し又從つて貨幣はその所有者から尊重される。而しながら貨幣は其購買力を、それがなほ他の方法で卽ちそれ自體が尊重されることから其購買力を得るのではない、……』

數量說(Quantitätstheorie)に特別なる方式を與へたるスエーデンの經濟學者グスタフ・カッセル(Gustav Cassel)も亦名目說に極めて接近して居る。彼は價格計算の手段として卽ち『抽象的計算目盛』(abstrakter Rechnungsskala)としての貨幣と、支拂手段としての卽ち價値移轉の手段としての貨幣とを峻別する。貨幣が商品の特性を失へば失ふほど愈々純粹なる意味に於てそれは貨幣である。主觀的價値は

犠牲であつて其商品の價格(preis)にあらずして商品の價値に就て論ずることは不必要である。貨幣價値は『一般的價格水準の相互價値』に他ならぬ(註二一)、なんとなれば貨幣の價値は明かにこの貨幣に代へて購買し得るところの商品又は勞務の數量に依つて決定する、とカツセルは論ずる。

なほ吾々がその學説を一つの經濟理論にまで發展せしむるためのクナップの學徒の研究を觀察するならば國定説と數量説の關係がより一層明瞭になるであらう。なぜかならばこの研究は大體に於て數量理論を名目論的に構成する結果となる、從つて數量説のその本來的な意味に結ばれることに依つて發展せしめられる結果となる。最も有名にして而も最も才智あるクナップの思想の代表者はより多く理論的にも亦學説史的にも幾多の無頓着にあるに拘らずフリードリツヒ・ベンデクセン(Friedrich Bendixsen)であつた。彼は經濟的な直感より創造して光輝ある辯論及才氣ある論爭に於て名目論的思想を辯護し、已にクナップに先じて名目説的なる思想に特有なる研究に進んで居た。究竟なる狹い專門家の領域に遙かに峻立して居る彼の人格は極めて明解にして含蓄ある文體に反映されて居る、卽ち文體に依りて彼れは廣く而も實に又若い獨逸の經濟學者連をも假令名目論者と爲し得なかつたとは云へ、尙名目論に對して好意を有たしめた。吾々はカール・エルスター(Karl Elster)の場合に於てベンデクセンの經濟理論の思想の明敏なる發展を見出すのである。一層直接にクナップに追隨するのはクルト・ジンガー(Kurt Singer)である。數量説方面の思想に對してダルベルグ(Dalberg)プリオン(Prion)エフ・シユミツト(F. Schmidt)の如き著者及其他の人々も贊成して居る、最も其意味は主として銀行學又は通貨政策の範圍に存する。(註二二)——

假令人々が個人主義的及び普遍主義的な認識原理をそれ自體同格のものと見、そしてその中になるほど相對立はして居るけれ共而し同一の目的を追及する方法を見んとするならば、兩者がもし有效に遂行されるならば同樣なる結果に到達することが求められねばならないであらう。そして實際に於て主觀的價値論も亦益々名目論に向ふことが明かである。卽ち限界効用の概念を合理的に主觀的貨幣價値に應用するならばこの貨幣價値は種々な成分に分解される卽ち價格、所得、及慾望程度の三つの成分に從つて貨幣素材それ自體と何等共通せざる要素に

分解される。それに依つて主觀的價値論は金屬說より發展する、恰かも價値概念を經濟心理的の分析に依つて深化せんと試みた主觀價値學說は、從つてある獨立の內部的貨幣價値の觀念に達しなく寧ろ數量理論の普遍主義的觀察方法が達した處の、從つて又個人より抽象するところの法理論的考慮が到達したと同樣なる結果に達する。

既に吾々はウイザー(Wieser)の『貨幣價値と其歷史的諸變化』に關する一九〇四年の著述に於て、彼れが例へば貨幣價値を『總ての商品價格の總反射』として表明する場合の箇條を見出す(五十六頁)。後にその思想は更に明瞭に一九〇九年の『貨幣の價値と其諸變化』と云ふ論文に表現されて居る。彼れはその論文の中に貨幣の『人的交換價値』を上述の方法で所得、價格並に慾望程度の要素に分解する、そして更に彼は貨幣の交換價値は貨幣素材の使用價値に關係がないと強調して居る。もとよりウイザーはそれと共に價格の構成要素が貨幣價値であり、そして其他の構成要素が商品價値の總和であると說明することに依つて內的客觀的なる貨幣價値の觀念を維持して居る。彼は一九〇四年の著述中に曰く『二つの切り離たれたる線の一つのみが移動されるに過ぎないならば一角の大いさを變ずる如く、たとひ貨幣線——若もかかる表現が許されるとするならば——が移動するとするも或はまた商品線のみ移動するとするも貨幣價値の量は變ずるであらう』と(四十八頁)。而し彼れが貨幣所得を實際所得に對立せしめ、そして同置する場合にはウイザーは全く名目主義に同意する。同時に彼れはそれに依つてある新しい非常に獨創的なる數量學說の方式に到達したのであつた。

ホン・ツヰデイネック(V. Zwiedineck)はその『貨幣價値決定原理としての所得構成に關して』(über die Einkommensgestaltung als Geldwertbestimmungsgrund)と云ふ一九〇九年(註二三)の論文に於て同じく主觀的價値學說の適用により名目主義に到達して居る。その場合彼れの示すところに依れば最も貴重なる刺戟を負ふところの國定說の根本觀念は全く限界效用の概念に反對しないことを示して居ると云ふことである。彼れはウイザーよりも決定的に內的・客觀的價値概念の完全なる否定に到達したのである。彼れの研究の重要さはウイザーのそれと同じく就中價格の說明に所得を導入した點にある。

ウイクゼル(Wicksel)も亦限界効用學説の思想の道行より——恐らく彼は貨幣利子と財貨價格間の關係に關する明敏なる研究に依つて豊富にしたる數量理論よりも亦——内的貨幣價値概念の完全なる否定に從つて以て名目主義に到達したのである。『本來の意味に於ける貨幣の内的價値は屢々説明された如くに、依つて以て商品の個有價値を比較し又測定せしめるところの本來の意味に於ける貨幣の内的價値は存在しない』(註二四)と。

併しながらこれと同樣なる言葉を以て幾分異つた意義に於てオットマー・シュパン O. Spann)は彼れの社會觀を分つて居る(社會學二四五頁)

(註一七) Mit denselben Worten aber in einem etwas andern Sinne unterscheidet O. Spann die Gesellschaftsauffassung: Gesellschaftslehre, S. 245.

(註一八) Karl Elster: Die Seele des Geldes, S. 37ff.

(註一九) Fischer: The purchasing power of money 1911.

Deutzsche Übersetzung 1916, S. 26

(註一〇) Schumpeter: Das Sozialprodukt und die Rechenpfennige. 1917/1918.

(註一一) G. Cassel: Theoretische Sozialökonomie, S. 395.

(註一一) Hieran darf ich auch mein Buch über, die Wirtschaftsverfassung der Republik Chile. Zur Entwicklungsgeschichte der Geldwirtschaft und der Papierwährung" 1913, rechnen.

(註一三) Schmollers Jahrbuch, 33. Jahrg., 1909, S. 131 ff.

(註一四) K. Wicksell: Vorlesungen über Nationalökonomie, Bd. 2, S. 147.

第五節　原理の擴張

(價値單位としての貨幣)

吾々が名目説を象徴説及金屬説の綜合と認めるならば、それに依つて同時に名目説は自からの中に一致せんとするところの而も二つの相互に矛盾する要素を抱くと云ふことを表明することになる。吾々はこの一致が未だ全く行はれず且つ名目説の思想が未だ總ての點に於て終局的に考へられて居ないと云ふことを知るであらう。なんとなれば貨幣論が現に提出されて居るところの大いなる課題即ち名目論的經濟論の構成は未だ全く解決されては居ないから、而し本書に於て著述された研究が先づ第一に貨幣の理論的研究を爲すを其任務とする、この課題に捧げられることを認識するためには大なる予言的才能を要しない。

この場合更に吾々が象徴説や金屬説に於て觀察した如き總て象徴説に於ては象徴の物化に、金屬説に於ては所謂價値尺度の物理的措定に存在したと同様な根本原理の擴張の危險がある。反之名目説はリーフマン(Liefmann)の『心理的經濟理論が教へる如くに逆に貨幣は一つの抽象に他ならぬ、卽ち私しがリーフマンの『心理的』なるものを解して誤りなしとするならば、稀小性(Seltenheit)具體的の數量制限(konkreten Mengenbegrenzung)發行政策の權利(Macht der Emissionspolitik)及國家的影響より完全に脫して居る抽象的價値單在に他ならずと云ふ錯誤に容易に落入る、卽ちリーフマンは曰ふ『今日までに總ての所得がそれに依つて計算され且つ眞に總ての價格がそれに依存するところの『一つの抽象的計算單位』(Eine abstrakte Rechnungseinheit)は益々廣い範圍に亘つて又總ての價格の支拂に利用されるであらう。かゝる發達は國家の任意より貨幣制度を分離することを意味する、卽ち貨幣制度を交易の需要に結合することを意味する、從てこの發展の目的は交易が其必要とする交換手段及交換方法自からの中より創造する場合に達成せられる(註二五)』と。勝手に屢々考へられる如き價値單位は又只一度のみ支出することを得るかの如くに——又クナップに依つて提出されたる貨幣は通用力(Geltung)を有すれども價値を有せずとのパラドクス(Paradoxon)は何處に行くを得るやと云ふことも明かであらう。

(註二五) R. Liefmann: Geld und Gold, S. 97.

貨幣の根本觀察に關する文獻

第一　象徴論的貨幣理論に就ては

(一)　重商論的著者

余は(Wagemann)次の多くの文獻の中より大體主要なるもののみを撰んで本文に引用した。

Bodin: Erwiderung auf Malestroits „Paradoxen" 1568.

—— Les six livres de la république, 1583.

Davanzati: Lezione sulle monete, 1588.

Montchrétien: Traité de l'Oeconomie Politique, 1615.

Thomas Mun : Englands treasure by forreign trade, 1641.

Joh. Joachim Becher : Politischer Discurs, 1667.

Montanari : Trattato mercantile della moneta, 1683.

Horneck : Österreich über alles, wenn es will, 1684.

v. Schröder : Fürstliche Schatz-und Rentkammer, 1686.

Locke, Treatises on Government, 1689.

—— Some considerations of the consequences of the lowering of interest and raising the value of money, 1691.

—— Gesammelte Werke, zuerst 1714.

North : Discouses on trade, 1691.

Davenant : An essay on the probable methods of making the people gainers in the balance of trade, 1699.

John Law : Mémorie sur les banques, 1705.

—— Considérations sur le numéraire et le commerce, 1720.

Berkeley : Querist, 1735—1737.

J. Gee : Trade and Navigation of Great Britain, 1738.

Montesquieu : De l'esprit des lois, 1748.

Belloni : Dissertazione sopra il Commercio, 1750.

Hume : Political Discourses, 1752.

v. Justi : Staatswirtschaft, 1755.

Forbonnais : Finances de France, 1758.

James Steuart : An Inquiry into the Principles of Political Economy, 1767.

W. Petty : Tracts, 1769.

(二)重商論的理論に關する著述

就中

Sombart : Der moderne Kapitalismus, 2 Aufl. 1966.

次に經濟學說史に關する一般文獻、特にロッシェル、デューリング、アイゼンハルト、ジード及リスト等に關しては上記の一般文獻覽を參照せられよ。

其他

Kautz : Die geschichtliche Entwicklung der Nationalökonomik und ihrer Literatur, 1861.

A. Oncken : Geschichte der politischen Ökonomie, Bd. 1. 1901.

加之貨幣の教義史に就ての一般文献即ち Laughlin と Hoffmann の他に特に次のマーカンチリズムに關する諸論文がある。

Biedermann : Über den Merkantilismus, 1870.

Leser : Merkantilsystem, Handwörterbuch. d. Staatswissenscaft, Bd. VI, 1910.

Lexis : Merkantilsystem, Wörterbuch d. Volksw. 1911.

Jaleskij : Philosophie der polit. Ökonomie bei den Merkantilisten des 16.—18. Jahrhundert Archiv f, Rechts—und Wirtschaftsphilosophie, Bd. 5ff, 1912 u. 1913.

Mann : Der Marschall Vauban und die Volkswirtschaftslehre des Absolutismus 1914.

第二　金屬論的貨幣理論に就ては

(一) 古い著者

Adam Smith : Wealth of nations, 1776.

其他

Hassbach : Untersuchungen über Adam Smith und die Entwicklung der politi chen Ökonomie, 1891.

David Ricardo : Principles of political economy and taxisation, 1817.

—— The high price of bullion…, 1809.

—— Reply to Mr. Bosanguet's practical observations on the report of the Bullion Committee, 1811.

—— Proposals for an economical and secure currency …, 1816.

Karl Diehl : David Ricardo Grundsätze der Volkswirtschaft und Besteuerung : Sozialwissenschaftl. Erläuterungen, 2. Aufl., 1905.

—— Artikel Ricardo i, Handw. der Staatw, 1911.

W. N. Senior : Three lectures on the value of money, 1840 (gehalten 1829).

—— Three lectures on the cost obtaining money, 1830.

J. St. Mill : Principles of political economy, 1. Aufl. 1848.

K. H. Rau : Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, Bd., 1. Aufl., 1826.

v. Herrmann : Staatswirtschaftliche Untersuchungen, 1832.

W. Roscher : Die Grunglagen der Nationalökonomie, 1. Aufl., 1854.

Karl Masx : Das Kapital, 1. Aufl., 1867.

Schäfle : Das gesellschaftl System der menschlichen Wirtschaft, 1. Aufl., 1867.

Karl Knies : Das Geld. 1. Aufl., 1873, 2. Aufl, 1885.

B. Hildebrand : Die Theorie des Geldes, 1883.

Chevalier : Cours complet d'économie politique, 3. Bd., 1850, 2 Aufl 1866.

Courcelle-Seneuil : Traité théorique et pratique d'économie politique, 1858/59.

(二) 新著者

Nasse : Das Geld-und Münzwesen, Schönbergs Handbuch der polit. Ökonomie, 1. Aufl, 1882.

Lexis : Fortführung der Nasseschen Abhandlung in spöteren Auflagen des Handbuchs.

Karl Menger : Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, 1871, 8. Kapitel,

—— Artikel Geld, Handw. d Staatsw, IV. Bd., 3. Aufl. 1909.

Adolph Wagner : Sozialökonomische Theorie des Geldes und Geldwesens, 1909.

Helferich : Geld und Banken. 1. Aufl., 1904. 2. Aufl. 1910.

Lotz : Artikel Geld im Wörterbuch d Volkswirtscfaft, 1. Aufl, 1898. 3. Aufl, 1911.

Diehl : Über Fragen des Geldwesens und der Valuta…, 1918.

v. Mieses : Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel, 1912.

其の他經濟學の有名なる敎科書はロンラードの(Grundriss der politischen Ökonomie) フオン・フイリポヴイチの (Grundriss dss politischen Ökonmie) グスタフ・コーンの(System der Nationalökonomie) シュモラーの (Grundriss der allgemeinen Volkswirtschaftslehre) 等が在る。

カール・マルクスに私淑するものに

Hilferding : Das Finanzkaptal, Wien. 1910, 2. Aufl. 1920.

Oppenheimer : Theorie der reinen und politischen Ökonomie, 3. Aufl. 1919.

W. S. Jevons : Money and the mechanism of exchange, 1889.

J. S. Nicholson : A treatise on money and essays on present monetary problems, 1888.

F. A. Walker : Money, 1878.

J. L. Laughlin : The principles of money, 1903.

W. A. Scott : Money and banking, 1903.

D. Kinley : Money : 1904.

C. A. Conant : The principles of money and banking, 2 Bde., 1905.

J. B. Clark : Essentials of economic theory, 1907.

Anderson : The value of money, 1917.

Walras : Théorie de la monnaie, 1886.

L. Poinsard : La question monétaire, 1894.

Leroy-Beaulieu : Traité théorique et pratique d'économie politique, 3 Bd., 1896. 3 Aufl. 1900.

M. Block : Les progrés de la science économique depuis Adam Smith, 2 Bd., Kap. 23,2. Aufl, 1897.

A. Aupetit : Essai sur la théorie générale de la monnaie, 1901.

Arnauné : La monnaie, crédit et le change, 1894, 3 Aufl. 1906.

第二 名目論的貨幣理論に就ては

(一) 先驅者

Hufeland : Die Lehre vom Geld und Geldumlauf, 1819,

Adam Müller : Versuch einer neuen Theorie des Geldes, 1816, ferner Gesammelte Schriften, 1839.

其他

Stephinger : Die Geldtheorie Adam Müller, 1909.

Samuel Oppenheim : Die Natur des Geldes, 1855.

Hammer : Die Hauptprinzipien des Geld-und Währungswesens und die Lösung der Valutafrage, 1891.

O. Heyn : Papierwährung mit Goldreserve für den Auslandsverkehr, 1894.

其他の多くの著述と共にクナップに依つて序文中に述べられて居る。

Marcus Mark : Das Gold nicht mehr Geld, 1897.

Silvio Gesell : Die Anpassung des Geldes usw., 1897.

(二) クナップと其の學派

G. F. Knapp : Staatliche Theorie des Geldes, 1 Aufl. 1905, 2. Aufl. 1918, 3. Aufl. 1921,

—— Staatliche Geldtheorie, Artikel im Handw. d. Staatsw., 3. Aufl., Bd. 4, 1909, S. 610—618

—— Erläuterungen zur Staatlichen Theorie des Geldes, Schmollers Jahrbuch, Bd. 30, Heft 4, 1906, S. 381/93.

—— Weitere Schriften s. i. Anhang der 2. u. 3. Aufl. der Staatlichen Theorie des Geldes.

F. Bendixen : Das Wesen des Geldes, 1908, 2 Aufl. 1918

—— Geld und Kapital, 1912.

—— Währungspolitik und Geldtheorie im Lichte des Weltkrieges, 1916.

K. Singer : Das Geld als Zeichen, 1920.

K. Elster : Die Seele des Geldes, 1920.

A. Schmidt : Währungsfragen der Gegenwart, 1920.

(三) 數量論者

G. Simmel : Philosophie des Geldes, 1902.

v. Zwiedineck : Die Einkommensgestaltung als Geldwertbestimmungsgrund, Schmollers Jahrbuch, 1909.

v. Wieser : Der Geldwert und seine geschichtlichen Veränderungen, Zeitschr. f. Volksw., Sozialpolitik u. Verw., 1904.

—— Der Geldwert und seine Veränderungen. Schriften d. Vereins f. Sozialpolitik, 1910.

Schumpeter : Das Sozialprodukt und die Rechenpfennige, Archiv f. Sozialwiss. u. Sozialpolitik, 1917/18.

Kemmerer : Money and credit instruments in their relation prices, 1907.

Irving Fisher : The pruchasing power of money, 1911.

獨譯一九一六年

Hawtrey : Currency and credit, 1919.

G. Cassel : Theoretische Sozialökonomie, 2 Adt. der Lehrebucher der Allgemeinen Volkswirtschaftlehre von Pohle und Cassel, 2. Aufl. 1921.

K. Wicksell : Vorles. über Nationalökonomie. Theoret. Teil, 2. Rd. Geld und Kredit (Übers. v. Langfeldt), 1922.

もとより數量理論の上記の代表者は一部分修正金屬説の學徒と見ることができよう、併しそれにも拘らず本文に説明したる理由よりして大體に於て名目論と受けとらねばならぬ、直接クナップに依存することなしに發表したる名目論者は次の人々である。

(四) 其他の名目論的著者

W. Hausmann : Goldwahn, 1911.

R. Liefmann : Geld und Gold, 1916.

W. Federn : Krieg und Geldlehre, 1917.

R. Dalberg : Die Entwertung des Geldes, 1919.

E. Herzfelder : Die volkswirfschaftliche Bilanz und eine neue Theorie der Wechselkurse, 1919.

R. Reyschagl : Die Lehre vom Gelde in der Wirtschaft, 1921, 2. Aufl, 1922.

第二編　貨幣價値論

第四章　貨幣價値の內容

第一節　問題提出及術語

吾々は貨幣の根本觀の發展の大要を觀察したる後に、茲に存在する且貨幣理論的論議を今日左右するところの對立を個々に研究すべき課題が與へられて居る。その根本問題は其萠芽に於てすでにアリストテレスの提出したる貨幣は其の價値を自然より得て居るか或は法律に依つて得るかの問題に含まれて居る。その一つは――アリストテレスがその對立を法式化して居るところに依ると――『貨幣は擬制であつて且法律的の通用力を有する、』と云ふ意見であり、他は貨幣を不當にも富それ自體と考察し、そして自然より貨幣に一つの價値を與へるものである、(註二六)今日なほ如何なる貨幣理論家に於ける反省も亦同樣の考慮を以て初められるべきである。なんとなれば貨幣本質に對する問題は特に貨幣價値の本質に對する疑

問である、故にこれに答へるため吾々はこの問題を次の三つに細分し第一に貨幣價値の內容、第二に貨幣價値の基礎、第三に貨幣の作用形態を研究せんとする。

而しまづ術語上の道具に關し卽ち概念構成並に命名に關する理解を要する。もとより價格概念は總ての價値概念からは殆ど批判されて居ない。價格は正に明瞭に表はれる出發點であり、あらゆる價値論の根本事實であつて、その外的なる現象形態そのものに關しては殆ど意見相違を生ずることを得ないものである。吾々はこの價格に依つて一定數の貨幣單位を卽ち或一定の給付に對して與へられる貨幣額を意味する。――これに反して貨幣それ自體はカール・マルクスが述べた如く何等の價格をも有しない(註二七)、然らずしてそれ自己の等價物としてそれ自身に關係されねばならぬであらう。もしもそれを欲するならば基より貨幣單位も亦貨幣單位それ自身の價格として解することを得る。

交換價値の概念は價格の概念に直接に結ばれて居る。もしも一經濟財貨の交換價値を問題とする場合には其價値に依つて交換方法に依りこの財貨を以つて一價格を取得する可能性が意味されて居る、從て交換價値は價格尊重を意味する

に他ならぬ、もしも實物經濟を考へるならば交換價値はベエーム・バヴエルク(Böhm-Bawerk)と共に『一財貨が交換に於て他の財貨の一定量を取得する能力』(註二八)と解することを得る、經濟財貨の交換價値に於けると同樣に貨幣の交換價値についても述べることができる。卽ちそれは貨幣に具體化されたところの市場に於てそれと交換して經濟財貨を得られる可能性として論ぜられる、而して貨幣の交換價値を以つて可能性以外のなにものも意味しないならば最も極端なる名目論者と雖も貨幣の交換價値を否定し得ないのである。他の問題は貨幣の交換價値が經濟財貨の交換價値から本質的に區別されないかどうか？　と云ふ問題である。

一つの經濟財貨の交換價値を——それが適當であるか、この場合暫く置くが——主觀的の使用價値から生ずるものと解し得る。そのことは經濟主體に於ける要求を呼び起し又費用支出に勞働に驅るところの一物が有用であり而も直ちに調達し得ないとの觀念である、——近頃價値なる上位概念(Oberbegriff)は何に依つて同時に價値感情(Wertgefühl)(主觀的使用價値)そして價値表現(Wertausdruck)(客觀的交換價値)に應用されるところの言葉の用法が批判されて居る。(註二九)それは恰も藝術家

の幻想に於ける形像に付てではなく又畫布に於ける形像に付て說明し得ないかの如くである。——交換價値を勞働支出又は費用から成立せしむるところの理論は勞働價値並に費用價値に就て論ずるであらう。

金屬說(Knies)は財貨の使用價値に付てと同樣貨幣の使用價値に付ても論ずる、其場合貨幣は經濟財貨と解されて居る。これと類似して居るのは貨幣の勞働價値又は費用價値である。

吾々は貨幣の素材價値の概念の下に於て一方に貨幣の使用價値を他方に勞働價値並に費用價値を要約することを得る、それに依つて貨幣本質をつくして居ると云ふ見解より吾々はこの概念の代りに所謂職能價値を導入することに依つて內的貨幣價値のより廣な概念を代置する。內的貨幣價値と云ふのは『貨幣の側に存する價格構成の決定原因』(註三〇)である。

內的貨幣價値より嚴密に區別しなければならないのは主觀的貨幣價値であるがこれは吾々が限界效用論者に於て知り得たる概念である。限界效用論者は貨幣價値を——財貨の使用價値概念と同樣——一般に貨幣がある經濟主體の副利目的

のために有するところの意味を意味して居る、これに反して内的貨幣價値の中に價格構成に當つて貨幣側に影響を及ぼす力が認められて居る。(しかれ共彼等は内的商品價値概念と何等の關係をもたない。)

貨幣の交換價値と一致する外的な貨幣價値にも並に主觀的貨幣價値にも對立するも、もしも特に交換價値が購買の過程に於て實現されることを表現せんとするならば貨幣の交換價値と云ふ代りに恐らく貨幣の購買力とも云ふであらう。吾々がこの事柄を未定のまゝに暫く置きそして單に貨幣を以て支拂の行はれると云ふことを强調するに過ぎないならばそれは支拂力に就ての說明である。交換價値の概念が貨幣使用より全く抽象化される場合完全に通用力(Geltung)の概念に轉化する。——言葉の用法は購買力概念並に支拂力の概念を使用し更に又所得たると財産たるとを問はず經濟主體の左右する貨幣額の意味にも使用される。

(註一六) Björn-Bawerk: Positive Theorie des Kapitals, 4. Aufl., 1. Bd., 3. Buch, S. 192.——Adam Smith definiert den Tauschwert einer Ware als die Möglichkeit, andere Waren mit dem Besitz dieser Ware zu kaufen.

(註一七) Karl Marx, Das Kapital, S. 60.

(註一八) Karl Elster in einem seiner Aufsätze.

(註一九) Menger ist es wohl zuerst, der zum inneren Tauschwert des Geldes spricht. S. a. seinen Aufsatz im H. d. st. Bd. IV, S. 593.

第二節　内的貨幣價値の擬制(素材價値)

(註三一)クニースが、商品の價値は貨幣の價値を以て評價されると云ふ命題を打ち建てた、彼は明かに價格はある二重の心理學的事實に、卽ち經濟主體の商品並に貨幣に對する一定の感情的關係に逆のぼるところの交換關係であると云ふ觀念から出發する、從て商品の價値はある絶對的に與へられたものとして又絶對に與へられて居るものと考へられる貨幣の價値に對立せしめられて居る。

この觀察方法は決してそれ自體誤つては居ない、吾々は卽ち價値そのものを慾望滿足に於ける對象の處分に依存して居るとの意識と解する限りに於て價値の對象は世界に只一種の財貨のみが存在して居る場合に存するであらう。廣く財

貨が增大してゆくならばその場合は各々それ自身一つの內的價値を有するものである。二つの財貨の交換比例はそれに依つて各個のものを量るところの內的價値の比較より生ずると考へることが出來る。貨幣が商品として卽ち價格財として觀察される限りに於ては貨幣及商品間の交換比例が生ずる。

もし交換比例を外的交換價値と爲すならばこの外的な交換價値を全く正當に內的貨幣價値並に內的商品價値から生ずる結果と判斷することが出來る、而しこの內的價値の高さを決定することは不可能であると謂ふことに付ては明瞭であらねばならぬ。もとよりこの觀察方法に於ては價格卽ち外的な交換價値は、二つの決定し能はざる量の商として說明される、從て吾々は解くべき更に次の方程式を得ることができることなくして二つの未知數を有する一つの方程式を得る、それを價格に對して比較し得る量と看做すならばそれこそ擬制に止まる。

吾々がもし內的貨幣價値を擬制とするならば、それに依つてこの概念の有用性に關しては決して傷はれない。この概念が正にその形態に於て使用價値又は勞働價値として古い金屬理論の基礎であり且つかゝるものとして本位政策上の勞作にまづ第一に最大の後見を爲したと云ふことを誤解すべきではない。おそらくこの基礎の上に金本位並に近代發券銀行制度の光輝ある諸設備が築かれて居ると謂ふかも知れない。內的貨幣價値の概念が理論に致した後見を原子論が化學に對する意味に或はエーテル說が物理學に對する意味に並べるもそれ程誇張ではない。之等の諸概念の認識論的類似は否定し得ない、それは勞働假定であり思惟方法であるが、又擬制としての、その性質が意識されて居ることを前提とするならば、この概念內容が全く非現實的なものとして證明せられる場合にも科學の支點たるを失はぬ。

勞働費用から內的貨幣價値を假定することは、それを勞働支出より生ぜしめる勞働價値理論にとつて恐らく最も適當なことであらう。この理論に依ると價格財貨(Preisgu)と商品間の交換關係は投下されたる勞働の關係に對應する。貴金屬生產に於ける勞働支出が高まるならば、この見解に從へば貨幣の內的價値が騰貴する、そして低下の場合はあべこべである。併しながらこれは他の財貨生產に於ける勞働支出が增加しない事を前提とする。もとより內的價値そのものはこの

場合も亦確定し得ない。只常に内的交換價値のみが認識し得るに過ぎず。外的交換價値が變動するならばせいせい分析的方法に依つて明かである事は、この變動が勞働支出に依つて貨幣の側に生じたか、或ひは又商品の側に生じたかと謂ふことである、從て内的貨幣價値の概念がそれ自身この場合に於て直接に排除されて居る。それは恰かも商品及價格財貨に於ける勞働支出の割合に依つてあらゆる價格が決定されると云ふ方式で充分である。もし價格を内的商品價値及内的貨幣價値とに分析するならば、吾々が一單位である05の大いさを二つの數字に分析し從て吾々がもし $\frac{1}{2}$ 又は $\frac{2}{4}$ として示す場合と異るものではない。なる程かゝることを爲すことは必要であるかも知れぬ。しかしその場合分子と分母とを獨立なる數字として示すのは誤りであらう。ウイザー(Wieser)は内的貨幣價値の概念を例說するために三角形の一邊を移動することに依つて又は他の一邊を移動することに依つて變化する角と價格を比較して居る。然るにこの引例は内的貨幣價値の擬制的性質を明瞭に示して居る。なんとなれば角度が坐標の組織(Koordinatensystem)に關係するならば單に角度の諸變化は一方の邊又は他方の邊の移動に歸し得るに過ぎないからである。しかしながら經濟に於ては價格以外に内的貨幣價値若くは内的商品價値の坐標組織に關係付けられるを得るところの坐標組織は決して存在しないのである。

貨幣價値の生産費說は勞働價値說に近い。その說くところに依れば貨幣と商品との交換は双方の生産費に依つて決定されると云ふ。併しながら今生産費は生産にあたつて支出される貨幣額に他ならぬが故に、この理論は一つの循還論を示す。なんとなれば生産費說にとつては貨幣の内面的交換價値がその外的交換價値と完全に一致するからである。從て生産費說は價格を價格から說明して居ると云ふことになる。

クニースに依つて發達せしめられた使用價値學說に於ける内的貨幣價値は二重の意義に於て擬制的である。この論に依ると貨幣と價値とを通約するところのものは『共通なる使用價値物』(gemeinsame Gebrauchswertige)である。從つて價値財貨に具體化されたる使用價値は、それに依つて使用價値としてのみ商品であるところの商品を測定するところのものである。それ故にその學說に依ると商品又は

貨幣の內的價値は一つの使用價値の性格を有する。併しながら勞働價値が——余はそれが正否は別として——公分母に勞働時間を使用することが出來るけれ共、この場合主觀的價値として考へられる使用價値にとつてはかゝる公分母は存在しない。從て使用價値學說に於ける內的貨幣價値は純粹なる空想となる。吾々は尠くとも勞働價値學說に於て次の如く云ふことができる。卽ち商品の內的價値が貨幣の內的價値に對する關係は双方に必要なる勞働支出に對すると同樣であるが故にその關係は具體的な數字を生ずる。從つて勞働支出が數字的に決定されるが故にその關係は具體的な數字を生ずる。併し商品の內的價値が貨幣の內部的價値に對しては使用價値の關係に於て依存すると謂ふことが主張されるならば、吾々はXがYの如き內的な貨幣價値對內的商品價値の方程式を得る、從つてこの場合內的貨幣價値は單に絕對的なる數字ではなく、寧ろ只分數の一邊、卽ち一角の一邊であるのみならず、又この一部は全く想像的なものであると云ふ意味に於て一つの擬制である。

（註三一） Das Geld, 2 Aufl, S. 146 ff.

第三節　內的貨幣價値の擬制(職能價値)

既に述べた如くに職能價値理論は恰かも一つの對象の中に効用性並に稀少性に結合される場合を與へられたものと看做される經濟價値の定義より出發して居る。貨幣價値の前提は如何なる場合でも稀少性卽ち數量の限定である。而し効用卽ち欲望も現はれねばならぬ。併しながら紙幣が不換である限り、且つ何等の有價物請求權を示さない限りに於て何處に紙幣効用が存在するか？　そは貨幣職能それ自身の中にあると答へるであらう。從つて貨幣職能は數量的制限の他にこれに依つて貨幣に價値を賦與して居る、卽ちこの見解に於ては紙幣にも亦獨立の價値が與へられる。この貨幣職能に依つて紙幣は金屬價値に對する關係に逆ることなく研究され說明されることを得る。故に職能價値の概念に依つて內的貨幣價値は素材的なるものに依り全く分離されて居る。

畢竟するに職能價値理論は素材價値理論より殆ど本質的には區別されない。なんとなれば例へばクニースに依つても亦貨幣の使用價値は同時に金錢的使用價値をも含むものである。卽ちクニースは曰く『貨幣箇片(Geldstücke)の交換價値か

ら區別される「その使用價値」は吾々が貨幣の使用を以て……直接の交易に存するところの多くの而も困難なる妨碍を除くことを得ると云ふ點に基礎を有する。それこそ使用ではないか？如何に愚であることよ。それは秤の使用よりもクラベモノにならぬ程の効果の多いものである。(註三二)』

尤もクニースに依ると金錢的使用のみが貨幣に價値を與へるのではない。彼れは『貴金屬箇片の貨幣後見は第二次的のものであり、裝飾その他の別使用は第一次的のものであり、而して前者は後者なくしては不可能である』(一八六頁參照)と云ふことを確定し得ると信じて居る。

從つてクニースに依つても亦金貨は素材價値のみでなく職能價値をも代表することは明瞭である。

職能價値の概念は素材價値の概念に、それが貨幣を商品の如くに示す限りに於て密接なる關係におかれる、全く職能價値は或る經濟上の財貨の價値の如くに貯藏又は需要に依存する獨立價値として考へられて居る。卽ち職能價値理論を貨幣の商品理論と看做すのは正しい。あらゆる素材價値は根本に於て職能價値である。なんとなればそは勿論財貨の果す處の後見(Diensten)にも基づくからである、と謂ふことは屢々職能價値理論の代表者に依つても亦指摘されてゐる。

而もなほ職能價値理論は一つの謬論上に築かれて居る、卽ちこの謬論は內的價値を個人經濟の領域より本來的に分離する點にある。この內的價値を効用及稀少性より生ずると考へるならば、その內的價値は二つの個別的の動機の欲望充足に對する努力の、そして一つの缺乏の意識の結果として總體表現として考へられる。其處で先づ素材基礎がなんであらうとも缺乏に於ける貨幣價値の根底を——財貨價値の場合と同樣——缺乏に、卽ち數量限定に求ることは困難ではない。けれ共次に內的貨幣價値を條件付ける貨幣の効用を貨幣職能自身の中に求めんとするならば、それが循還論理であることは恰かもお伽噺のミュンフハウゼン(Münchhausen)が溺死者をして自分の襟髪に依つて救はしめんとして居るのと同樣である。外的貨幣價値は實に『貨幣職能』そのものに他ならぬ。卽ち內的貨幣價値を貨幣職能から說明せんとすることは、それを外的貨幣價値より說明せんとすることになる。併しながら反對に外的貨幣價値を內的貨幣價値に歸せんとされた。

(註三一一) Das Geld, 2 Aufl., S. 185.

第四節　主觀的貨幣價値

內的貨幣價値の概念のほかに限界効用理論(Grenznutzentheorie)より主觀的貨幣價値が展開されて居る。最初主觀的價値論の中に貨幣を最も遠き等級の財貨と看做し、その貨幣を財貨の場合と同樣に限界効用の法則を應用すると云ふ傾向が存したが、玆に全く異れる問題が存すると云ふことが認められた。かくてウイザー(Wieser)(註三三)は貨幣の使用價値に就て說明することを拒む、卽ち寧ろ貨幣の價値は『貨幣に代へて與へらるべき物の先見的使用價値である』と謂ふ。これと同樣にツッカーカンドル(Zuckerkandl)(註三四)も亦『人々は欲求されたる財貨の爲めに請求される貨幣額は、それが一般に購買者の財力に對應する場合に、若しこの金額を以つて實際に考慮に這入る他の財貨種類の貨幣價格に從つてより效用のある財貨が供給され得る限り支拂はんと決心する』と述べて居る。又ミーゼス(Mises)(註三五)は曰く『主觀的貨幣價値は恒に交換に於て貨幣に代へて受け取る財貨の主觀的價値に歸する、卽ち主觀的貨幣價値を定義して曰く『交換に於て貨幣にルトキウイッツ(v. Borkiewicz)(註三六)は主觀的價値の寫映である』と。又更に曰く『卽ち欲代へて受けとられる購買財の主觀的價望程度が評價計數の組織に依つて表はされるならば所得の明かなる個人にとつては主觀的貨幣價値も亦與へられたる價格狀態を基礎として一義的に決定される』と。

從て主觀的貨幣價値は財貨の主觀的價値と決して同一種類にあらず、單に價格欲望程度並に所得(財産力)の綜合に過ぎない。玆に獨立の內的貨幣價値は借りものの價値に素材價値若くは職能價値は反射價値に、卽ち經濟的意識內容の象徵に轉化して居る。この貨幣價値に關する見解はそれ自體完結して居り矛盾なきものである。併しながらかくの如き概念は最早金屬說に關係することなく、反つて名目說への改宗を意味してゐる。故にこの概念は貨幣の商品觀の完全なる拋棄を物語るものである。

玆に於てか全くこの概念が科學の實際的勞作にとつて效果あり得るや否やは

問題である。ホン・ボルトキウイッは、價格は賣買の目的物と主觀的貨幣價値との比較より生ずるものと考へるのは錯覺であるとさへ强調して居る。同樣にウイクゼル（Wicksell）は『貨幣制度の實際的統制に主觀的貨幣價値を基礎とすることは、それは許されないことである。』（註三七）と述べて居る。けれ共限界効用理論は個人主義的經濟理論として『能動的』（aktiven）價値概念を用ひたが故に限界効用理論は古典學派の『內的』（inneren）貨幣價値を顧みざるを得ず且つそれを彼等が自からの考慮を加へた主觀的貨幣價値說の傍らに强固に据へざるを得なかつた。

（註三三）v. Wieser : Der natürliche Wert.

（註三四）Zuckerkandl : H. d. St., Bd. V1, S. 1135.

（註三五）v. Mises : Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel, S. 95.

（註三六）v. Bortkiewicz : Der subjektive Geldwert, S. 156, Schmollers Jahrb., 44. Jahrg, 1. Heft.

（註三七）K. Wicksell : Vorlesungen über Nationalökonomie, 2. Bd., S. 149.

第五節　法理論的概念としての價値單位

從來主觀價値の概念は常にその創造者自身がこれを以つて始めようと意識しなかつた推論を殘して居る、又內的貨幣價値の概念も殆んど發展の能力なきが故に外的貨幣價値より精密なる研究に依りてのみ貨幣理論的認識の深化が生ずることを得た。若もクナップ及その學徒が單に內的貨幣價値の概念をも否定せんとするならば、それは重要なる理論的基礎よりも、寧ろ一層論爭的な傾向に歸することになる。卽ち交換價値を以つて經濟財を市場に於てそれと交換する處の可能性以外の何物をも意味しない限りに於ては、貨幣はある外的なる意義に於て常に交換價値を有する。而しもしクナップが直ちに貨幣價値を否定し、而も貨幣單位を價値單位と爲さんとするならば、彼れはこの見解に深く同意することになる。なんとなれば價値單位のみたるを得る、けれ共このことは結局名辭上の副次問題である。なんとなれば吾々は又價値單位に價格單位を代置し得るからである。

價値單位は支拂素材と無關係であると謂ふ考へから價値單位が概念上支拂要具一般より解放されるを得る、と云ふ觀念にまでほんの僅かばかり進歩したに過

ぎない。かくて抽象的計算單位(abstrakten Rechnungseinheit)或は抽象的價値單位の概念が成立する。ベンディクセン(Bendixen)アモン(Amonn)及グスタブ・カッセル(Gustav Cassel)等はこの兩概念を確然と分離することを採用した。而しリーフマン(Liefmann)はこの區別に超然として、彼れは貨幣自體を抽象的計算單位なりと定義することに依つて貨幣の概念を簡單に抹殺し去つて居る。

彼れは價値單位そのものは貨幣でなく、寧ろ吾々が尙ほ述べるであらう如き、貨幣に單に概念上の恐らく更に事實上の前提ですらあると云ふことを看過して居る。リーフマンも亦正しく述べて居る如く價値單位そのものは一つの抽象物であり純粹なる思惟物である、而し貨幣は全く具體的なる物であり、限界の確然たる經濟事實であり、其効果範圍の判然たるものである。貨幣は財產力を代表して居る。故に恐らく價格は價値單位で表章されると云ひ得るであらうが而し貨幣で支拂はれる。鑄貨又は銀行券ばかりでなく、帳簿記入も、振替殘額も、正當なる理由から貨幣と考へられる。而し若しも貨幣を屢々任意に考へられるところで而も一度も支出され得ざる價値單位と混同するならば、そは大なる論理的誤謬である。

日常の生活に於ける用語は價値單位と貨幣の間を區別して居ない。若しマルク(獨逸)ルーブル(ロシア)グルデン墺太利等を口にする時、一方に於ては支拂要具自體を意味し、而し他方に於ては價値單位を意味して居る。併しながら科學的研究にとつては兩概念を嚴別することは利益あること明瞭である。

抽象的價値單位の概念は最初クナップに依つて、而も實に價値單位の名目性の學說として發展せしめられて居る。即ちクナップに依れば『價値單位は常に必らずしも技術的ではないが、支拂要具のあらゆる制度に於て例外なく他の方法で、卽ち歷史的に決定される』と述べて居る。彼れに依ればその根據は債務が存在すると云ふ點にある。併しながら債務の內容は一定の素材ではなく、寧ろ支拂要具の單位である、その結果貨幣はこの支拂要具が如何に調達せられるかと云ふことには無關係である。故に國家は債務の生じた場合に行はれて居るところの支拂素材の意義に於ける所謂『眞實債務』(reale Schulden)と解せずして、寧ろ決濟の時に行はれて居る支拂素材を以つて決濟される名目債務と解する。(一一二頁)依つて債務の名目性から價値單位の名目性が生ずる。

價値單位は、なる程素材價値から發生する、價値判斷は先づ『財貨と財貨とが比較される時にのみ成立する。』『併しながら若しこの種類の價値判斷がひとたび行はるるに至るならば、然る時は財貨と財貨との比較は不可能であり、又然る時は價値判斷は名目的に單に歷史的に決定されたる價値單位の使用のもとに於て下され得る。』

名目上の單に歷史的に決定されたる價値單位の概念が貨幣國定說に於けるアルキメデスの點(Punkt)に當る。こゝからクナップは金屬說的の學說を外らしたのである。從つて茲に彼れの體系の極めて強い立場があり、而かもそれは最も弱い足場を有するものである。吾々はも一度歷史的定義の意義を明かにして見よう、卽ちそれは根本に於て單に現在の價値單位を先行の價値單位から說明する。それは、例へば歷史的定義が我邦(ドイツ)の今日の紙幣マルクに、それが以前の金貨マルクに等しいと計算され、從つてそれは以前の銀ターレルの三分の一を示すと云ふところの絕へず誠に憐れなる內容を與へる。この內容は、なるほど法律家にとつて起こる大戰前金マルクで或は一八七〇年前銀ターレルで契約された債務は紙幣マルクで返濟することを得るや否やの解答に、卽ちその肯定のために充分である。併しながら我邦(ドイツ)の紙幣マルクは市場にとつて何を意味するかに就てはこれを以つてはどうしても說明され得ない。

この定義は法律的な立場自體からは充分ではない。なるほど國家は通常債務を名目債務として解して居ることは正しい。併しながら國家はそれを常には行はなかつた。また若し國家がそれを行つたとするならば、國家はそれを爲さざることを要した。價値單位の歷史的定義はそれに依つて事象の概念的要約よりも寧ろ、より多く行爲に對する一つの規定である。故に歷史的定義は一つの理解的概念に至るよりも寧ろ命令的概念に至るものである。從つて歷史的定義は貨幣理論的本質よりもより多く本位政策的本性を有する。從つてこの事を反對論者が獨斷的の宣傳(Demagogie)として說明することは全く不當ではない。なんとなれば法律の完成が幾分理論家の手にも存するが故に、債務の名目性の概念は法律發達に對して強い影響を與へ、從つて時として經濟上の危險を齎らすが而かも亦國庫(Fiskalität)の立場からは極めて便利である。

それにも拘らずクナップの形成した而かも著しく強調したる概念は經濟學上極めて有用であり、而かも實に『歷史的な定義』を抱括的なる『心理的な定義』に導いた限りに於てである。この事は吾々が貨幣を債務支拂の手段としてばかりではなく、價格構成の要素とも看做す場合に必要である。價値單位の心理的な定義が吾々にとつては次の如くして與へられる如くである。

第六節　經濟心理概念としての價値單位

たとへ價値單位が本來ある金屬に對する關係に依つてその意義を得ようとも亦今日それは法律家にとつては或る從前の價値單位に對する關係に依つて決定されて居ようと、それは經濟家にとつて多くの廣汎な意義を有する。經濟家にとつて價値單位は一定の金屬量よりも遙にそれ以上又債務單位よりもより以上に意味を有する。また經濟家にとつて價値單位は就中價格構成の單位である。價値單位はかくの如きものとして無數の交換關係の疑結であり又卽ち種々なる價格經驗の總體である。この意義に於て價値單位を種概念と名付け得よう——恰も樹木の概念の如し。この樹木の種概念が樅、槲、松、檜等の概念を同時に呼び起すが如く、或は寧ろその概念がそれ自體一定の記憶心像たる事なくして、それ等の觀念を自からの中に藏する如く、かくて價値單位は吾々にとつて種々なるものの價格を意味する、卽ち食料品價格、所得、賃貸料等の若干部分を意味するものである。恐らく人々は貨幣法により一マルクに就き若干グラムの金を生ぜしめ得ると云ふことに想到するであらう、しかしながらそれがいかほどであるかを多くの人は知らないであらう。

價値單位の概念は恐らく時間の概念と最もよく比較し得るが。時間も亦抽象物であつて無數なる時間概念の凝結である。恐らく時間を一球がその地軸を一回轉する時間(Zeitspanne)の二十四分の一と定義するならはしである。けれ共心理學者にとつてはこの定義では充分ではない、卽ち心理學的に觀察すれば、時は寧ろ人間が睡眠に必要なる時間のある部分で、又は日々の仕事に費やすある部分及徒歩で五キロメートル歩み又は急行列車で八十キロメートル進行する時間よりもそれは極めて僅かである。

然り、これを心理學的に觀察するならば時間は地球の回轉に對し極めて僅かなる關係を有するに過ぎないと云ふ事が出來得よう。もし宇宙の理由から突然に地球の運動が二倍加することがあるならば、從つて同時に時の概念はそれに依つて變化されるであらう。かくて時間の概念は心理學的、物理學的、其他の事象としての時の觀念を覆すものではなからう。吾々は恐らく太陽は今や地球を回轉するのに二十四時間を要せずして僅かに十二時間であると云ふであらう、卽ち恐らく吾々は一日は宇宙の大革命以來僅かに十二時間であると說明するであらう。樹木の概念も亦個々の樹木に於ける特種性の現はれる事に依つて或は單獨の樹木の種の絕滅に依つては動搖しない。今や時間の概念は無數の時間の經驗に依り、しかして樹木の概念は無數の樹木觀念に依つて確定される如くに價値單位も亦その內容を無數の價格經驗に依つて獲得する。金本位の行はれて居る場合すら金價格は價値單位にとつて全く從屬的な役割りを勤めて居る、例へばドイツ國が戰爭の初めに金本位から紙幣本位に移り、それと同時に本位貨幣素材との連絡を中止したときに、この事は廣い範圍に於ては全く氣付かれず、そして最初價格は全く何等の影響を蒙らなかつたと云ふことが說明される。一國の價値單位が一定重量の金屬に依つて定められる事の殆んどないと云ふことは、特に一つの本位制度から他の本位制度への過渡の場合に明瞭に現はれる。何人と雖ある外國の貨幣制度に就ては、彼れがその價格を知らざる限り如何によく敎へられ樣とも、彼れはその國の價値單位に就ては殆ど全く知らないのである。金貨マルクに現はれたる高い所得の誘惑に依つて外國に移つた人はこの事を如何に苦い眞實として經驗した事であらう。

吾々は今價格は價値單位に依つて表章されると云ふことから出發する、併し乍らいま價値單位が貨幣素材に對する關係に依つて書き改められないならば、その結果金屬本位の支配する場合に於ても經濟交通に於ける價格方程式は根本に於て商品價格が價格財及その中に含まれたる貨幣素材の價値に等しいと云ふことを示さずして、寧ろ商品の價値は價値單位の一定數と等しいと云ふこと、換言すればそれに依つて購買される其他の商品の、もとよりこの場合恐らく支拂手段の實

質たる金屬をも含めての商品の價値に等しきことを明かにする。

從て貨幣價値は反射價値として、又他の價値への通過點として、若くは一切の價値觀念が、云はゞ其中に總括された焦點としてよりよく示され得る。故に價値單位は經濟關係の總體より初めてその完全なる意義を獲得することが明かになる。もしも經濟組織又は生産及消費に於ける諸變化が價値に何等かの影響を與へると云ふことができるならば、それに依つてその變化は價値單位に影響を及ぼすと云ふことも明かである。かくて價値單位は國民經濟總體の一つの鏡となり、從て常に具體的な國民經濟のみより解される。吾々はこの思想方向に進んで行くならば其結果吾々が後に觀察するであらう如き、國民經濟的平衡の理論に到達する。——

吾々は如何に價値單位が貨幣に關係するかと云ふ事を問題にするならば、吾々は又どの道ある種のたへず形を變ずるか、何等かの貨幣が流通し、從て帳簿上の轉記の形式の貨幣が存在しないと云ふことなくして、價値單位を以て計算され又價値單位に依つて交換されるところの經濟領域を考へて見ることが非常によからう。

例へば西ズーダン(アフリカ)に於ては次の如き交換表示を明かにする如き價格表があるであらう(註三八)。即ち奴隷一人は二口銃一挺に等しい、又火藥二瓶は牡牛五頭に等しく道具百斤に等しい、又南京玉の紐の一すじは鰯一ぱいの水に等しく一桝のミルクに等しく一抱への枯草に等しい、又二すじの南京玉の紐は一桝のキビに等し。更にこの他にも多くの例がある、ミシシッピー河方のアメリカ・インデアンに於ては一頭次の如くであつた。

二丁のナイフ　＝　一足のズボン
二丁のナイフ＋一足のズボン＝一着の上衣
二丁のナイフ＋一足のズボン＝小銃一丁
二丁のナイフ＋一足のズボン＝一着の上衣＋小銃一丁＝一頭の馬
二丁のナイフ＋一足のズボン＋一着の上衣＋小銃一丁＋一頭の馬＝皮の天幕一張
二丁のナイフ＋一足のズボン＋一着の上衣＋小銃一丁＋一頭の馬＋皮の天幕一張＝一人の女.

そこで奴隷も家畜も其他の財貨も貨幣の一片として、又價値單位としても說明せんとすることは全く正當ではないであらう。この場合には價値單位は一つの對象物に依つて示されずして、寧ろ交換方程式に這入るところの一切の對象物に依つて示されて居る。最初恐らく一般には未だ一つの價値單位の明瞭な觀念を存せず。然れ共一定の交換關係が存在する事に依つて交換が、云はゞマルクに基いて示される價格表に依つて行はれる場合の如く、ある同じ物を存在せしめる。それに依つて恐らくなるほど價値單位は知る、併し貨幣を知らざる經濟制度を考へ得ることが明かである。茲では一切の經濟力は財貨及諸勞務に關する明白直接なる處分に基礎を置くであらう。貨幣は間接なる處分權 (die Verfügungsgewalt) の用具として初めて成立した。從てリドゲワ (Ridgeway) が自然民族に於て觀察される如き慣習的な交換關係の中に貨幣の一種の胚芽狀態を認めようとしたのは正しい。價格は客觀的に與へられ且つ確定されるが故に價値單位も亦價格經驗の總和としての一つの客觀的量である。若しも吾々が個々の經濟主體の立場から察するならば、それを主觀的貨幣價値として示すことを得るであらう。個々の經濟主體は大體に於て彼の所得及財產の高に依り又は彼れの欲望狀態に依り價格に對し、從て價格單位に對して個人的な立場を獲得するを得る。その事は云はゞ距離は步行者にとつては、自轉車乘りにとつての時間單位と青年者にとつての時間單位とは異つた意義を有すると云ふ事實に相當して居る。それ故に吾々にとつて主觀的貨幣價値は各個の經濟主體の經濟的地位の視角の下に於て觀察せられたる價値單位に外ならない。吾々は主觀的價値學說に依り造り上げられたる主觀的貨幣價値の概念に從ふことになるか、もとより吾々は其概念を更に利用し得るとは信じない。

(註三八) Schurtz : Grundriss einer Entstehung des Geldes, 1893, S. 157 u. 159.

第七節　貨幣債務の內容

吾々は貨幣債務の內容に關する法律論に對し、貨幣價値の內容に關する吾々の見解に於てザビニイの流通價値學說に極めて近い處の回答に到達したが如く、ザビニイは前述の如く貨幣の購買力、即ち貨幣に存する財產權を金錢債務の固有の

内容と見た。彼れはなるほど貨幣購買力を金屬論者又は金屬價値理論家と同じく一定の金屬量に依つて表現されると考へようと欲したが、併しそれは彼れが金又は銀の價値を比較的安定的なる大さとして考へた爲に過ぎない。そのことは一つの他の商品或は一定の原理に依つて要約された一群の商品が貨幣に具體化されたる財産權の代表となるならば、彼れの學說の精神に矛盾しないであらう。此思想は余はジョン・レーマン(J. Lehmann)(註三九)の著述に求めるが、すでに一八二二年に一種の指數本位(Tabular Standard)を提議したるロー(Lowe)に依つて發展せしめられて居る。その他の多くの代表者を見出したところのこの思想は一八九〇年にマーシャルに依つて再び採用されて居るのみならず、其當時、物價指數に依つて契約上の支拂ひが一致せしめられる事を内容とする法律すら起草されたのである。

併しながら貨幣計算の一般的組織として、かゝる方法は實際には應用し得ない。なんとなればあらゆる商人の簿記、否實に吾々の經濟秩序の最も重要なる基礎の一つは價値單位、從て債務單位の形式的一義性に動搖を來すならば問題となるであらうから。

そは本位政策の方法に依つてのみ一般にザビニイの法律に對する根本見解にとつて役立たしめることができる。

なんとなれば其の本位政策の最高の任務は價値單位がその内容を維持し、又國民經濟の均衡が貨幣側から亂されない樣に配慮すると云ふことであるから。この任務は如何に達せられるやと云ふことを吾々は他の場所で研究しなければならぬ。單にこゝでは資本主義的經濟秩序の圈内に於て、價値單位の内容に於ける完全なる安定性は、可能でもなければ又望めもしないと云ふことのみが玆で謂ひ得るとである。なんとなればアダム・スミスの天才的な見方が認識したと同樣に、それ(安定性)は生産と消費との均衡を得せしむるところの價格變動であるから。

本位貨幣が全く攪亂せる場合に於て貨幣債務の名目價値に安定が得られるや否やは別問題である。こゝでは普通の事情に於て健全なる法律的原理は、この場合最大の不正となる。卽ち惡法も亦法なり(summum jus summa injuria=der höchste Recht ist die höchste Ungerechtigkeit)と。貨幣債務の名目價値概念は、結局實際に役立つところの法規(Rechtsregel)以上の何ものも含まないと云ふことを忘るべきでは

ない。上述のことは貨幣理論的眞理であるとするも、而もそれは法規が獨り慣習的なる國家の取扱方法に關する認識の意義に於てのみである。それ故にそれは猶ほ法律秩序の動かし難き原則、或は貨幣理論の一つの公理とはならぬ。吾々は次の第二の卷に於てこの問題に立戻らねばならぬ。

（註三九）J. Lehmann : Die Geldentwertung als Gesetzgebungsproblem des Privatrechtes, 1922.

（註四〇）C. M. Walsh : The fundamental problem in monetary science. 1902——特に二二三頁に於て、即ち茲で商品本位(Warenwährung)とは費用本位(Kostenwährung)及び所得本位(Einkommenswährung)と異つて說明される。所得本位の場合には貨幣の價値は平均所得に對し、費用本位の場合は一勞働時間に於て生產される財貨に對して安定され得る。

第五章　貨幣價値の根據

第一節　最重要なる貨幣理論の解答

たとひ價値單位を貨幣の前提と解するとも、價値單位は交換關係の總體としての近代的貨幣制度に於ては、その內容を終局に於て常に價値單位が經驗するところの對象化に依つてのみ獲得すると云ふことが自から理解される。併しその價値單位の第一の物質化、卽ちその最も重要な具體化は價値である。

從て貨幣は貨幣單位の支持者であつて、又——吾々はこの嚴格ならざる概念決定を以て當分は滿足せねばならぬが——債務の消却の可能性、並に財貨、卽ち一般に市場に提供される總てのものを購買する可能性を代表する。この意義に於て貨幣は交換價値、購買力、支拂力、通用性を有する。そこでこの最後の通用性(Geltung)の根據に對する疑問が生ずる。

獨立なる、卽ち本來の內在的なる貨幣を考へる限りに於ては、これが答へは極め

て簡單である。卽ち貨幣は通用力を有し、交換價値を有する。なぜならばそは効用性と稀少性とを要約するからである。茲で滿足なる說明と云ふのは、全く次の本來の使用價値理論をのみ示して居る樣に見へる。卽ちそれ自身貨幣價値の內容に對する疑問を使用價値よりも恐らくよりよく解く勞働價値說は、この場合全く役立たぬ。勞働價値說は何故に貨幣が支拂に用ひられるか、と云ふ疑問に對して沈默を守つて居る。なんとなれば一つの對象物が勞働を具體化して居るとするも、そは夫故に何等の欲求をも惹起するものではないからである。卽ち吾々は常に通用性の根據を探求するに當り勞働價値の根據を探求する場合に現はれるものに遭遇する。——この勞働價値學說に、例へば貨幣が正常狀態に於ては、云はゞその同體、今や享樂財貨に對する指圖證を示すところの生產行爲の證明書であると謂ふベンデイクセン(Bendixen)並にシュムペター(Schumpeter)の代表する見解は可成りに接近して居る。若し吾々が强いてこの見解を、この場合勞働價値說に、ずぐ隣りして並べ、而も尙ほ生產勞働學說を前に置くならば、其考へは既にその事に依つて本來的に考へられたる名目說的命題として打ち建てられることになるであらう。併し實際に於てはその考へは寧ろ一箇の貨幣學說として經濟倫理的な公理を示して居る。

勿論一見した處、職能價値概念は貨幣の通用力を未だ充分に說明し得ない。卽ち職能價値の概念を貨幣の通用力に應用するならば、それは全く純粹なるタウトロギー(Tautologie)になる。なんとなればそれは全く貨幣が欲求されるのはそれが貨幣であるからである、と謂ふに過ぎないが故である。從て職能價値の概念は貨幣的利用をそれ自身に依つて說明して居る。吾々は尙ほ茲に概念上のタウトロギーはこの場合所謂生活上のタウトロギーに對應して居る、と云ふことが明かである。

主觀的貨幣價値の概念を通して貨幣價値の內容をみごとに捕へたる限界效用學說は、貨幣の價値根據を說明する爲めに他の理論を借用せざるを得ない。其際に限界效用學說は通常使用價値學說に據る。(註四一)(v. Mises) 卽ち才氣に富める假說に於て貨幣價値を歷史的に傳承されたる價値の上に築かんと試み、而も實に彼れは現在貨幣價値を過去の貨幣價値より導き、終局に於て以前の貨幣價値を貨幣素材

の商品價値より生ぜしめて居る。そのほか又職能價値說に據るものもある。卽ち『既に貨幣としての職能を有する貨幣は、而も亦その交換價値の本來の源泉が失はれる場合にも尙ほ有價物として存する事を得る。』

併しながらクナップは使用價値學說と同じく明瞭に且つ簡單に全くこれと反對の意義に於て貨幣價値の根據に對する疑問、卽ち公布的通用力の概念に依つて解いて居る。クナップに依れば通用力を基礎付けるところのものは國家の命令、卽ち公布である。

おそらく國定貨幣說の如何なる命題も、この命題以上に正當に攻擊されたものはない。もとよりクナップは如何なる命題もそれを制限することは彼れ自身の學說にとつて勘からず危險であらう。已にクナップは國家に依つて承認されない銀行券、例へば振替計算の如きを支拂手段(もとより貨幣としてではないが)として說明することに依つてこの命題の普遍妥當性を止揚したが、彼れは同じく又その通用力を、支拂が交換財貨に依り、云はゞ一金屬の重量單位に依つて爲される限り、使用價値に歸して居る。

クナップは呼稱價値（Nennwert）の概念を否定するに拘らず、近代貨幣制度の全組織の基礎となつて居るものは正しく呼稱價値通用力の概念である。——もとより吾々はそれを名目的通用力とも謂ひ得るのである。——但し此の場合吾々は呼稱價値通用力を以つて單純に次の事を意味する、卽ち具體的支拂手段は國家たると、又は他の地域團體たるとを問はず支拂協同體が表記又は特別なる命令に依つて與へると同額の價値單位を通用せしめると云ふ事である。だが併し近代貨幣は何故に呼稱價値通用力を有つか、と云ふことに付ては(國家又は其他の)公布概念に依つて充分に說明されるに過ぎない。

(註四一) L. v. Mises : Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel. 1912, S. 107 ff.

第二節　原始的貨幣の價値根據

貨幣價値は既に貨幣の原始的形態に於ては、簡單にして唯一なる原理に歸せしめられない。多くの場合實に如何にして使用財貨は商品となり又而して商品は

一般的交換手段となるかは全く明瞭に認識される。

單純な交換は交換双方が自己の過剰に所有するものを與へ、それに換へて、それに比しては缺乏を感じて居る處のものを反對給付として受け取る場合に現はれる。只かゝる交換のみが現はれる限り、未だ決して一般交換手段は存在せず。かゝる一般的交換手段は一つの財貨が最早それ自から反對給付としての爲めに受取られるのでなくて、それが與へるところの他の交換可能性に關連して受取られる場合に成立する。然る時はその財貨は交換手段となり、而して此財貨の使用が普遍化されるに從ひ貨幣となる。たとひ近代的貨幣の概念決定にとつては獨り此事情のみにては充分ではないとするも、而も其事情が存在するならば已に貨幣の原始形態が存在するのである。(註四二)

そは通常貨幣になり得るものは本源的需要の財貨ではない。なんとなれば經濟の原理狀態に於ては個人の使用する處のものは通常共同の勞働に依りて獲得され、そして總ての種族員に何等かの方法で分配されるからである。從て交易の爲には通常次の裝身具或は武器の如く或は個人の財貨になつたところのもので

ある。

寶貝(Kaurimuschel)並に金貨(Goldmünze)とは、この發達の顯著なる對象物である。もとより印度洋のある場所にのみ漁られた處の寶貝はシヤム、ベンガルン、アラビア、ペルシヤ、又はフイリツピン等に於て支拂手段として役立つた。寶貝はアフリカの大部分に於ては今日も尙貨幣で及び支那に於ても流通した。寶貝は往時は現在の金と同樣なる役割りをなしたのである。寶貝並に金貨(Goldstücken)の他に、時代の進むに連れて無數の他の生産物が貨幣として役立つた。全く人類學的思料を大觀するならば何等かのある方法で欲求される對象物は殆ど總て或る場所に於て又は或る時代に於て貨幣であつたと云ふ印象を得るのである。極めて特種なる貨幣と云ふのはおそらくバタク民族(Battak)に於て支拂手段として流通する人間の惱蓋骨(シヤリコーペ)である。又一層有名なるものはカロリン島に於ける五〇キログラムの重さのある挽臼形の標石を、大膽な航海に依つて隣接せるバアラウ島から携へ來つた珍貴なる石の貨幣である。

使用の對象物又は其他の欲望の目的物を基礎とする此の貨幣種類の一切は利用貨幣(Nutzgeld)の形態として要約される。(註四三)この場合貨幣の交換價値は直接にその使用價値、卽ちその利用價値より生じ、或は生ずるかの如き貨幣に關する問題である。もし理論で、貨幣を經濟財貨として總ての商品の中最もよく市場流通性を有するものとして、卽ち又價格財として定義するならば、その理論はこの種類の場合を考慮して居るのである。然る時は貨幣は結局商品の使用價値に依つて流通力を有つ處の特性を有つた商品に他ならぬ。但しその場合その商品は流通のみに役立ち一般に消費には齎らされないものである。この考慮は極めて明瞭且つ便利であるが故に、吾々は素材價値なき貨幣を觀念する場合に當つて長くその考慮を離れず、又ある素材價値なき貨幣の效果も亦素材價値及利用價値に基かしめむと試みる。併しながら斯くの如き見解は近代貨幣制度の諸現象に矛盾するのみならず又著名なる貨幣史的及人類學的事實にも矛盾するものであつて、就中章標貨幣(Zeichengeld)の現象に反するものである。

章標貨幣はなるほど一般的交換手段として一般的交換價値を有するけれ共それにも拘らず何等の使用價値を有せざる客體である。例へばこれに關しては中部スダンにおける支拂手段として役立てられて居る綿織物の一編であつて、それは屢々被服の目的には使用され得ない樣な、まことに幅狹な綿布(注四四)である。これと非常に類似せるは、昔し(十世紀に於て)ベーメン(チエッコ・スロバキア)に於て貨幣として流通した處の布片であつた。他の例としてロシアの歷史を引用すれば元來此處では獸皮が貨幣として利用され、其後獸皮の代りに獸の頭皮に小さく捺印された皮片が支拂手段として使用された。又特別なる記錄に依れば北方の新へブリー島に於ては、初めから貨幣職能の目的のみ造られたる莚であつてその莚が朽蘭すればする程、又黑ければ黑い程、一層高價となる處の莚貨幣を使用すると。又廣く例を付け加へるならば余は或る旅途に於て偶然にも英國の輸出品をアフリカ土人の爲めに定められたる章標貨幣として知る事が出來た。卽ち影像のついた、そして擴大のウヰイ鐵板であつて決して武器としては使用されなかつた。なんとなればそれは此の種族にとつて貨幣として役立つたからで、卽ち此處では只だ鐵板の輪廓を見るならば何かこの場合支拂手段に轉化したと云ふ

事を回想し得る。勿論誰かが冗談にこの貨幣の膨張を防いだであらうか？と云ふことに就て云ふであらう。又たしかにこの貨幣を今日も歐羅巴人自身、土人からの支拂として受取るならば、只だ其場合にのみこの貨幣は流通するであらう。

一般に無數なる種類の章標貨幣がある。で一般に本來の使用對象物の變形に依つてその章標貨幣が成立すると云ふことが證明されるであらう。しかも實にその場合——Thileniusとともに——膨大形（Wucherformen）と縮少形（Kümmerformen）とに區別し得る。卽ち道具と器具又は武器と裝身具とを區分する事が出來る。一般に殆ど使用財貨及消費財貨のあらゆる種類の財貨は、それが交換手段となつた時、極めて特種な方法に於て變化した。例へば槍、小刀、弓、矢、鋤、臼、丸木舟、石棒、衣服、釣針等は形態及寸法の變化する事に依つて章標貨幣となつたものである。時として基礎材料そのものは全く別なものであつて粘土製のカカオボーネン並に銀製の棗の實が章標貨幣となる。

章標貨幣の場合に於ては使用目的が考察されないと云ふ事は極めて明瞭なことであつて——古い使用方法は大ていの場合に解らない——その爲に只だその中に存する交換可能性に關して考慮してのみ流通すると云ふことは直ちに明白である。この事は若し形態と表記（Aufschrift）とに依つて交換客體が提供され貨幣はその等價物として看做される場合、この事は非常に明瞭に現はれる。斯くの如き說明は獨り章標貨幣のみに見るばかりでなく、交換貨幣の場合にも亦見られる處である。その例は古代のギリシャ又はフエニキアの貨幣に牛又は羊の燒印をなせるが如し。またアウグスツスの政治の下では殆ど貨幣は畫を以て表はさなく、寧ろその豚の後半身の形廓をはつきりと表はして居た。

常に貨幣の原形は元來貨幣價値の二つの根源が存在し、その一つは貨幣の內部に存在し、他は貨幣の外部に存在して居ることを示して居る。殊に人々は自然民族の章標貨幣を現今の紙幣及其他近代的な素材價値なき形態と比較して見たくなる。卽ち章標貨幣はなるほど交換價値を有つけれ共、何等使用價値を具現しない。その事は二つの現象が基礎的な群集心理的な事實を基礎とし又現今の紙幣は何等獨り近代的經濟技術の技術的構造のみでないと云ふことを指示する。

(註四二) Max Schmidt : Grundriss der ethnologischen Volkswirtschaftslehre, 1921, 2. Bd., S. 260,261

(註四三) G. Thilenius ; Primitives Geld, Archiv für Anthropologie, neue Folge, B. d. 18, 1920, S. 12.

(註四四) Dies s wie die meisten anderen Beispiele aus Schurtz : Grundriss einer Entstehungsgeschichte des Geldes, 1898, und namentlich aus Thilenius, a. a. O.

第三節　近代貨幣の價値根據

直接的にも間接的にも使用價値の上に建つて居ない交換價値存在は之を了解する爲めに疑ひもなく極めて困難である。クニースは『使用價値及交換價値の區別を極めて重要視する處の秀れたる國民經濟學者自身は、貨幣それ自體は交換價値のみを有し、何等の使用價値を有たないと主張する』と云ふことに就て疑ひを差挟んで居る。論理は先づ貨幣を轉々せしむる爲めにのみ受取る——それは無限に進むものであるが(註四五)、その事と衝突する。一つのものは他のものが　財貨の價値を量るが故にのみ、その財貨の價値を量とも云ふことは論理上認められないのである。

併しながら此處には各方面の生活に於て繰り返される處の心理學的現象は存しないか？總ての支配關係は他が從ふが故に一つが從ひ、一つが從ふが故に他が從ふと云ふ點に基礎を置いて居ないか？而して如何に多くの道德並に慣習は本來の動機を人間に意識せしむる事なくして專ら模倣衝動に基いて居ることであらう。人々は上述の生活の非論理を非難するかも知れないが、しかもそれは認めなくてはならぬ簡明なる眞理である。自然法的時代はこの事を、この場合、人間の默契が存在すると云ふ觀念に依つて覆ふて居る。斯くてヒュームの爲めには貨幣の流通根據(Geltungsgrund)は個人の同意である、同樣なる觀念はおそらく結局に於て又職能價値論の根據ともなつて居る。只この說は煩瑣的なる表現方法をかりて居る。各々はこの場合學說の非論理があると云ひ得るけれ共、併しこれは事實の非論理に依つて許されるであらう。勿論なには兎もあれ貨幣價値の前提は稀小性の契機である。言ひ換へればそれが數量的な限定を前提とする事實である。又帳簿上の振替(handschriftliche Buchentragung)も亦それは數字的な限定を置いたところの請求權を示すが故にのみ貨幣の役割を擔當する事が出來る。然れ共稀小性

のみが、それが一つの欲求に對して充分でない限り如何なる種類の經濟價値をも形成することはできない。一經濟主體の欲求はそれが他の經濟主體に於て存在すると云ふ唯一の理由より成立する事ができると云ふことを各人は群衆心理的事實として主張する。併しながら如何にこの欲求が根本的に成立し、又その原因が何れにあるかの疑問はそれが直接に使用價値に基かない限り尚ほ明瞭である。

瞭らかに二つの可能性がある。卽ち一方に於ては貨幣價値は權威的基礎の上に築かれ得た。この事は國家又は其他の地域團體が法律又は行政的な方法に依つて支拂手段を創造し若くは承認する場合に存在する。要するに交換價値、卽ち通用力と云ふものは今や公布に依つて、換言すれば債權は總てそれに依つて精算され又各租稅義務がそれ(貨幣)に依つて滿され得ると云ふことの規定に依つて成立する。

貨幣價値は權威的基礎に基づくほかに又直接に經濟利益からも發生し得る。而かも實に信用の基礎に基ずくものである。銀行券及振替殘額が無條件に且つ一般的交換價値であつて、從つて貨幣の性質を獲得して居ると云ふことは、本來的に且つ部分的に今日も亦信用機關が其取引態樣に依つて他の支拂手段で決濟することを無條件に許すと云ふことと關連して居る。けれ共支拂慣習は著しく變化し得るものであつて、時の進むに從つて他の支拂手段が益々勘く利用される。確かにそれが流通場裡より全く消滅することもあり得るのみならず、支拂が專ら銀行一流の振替指圖の方法に從つて行はれるが如き貨幣制度も考へられ得る。次に貨幣の價値は何時でも相當なる債權が專ら義務に對立すると云ふ點に基いて居る。併しながら一般に全貨幣制度はなによりも先づこの平衡、卽ち之が均衡安定(Ausgleichssicherung)(註四六)に基ずく。

各人は本書の第四編に於ける各個の貨幣制度の觀察に於て次の事を見る。卽ち近代貨幣史に於て特別に貨幣の種々なる價値基礎に依つて區別される處の三つの大なる時代が連續して居ると云ふことである。貨幣は先づ價格財であり、次に貨幣價値は商品的流通力に基礎を置く。なんとなれば貨幣は鑄貨又は證券に轉形する事に依り貨幣は益々價値標號(Wertmarke)となり、從つて公布的通用力が著しく顯はれる。信用制度及就中帳簿貨幣(Buchgeld)の發達と共に、それは一つの

新らしい價値基礎となる。卽ち貨幣は信用的通用力を獲得した。

（註四五）　B. Moll : Logik des Geldes, 1916, S. 80.

（註四六）　R. Kaulla : Die Grundlagen des Geldwertes, 1920.

第六章　貨幣價値の作用形態

第一節　貨幣の交換價値性質

貨幣價値の內容及び基礎に關する見解から如何に貨幣價値が表現され又如何に貨幣價値が他の經濟的價値に對立するかと云ふ疑問に對しての解答は必らずしも生じない。

もとよりある獨立な內的貨幣價値を假定するところの諸學說に依り相對觀念（系 Korrelat）として貨幣が商品として（素材價値學說若くは商品の如く（職能價値學說作用すると云ふ觀念を直ちに導く。この見解に依れば一財貨が他の財貨と交換される如く貨幣は他の財貨と交換される。

それに反して限界效用論者はこの問題に對して全く無力である。彼等は貨幣の價値根據を他の理論の助けをかりてのみ說明することを得る如く、この場合その解答の爲には手賴らなければならぬ。この場合にもまた彼等は內的貨幣價値

言ひ換へれば素材價値又は職能價値に逃避する。なんとなれば主觀的貨幣價値は借りものゝ消極的の價値なるが故に、この概念は貨幣と商品間の動態的干係に關して何等の說明をなさない。その結果限界効用論者は貨幣價値の作用形態より一つの名目理論に改宗せねばならぬ。けれ共彼等の多くはこの點に於て未だ金屬論者に止まつて居る。彼等はこの場合自家撞着に落入つて居ると云ふことは、次の點に明かに現はれて居る。彼等は內的貨幣價値と主觀的貨幣價値との區分に對して商品側に於ける何等の類推を與へなかつたと云ふ點にある。この場合彼等は主觀的價値と內的價値とを混同して居るが、貨幣價値の作用形態の爲めに主觀的貨幣價値の概念から名目論の結論を引出したる限界効用論者の中に特にシユムペターが居る。(註四七)

彼れは貨幣は商品である、と云ふ商品理論に極めて猛烈に對立する處の指圖證券說（Anweisungstheorie）の代表者である。(註四八)

指圖證券論者が貨幣に商品性質を拒む事に依り彼等は容易に貨幣は一般に何等の交換價値を有たないと云ふことの見解に到達した。その場合に彼等は恰かも角をためて牛を殺すが如きに類する。

人々は貨幣が指圖證券として作用すると說明し得るかどうかに關して、恐らく不必要な言語上の論爭を企てた。これに關してヘルフエリツヒは曰く『若しも吾人が指圖證券は一定の人間及一定物に對する一定の請求權を與へると云ふ內容の指示を除き、そして不定量の不定財貨及不定人間の調達に役立つと云ふ內容のみを與へるならば、唯に貨幣のみならず市場に齎らされる如何なる商品も一つの指圖證券である』(註四九)と。

ヘルフエリツヒはこの論證に依り次の基礎付けに依つて貨幣に對する交換價値の概念を否定するシユムペターと同程度に正しい。即ちシユムペターの到達したる主張に依ると『吾々が貨幣を提供して商品を受け取るのは、それが交換價値を有するからであるが、しかもそれが交換價値のみを有するのは吾々がそれに代へて商品を得るからである』(註五〇)と。

確かに貨幣と商品とはそれが相互に交換されると云ふ事に於て共通である。この意義に於てそれ等は双方に交換價値を有し、即ちそれ等は云はゞ共に相互に

對する『指圖證券』である。併しながらこの理由からそれ等は相互に區別される。なんとなれば商品の交換價値は確かに市場に於て貨幣を取得する可能性を意味するが、併し貨幣の交換價値は商品を購買する可能性を意味するからである。

交換價値並びに使用價値の傳統的な對立から出發するならば順次に財貨、商品及び貨幣の上騰的なる概念上の階段を生ずる。卽ち使用價値のみを具體化して居る財貨はそれが市場に達することに依り商品となり、かくて財貨は交換價値を得る。けれども商品の交換價値は需要に依つて制限されるものである。商品がその交換價値を次の方法で擴大する場合貨幣に發展する、卽ち一定の經濟範圍、例へば國民經濟內に於て又はすべての經濟主體は常に商品を代償として受取らんとするのであつて、その場合經濟主體はその商品を商品の特種なる使用價値の故に必要とするや否やは論じないのである。この意味に於て貨幣の交換價値は無制限である。貨幣は無條件にして且つ一般的支拂力を有し、又貨幣は無條件に一般的な通用力を一定の經濟範圍に有して居る。この理由から貨幣はその最も純粹なる形態に於てあらゆる具體的欲望又は總ての使用價値より解放される。しかして價値を有する素材へのあらゆる關係なしに全く自立的に存在することが出來る。

貨幣は交換價値を有すると云ふ見解に對する、最も强い支柱は次の二つの事實に存する。就中國際爲替相場の變動に存する、卽ち爲替市場に於ては貨幣は疑ひもなく評價の對象物である。貨幣はそれ自體玆で經濟財貨の世界に於ける通過點としてのみ、卽ちその購買力の爲めにのみ評價されるならば、この市場に於て貨幣は無條件的に商品であり、從て如何なる場合にも貨幣は交換價値を有する。又もしこれに對して元來內國にとつては內國支拂手段が商品に非ずして外國に對する支拂手段のみが商品であると反對するも、この見地の形式主義はその物的基礎の弱點を曝露するものである。同一國の二種の貨幣種類が双方共に何等の素材價値基礎を有せずして兩者の間に打歩（Agio）が生ずる場合に、貨幣の交換價値性質は恐らく一層明瞭になるであらう。この場合證券理論は一方の貨幣種類が經濟財貨になつたと主張するを得ない。なんとなれば双方の何れも何等の使用價値を示さないからである。例へばフランスに於けるルヰ十六世の治下に發行

されたアッシニヤ(Assignaten)が或る州に於て共和國のアッシニヤに對して打歩を有して居た場合の如きである。更に例へばロシアに於て種々なる紙幣ルーブルの發行されて居る。なんとなれば帝政時代のルーブルはケレンスキールーブルよりも價値が大であり、又ケレンスキールーブルはソビエットルーブルよりも一層通用價値が大である。——その他にこの現象は又鑄貨を單一に融合されない限りに於ては、金屬の貨幣種類と素材價値なき貨幣種類との間に存する事を得るところの打歩とも本質的に異るものではない。金屬は今日の貨幣制度に於て決定的なる價値根據であるとの金屬主義的見解に加へられる、最も強い反對論據に歸せられる有名な現象は、七十年末に奧太利に於て紙幣クローネが銀クローネの價値以上に騰貴したと云ふ現象が見られたのである。併しながらこの現象は貨幣は何等價値を有たないと云ふ表券說的見解の反證ともなる。なぜなれば貨幣の價値性質がこの場合ほど激しく現はれた事がないからである。

言葉の感じ又は言語用法を害するのみならず、又重用なる事實をも隱蔽すると云へよう。もしも貨幣は何等の交換價値を有せず價値の範疇に屬しないと說明せんとするならば、それは卽ち理論がかゝる說明をせんとする限りその理論は主張の背理(パラドクス)に依つて恐らく一時混亂するであらう。しかしながら終局に於てこの理論が關係のないものとして押し除けられるか、或は全く氣狂じみた新聞記者的の誤謬又全く無責任な通貨政策的實驗に對する補佐役として引入れられなければならない危險を冒す。例へば當時アメリカ合衆國に於て誤解されたる數量理論が通貨膨張論者の努力の辯明に利用されなければならなかつた。

しかしながら又若しも貨幣が價値の領域に於て占める特種なる地位を利用して貨幣に價値性質を簡單に否認せんとするならば、理論自體に對しても又強い障害を生ずるのであらう。なんとなれば貨幣を經濟の總ての他の客體と結合するところのもの、卽ち實に貨幣が經濟の總ての他の客體と共通に有するものはその價値である。今や個人主義的原子論的經濟觀より出發するも或ひは普遍主義的有機的經濟觀より出發するも、その何れたるを問はず、貨幣價値の否定はその研究を假令不可能ならしめなくとも著しく困難ならしめるであらう。卽ち前者の場合に於ては個人の經濟行爲の動機が幾分不明瞭となるからであり、後者の場合に

於ては貨幣と商品とは通常、もはや相互に關係され得なくなるからである。

しかし貨幣の特殊なる價値形態を名稱的にも表現することは必要である。吾々は貨幣價値を先づその內容上商品價値より區別され又その根據に於ても區別されると云ふことを既に見た。其處で今や吾々は貨幣價値がある特別なる效果形態を有つことに關して說明しなければならぬ。

（註四七）Schumpeter：Das Sozialprodukt und die Rechenpfennige, 1917/18.

（註四八）Schumpeter：a. a. O., S 640.

（註四九）Helfferich：Das Geld. 2. Aufl., S. 534.

（註五〇）Schumpeter：a. a. O., 647.

第二節　借方價値としての貨幣

もし經濟財貨の交換價値を貸方的交換價値として又簡單に貸方價値(Aktivwert)として說明せんとするならば、貨幣價値に借方價値(Passivwert)の性質を與へることを得る。卽ち國民經濟に商業簿記の原理の意味を移すならば、國民經濟的貸方の部に財貨及び人的勞務の總體並に總ての技術的經濟的資本及地所等を置くことができる。次にこの反對の側、卽ち借方の部には物的又は權利的性質の總ての財產權並に貨幣等が來る。扨て貨幣は株券(Aktie)質證券(Pfandbrief)及び債務(Obligation)及び抵當(Hypothek)並に國債地方債(Schuldverschreibung)手形(Wechsel)就中一方に於ては家屋及び土地所有、他方に於ては帳簿上の債權(Buchforderung)の如き多少とも無形的種類の貨幣價値を有する權利(Rechten)等と同列に並ぶ。

これ等の總てのものと共通に、貨幣は吾々がその法律的意義に於ける指圖證券の概念を除く限りに於ては貸方價値に對する指圖證券の性質を有する。それと共に貨幣は借方價値或はある點に於て同じことではあるが、財產及所得、卽ち國民經濟の貸方價値に對する總ての經濟的支配力を示す。

私的經濟に於ては借方及び貸方は、もとより別な方法で區別される。商業簿記に於ては、例へば通常は手許の現金、株式、建物は借方側に並べられる。卽ち國民經濟的意義に於ける貸方價値が私經濟上の簿記の借方側に入れられると云ふことはもとより生じない。（動產抵當(Faustpfand)と現物債務(Naturallasten)と同樣に除外

して居る)。この概念を更に進んで說明するためには、國民所得及び國民財産を計算する時、借方價値並に貸方價値とは決して合計され得ないと云ふことが明かに强調せられる。寧ろこの總計は貸方價値の全部の合計に依るか、或はまた借方價値の總和に依るかによつて生ずるものである。その場合もとより例へば抵當が家屋所有の價値に包含される如く屢々重複して居ると云ふ困難がある。特に國債がある程度に全體の他の借方價値の中に含まれて居ることも注意すべきである。更にこの說明はこの場合國民經濟の貸方價値並に借方價値とは一體何にを意味するかと云ふことを明かにするに役立つであらう。

吾々は借方價値を種々なる觀點より分類することが出來る。最も重要なのは分類原則(Einteilungsprinzip)であらう。まづ個人の財産權を明かにし、而して一般に一定の企業に對して權利を有する株式又は一定の土地を基礎とする抵當の如く收益分與を證明するところの借方價値がある。もしもこの種類の財産權を具體的なるものと爲すならば、それに對して直接に貨幣を請求し、一定の收益源泉より獨立である抽象的なる財産權がある。この場合吾々はまた更に抽象的なる請求權に依つて全く異つたものを意味して居る法律的概念構成より離れる。吾々の意味する抽象的財産權に屬するものは、先づ手形請求權(Wechselforderung)帳簿上の請求權(Buchförderung)である。それは、もとより一定の債務者に向けられて居るけれ共一定の收益源泉ではない。それには更に納稅者の全體に依つて利子が支拂はれ且つ消却されるところの公債がその中にある。これに就ては貸方價値に對し而もまた他の借方價値に對して最も抽象的なる指圖證券となすことができるところの貨幣それ自體もその中に加はる。

貨幣は他の抽象的な借方價値と共通にそれ等は總て價値單位を指示し、從つてそれが市場に於て目指すところの價格は、通常の場合はかなり正確に表記(Aufschrift)に一致する。(株式も亦價値單位を指示するが、その相場は例外的にのみ表記價格(Nennwert)と一致するに過ぎない)。

併しながら貨幣は原則上しかも實に無制限に且つ無條件の支拂力に依つて價値單位の他の支持物より區別される。

第三節　貨幣の定義

吾々はかくて完全なる貨幣の定義に到達する。卽ち貨幣は一般的且つ無條件的なる支拂力を有する價値單位の支持者である。

この定義が最初に貨幣を價値概念に因つて經濟界に這入らしめ、そしてこれに依つて貨幣をその他の經濟財の列に加へる。併しながらこれ等の經濟財の大なる分量から、それは同時にある借方價値の一つとして、卽ち價値單位の支持物としても特色を與へられる。從て玆では既に經濟財並に勞務からそれが遊離されることになる。けれ共更に貨幣は其他の抽象的借方價値から又は其他の價値單位の支持者から分離されねばならぬ。そしてこの事は一般的且つ無條件的なる支拂力の屬性に依つて生ずるものである。

詳細に定義すれば貨幣はそれ自體市場の動搖から免がれない。卽ち貨幣それ自體は何等の價格構成に曝されない。なんとなれば貨幣は價値單位の支持者として、云はゞその價格を常に伴つて居るから。併しながらその購買力の無制限である爲めに貨幣は保險料とか又は何等かの種類の割引又は打歩を附せられることを免がれない。ある現象が上述の定義の意義に於て貨幣であるや否やの疑問に對する考査に當つては、從つてそれが價格構成を基礎とするや否やを研究しなければならぬ。例へば一商品が特別なる狀況に依つて市場に流通せられる性質を得たとせよ。しかる時は商品が價値單位を現はし又正確にそれに應ずる同額の價値單位が支拂として授受される場合にはじめてその商品は貨幣となる。例へば戰時に於ける砂糖又はバタの如き非常に要求される對象物は常に容易の仲介者となることを得るが、併しながらその故にその對象物は貨幣とはならぬ。手形はなるほど何程かの價値單位を支持するが、しかしそれは(手形)割引利率の動搖を被むるが故に手形は貨幣の主要を缺く。

貨幣のこの特質のあるために誤つて貨幣の價値特質を否認し易い。併しながら上述したる如くこれは不都合なことである。その理由は實に相互に打歩の變動する二つの貨幣種類が存在し得ると云ふことである。だがこの場合は如何に吾々の定義に當て嵌るか？。これに關する解答は單にその場合二つの貨幣制度

又は二つの本位が相並んで行はれ、從て吾人は本書の第二の卷に於て詳細に研究しなければならぬ貨幣制度が存すると云ふことを指摘すれば足りる。

價値單位がその內容上よりして何等確定的でないと云ふことは、その價格經驗の總和として、この價格經驗と共にたへず變動を被むると云ふことより生ずる。この意味に於て貨幣價値も亦動搖する。併しながらその動搖はこの意味に於てのみである。しかし形式的に觀察すれば貨幣が安定された價値單位の支持者として完全に不變價値である。そこで貨幣は經濟の公分母となり、また交易坐標圖(Koordinatensystem)の項點となり、又一層具體的に說明すれば商品の遊星界が旋回するところの價値構成の太陽となるのである。けれ共貨幣が一般に且つ無條件の支拂力の支持者として有つところの中心的地位が尙ほ一層重要である。この方面から觀察すれば貨幣は經濟循環に於ける始端にして且つ末端であり、又總ての企業の出發であり且つ終焉である。確かに貨幣額に關する支配權は貨幣の無條件的支拂力に依りて市場構成の圈內に於ては何時でも一切の財貨並に勞力を獨占する可能性を意味して居る。ある貨幣額に對する支配權は更に同額の價値單

位を支持する義務の履行に關する安全を意味して居る。卽ち貨幣額と債權間の關係はいつでも不變である。なんとなれば債權は契約上貨幣を支持し、その上に法規は通常この關係を貨幣素材並に價格の總ての變化あるも尙ほ且つ保證するからである。もし物財(Sachvermögen)が具體的貨幣額に還元され、またそが營業上の用語に依つて一度び精算されると云ふ事になると、その物財はその上に存する總ての債務請求(Schuldforderung)に對して全く確定的なる關係を得るのである。

茲に代表される貨幣の定義は名目論的貨幣論に屬するものとしてクナップの支拂手段の概念に可成りに接近して居る。クナップに依れば支拂手段とは次の如きものである。『流通的に利用される動產』(eine beweg̈liche Sache, die zirkulatorisch verwendbar ist)である。勿論この事は同語反覆(タウトロギー)以上のものではない。なんとなればこの言葉に依つては、元來支拂手段はこれに依つて支拂を爲される箇片であると云ふことを述べたに過ぎない。併しながらクナップはそれに附け加へて次の如くに述べて居る。『支拂手段は法規に依つて價値單位の把持者として把握された動產である。』(註五一)と

確かにクナップが貨幣と爲して居るのは一定種類の支拂手段、即ち價値單位に於けるその通用力(Geltung)を法規に依つて規定されたところの鑄貨又は證券としての形態を與へられたる支拂手段である。即ち上述せる如き彼れの術語の上では定形的—宣言的—或は表券的支拂手段である。從てクナップは玆に吾々が定義して居るよりも遙かに狹く貨幣概念を解して居る。卽ち吾々の玆に定義する處では支拂に役立つ總ての手段をその現象形態より獨立に貨幣として說明し、從て吾々は各使用財貨並に動產として全く現はれないところの帳簿上の貨幣を貨幣概念の中に加へるのである。

これに依つて吾々は常によりよく古い獨逸の用語と一致することになる。なんとなればこの用語に依れば貨幣は支拂手段を意味するからである。この貨幣と云ふ言葉は『通用する』(gelten)と云ふ動詞から來たものである、けれ共この言葉は本來今日謂ふところの意義を有たず、從てロッシエルの曰ふ如く『通用力』(Geltung)と關連して居ないのであつて、寧ろ『支拂する』(zahlen)即ち反對給付或は賠償を爲すと云ふことを意味して居る。それ故に貨幣は本來あらゆる種類の給付又は報償を意味して居る。ゴチックでは„gild"は„gilt"は同額の賠償犧牲であり。又古のノールドの„gjald"は同額の支拂、公課であり又ミッテル・ホホドイチュでは„gelt"は慣習的に支拂、財產、收入であるが、而かも又既に屢々支拂手段の意義にも用ひられて居る。(註五二) 如何なる場合にも昔しから用語は貨幣なる言葉に依つて給付及び支拂ひを考慮に入れて居るが、通用力を考慮に入れては居ない。

吾々はクナップが貨幣を價値單位の把持者として說明する限りに於て彼れの定義に從ふ。併し吾々は價値單位の狹い法律的な概念に代へて二重の意義に於てより包括的なる概念を置く、蓋し吾々は貨幣を單に貨幣債務の單位としてのみならず、價格の單位としても亦借方價値の單位として解するからである。

(註五一) Knapp: Staatliche Theorie, S. 6.

(註五二) Menger: H. d. St., Bd. 4, S. 562, und „Grundsätze der Volkswirtschaftslehre", 1. Teil, S. 254.

第四節 貨幣職能論

吾々の貨幣概念は外的な貨幣形態より全く抽象することに依るのみならず、特に職能論を除却することに依つても亦傳統的な金屬論的定義(註五三)より區別される。貨幣は財貨(Gut)であると嚴格なる金屬論者は謂ふ。例へばロッツ(Lotz)コンラード(Conrad)デイール(Diehl)ナッセ(Nasse)ラフリン(Laughlin)等の如き——例へば溫和な金屬論者ワグナー(Wagner)ヘルフエリッヒ(Helfferich)メンガー(Menger)等はより注意深く貨幣は對象であると云ふ——は、卽ち『貨幣は交易領域に於ける交換手段及價値尺度と云ふ二つの經濟的職能それ自からの中に合一して居るところのものである』(ワグナー)と述べて居る。二三の著述者は概念決定に於て尙ほ進んで『貨幣職能』(Geldfunktionen)を採用して居る。總じて次の諸點を考慮されて居る。そして實に。

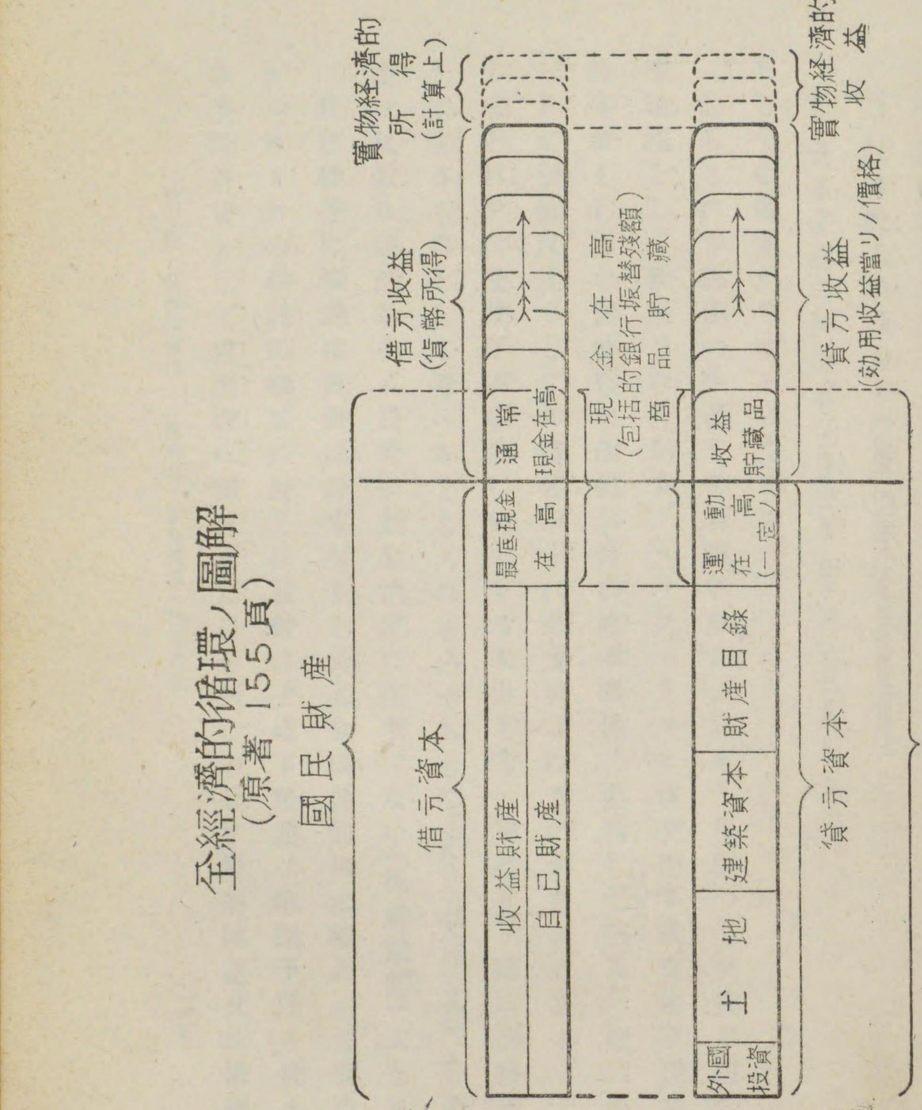
一、一般的交換手段(allgemeines Tauschmittel)

二、一般的特に法律的支拂手段(allgemeines, insbesondere gesetzliches Zahlungsmittel)

三、一般的價値及價格尺度(allgemeines Wert- und Preismass)

四、價値保存手段(Wertaufbewahrungsmittel)

全經濟的循環ノ圖解
(原著155頁)



五、價値輸送手段(Werttransportmittel)

六、財産表示手段(Mittel der Vermögensdarstellung)

七、資本交易の仲介者(Vermittler des Kapitalverkehrs)

としての職能が生ずるのである。

卽ちこれ等職能の中多くの著述者、殊にメンガーに依つて交換手段の職能が基礎職能として說明されて居る。ヘルフエリツヒは交換手段、支拂手段、並に資本移轉手段としての諸特質を價値移轉の根本職能に要約して居る。(註五四)第二の主要職能として、價値尺度としての職務がそれに並列されるのが普通である。尤もあるものはそれをば交換手段職能に並列するものと考へ(Wagner)。他は交換手段職能より生ずるものとして考へるところのものである(Menger, Helfferich)。その他の諸職能は無數に偶然的なる貨幣の概念決定に必要でない『後屬職能』として示される。

貨幣職能の學說は貨幣は財貨なりと云ふ金屬說的根本觀念から發生した。アダム・スミスの學說の構成に於ては貨幣は生產手段並に輸送手段と並んで第三種の手段財貨として使用財に對立せしめられ、しかして船舶、鐵道又は機械と同樣の

職務を有し、若くは職能を行ふものと考へられて居る。アダム・スミスが經濟の節動機と云つて居るのは有名である。この觀察方法は名目主義的貨幣理論にとつては採用され得ない。吾々は本書に於ては貨幣を『抽象的財産權』に入れ且つ借方價値として說明するが故に技術的及心理的意義に於ける貨幣と財貨との間を明確に區別する。吾々が貨幣を著しく轉化した意味に於てのみ價値尺度として了解し得る、と謂ふことは貨幣價値の內容に關する上述の說明に依つて明かである。寧ろそれに先達つて吾々は價値移轉の職能を論ずる事が許されようか、しかしそうなれば貨幣概念に對して殆ど何等の說明が獲られないであらう。交換手段職能に關する說明の場合には、貨幣は交易の發展並に分業の成立に從つて一般に經濟進歩の爲の前提を爲すと云ふことが指摘されるのを普通とする。なんとなれば實物經濟的交換は一定量の財貨を必要とする誰かが又上述の財貨を、しかもそれに該當するだけの數量に於て交附すべき誰かを見出し、又偶然にも正に彼等がそのために自由に提供し得るところの品質並に分量の財貨を獲得せんとする誰かを見出すことの不確實に應じて狹い限界を有つであらう。

この認識はさほどに重要なるにも拘らず尙それは貨幣理論に於てよりも一層國民經濟の本質に關する根本的觀察又は經濟制度の一般的なる學說に屬して居る。結局に於てそれは、それ自體を爭はれて居る科學上の分業の問題である。唯茲では職能學說がそれ自體近代貨幣の概念に對して僅かに寄與し得たのみであつて、實に貨幣職能の概念は今日貨幣の學說的研究に有益であるよりも寧ろ妨害的であると云ふことが確言される。

(註五三) Adolph Wagner：Sozialökonomische Theorie, S. 121；„Der Geldbegriff.『しからば全く經濟的及法律的意義に於ける貨幣は、傳來的に一交易領域內に於て共通の交換手段として又は價値尺度として、及法律的支拂手段並に債務辨濟手段として、信用を基礎に交易する人々の間に利用される物體(交換財貨)である。このことは貨幣が受取人及所有者に就てと同樣、同一方法に於て他から利用され、從つて完全な對價としても支拂に通用される。』

Menger, H. d. St., IV, S. 60)：『貨幣は其の他の總ての流通財貨より區別され……又それに依つて貨幣の一般的概念を決定するところのものは財貨交換の普通一般の仲介者としての職能である。』

Helfferich, Das Geld, 2. Aufl., S. 220 ;『故に吾々は現存する經濟領域及現存する經濟制度に於て正式に決定される經濟人間の取引(若くは價値の移轉)を仲介する處の全物體を「貨幣」の中に了解する。』

Philippovich, Grundriss, 1. Bd., 16. Aufl., S. 270. 『貨幣概念は從つて一つの物體の次の三つの作用を包含する、即ち交換手段職能、價値標準及法律的支拂手段職能である。』

Lotz, Wörterbuch der Volkswirtschaft, 1. Bd., S. 939 ;『次の四つの作用を果すものは貨幣と見られる、即ち一般交換手段、一般價値標準、價値貯藏及價値輸送手段として、最後に法律上有効なる支拂手段として役立つところのものであつて、一方又は他方の作用に於ける貨幣代用物 (Geld surrogat) として觀察される。然れども決して貨幣が代用する一般價値標準の作用に於ては具體的な場合に妥當せず。』

Conrad, Grundriss, 6. Aufl., S. 69.『一般交換手段として引受けられるところの財貨は同時に一般價値標準としても役立つ、貨幣は他の目的物と比較することに依つて、そうしてそれに依つて價値は同じく表現される。』

Nasse, Schönbergs Handbuch, S. 337 ·『貨幣は價値尺度の作用並に、交換、支拂及價値貯藏手段の作用を營む一般に適當なる交換財である。』

(註五四) Helfferich : Das Geld, S. 279.

第五節　要約

吾々は貨幣價値の問題を分析したる三つの部門の問題に關する種々なる理論を要約して回答すれば、

(一) 貨幣價値の內容に對する問題に對して勞働價値學說は、貴金屬貨幣に關してはそれ自體全く充分なる解答を與へ、卽ち貨幣は金屬の生產に必要なる勞働支出であると說明する。然るに使用價値學說はある一つの擬制を以て答へて居る。併しながら兩者とも素材價値のない貨幣價値內容を說明することは出來ない。職能價値學說は之れに就て研究したが、しかしその場合循環論に落入つて居る。近代の貨幣に對して充分なる且つ正しき回答は貨幣の反對價値を論ずる主觀的價値學說に依つて初めて與へられる。このことは同時に貨幣價

値の内容に於ての名目論的見解でもある。只だこの名目論的見解はそれを客觀的交換價値の概念より發展せしめる。

(二) 貨幣の價値根據に對する問題に就ては勞働價値學說が金屬貨幣に就て玆に明確なる事は出來ない。これに關しては使用價値學說は尠くともその見解の方式る回答を與へて居る。これに反して職能價値學說は何等かの形態に於てに於て拒否する。その際主觀的貨幣價値に關する學說は何等かの形態に於て素材價値學說又は職能價値學說に復歸する。吾々は貨幣價値を貨幣制度に從つて貨幣價値を商品的な又宣言的な信用的な通用力に復歸せしめる。夫れ故に吾々は古い貨幣にとつては金屬論に、近代貨幣にとつては名目論に從ふ、しかし只だ部分的には表券理論に從ふ。

(三) 貨幣の効果形態の問題に對しては金屬理論に依つてそれは商品として又は商品の如くに作用すると云ふ點に於て回答される。近代の貨幣制度にとつてはこの解答の試みは充分たり得ない。近代では吾々は貨幣を指圖證券(Anweisung)として又ある特別な性質を有する借方價値(Passivwert)と解してのみ現象

の說明が與へられる。このことを證明するのは次篇の課題である。

從つて吾々は貨幣素材は商品であるが、しかし貨幣は價値章標(Wertzeichen)であると云ふ名目論は更に三つの根本觀を有すると云ふことを知るであらう。即ちそれは貨幣價値をその內容上は反射價値として、その根據の上では宣言的又信用的通用力として、而してその作用形態では借方價値と解するものである。金屬論的見解と名目論的見解との間の論議に於ける多くの爭點は貨幣價値問題の解剖に際して大部分は全く失はれるであらう。特に名目論が近代の貨幣制度上に、その管轄權を限界するならば然りである。吾々は尙ほ古い貨幣制度に對して金屬論の思想方法が全く有效に適用されて居ることを認めるであらう。

文獻

先づ貨幣理論の中心問題としての貨幣價値の問題に對しては、殆ど貨幣に就ての根本觀に關する全文獻が考察される。(上記文獻參照)次の諸々の著述は貨幣價値若くは個々の部分的問題に特別に重要なる關係を有する。

一、貨幣價値に關する特別論述

C. M. Walsh : The fundamental problem in menetary science, 1903.

B. Moll : Logik des Geldes, 1916.

Anderson : The value of money, 1917.

J. Grunzel : Der Geldwert. Finanz-u. volkswirtschaftl. Zeitfragen, Heft 57, 1919.

Stephinger : Wert und Geld, 1918.

L. v. Bortkiewicz : Der subjektive Geldwert. Schmollers Jahrbuch, 1920.

R. Kaulla : Die Grundlagen des Geldwertes, 1920.

尙ほ特別に玆には名目論及び金屬論間の論爭に由來する論文と、當然に就中貨幣價値の問題を對象とする論文を指摘する。

二、論爭的論文

L. v. Bortkiewicz : Die geldtheoretischen und währungstheoretischen Konseqenzen des Nominalismus. Schmollers Jahrbuch, Bd, 30. 1906, Heft 4, S. 1—34.

W. Lexis : Eine neue Geldtheorie. Archiv für Sozialwissenschaften und Sozialpolitik. Bd. 5,

1906.

—— Die Knapp'sche Geldtheorie. Conrad Jahrbücher, 1906.

Karl Diehl : Eine neue Theorie des Geldes. Bankarchiv, 5. Jahrg, 1906.

Walter Lotz : G. F. Knapp's neue Geldtheorie. Schmollers Jahrbuch, Bd. 30, 1906, S.357–373. und S. 331—370.

A. Voigt : Die Staatliche Theorie des Geldes, Ztschr f. d. ges. Staatsw., 1906.

Weiss : Die moderne Tendenz in der Lehre vom Gelde. Ztschr. f. Volksw., 1910, S. 502.

Soda : Die neue Knapp'sche Geldtheorie und das Wesen des Geldes. Conrads Jahrbücher, 1907.

L. Stephinger : Volkswirtschaftliche Theorie des Geldes. Ztschr. f. d. ges. Staatsw., 1911.

O. Heyn : Zur Frage des Eliminierung des Wertproblems aus der Geldtheorie. Ztschr. f. Sozialwissenschaft(von. J. Wolf). 1913.

P. Gerngross : Beiträge zu einer wirtschaftlichen Theorie des Geldes, 1913.

J. B. Esslen : Die beabsichtigte Entthronung des Geldes. Schmollers Jahrbuch, 1917.

A. Schmidt : Neuere Urteile über die Staatliche Theorie des Geldes. Schmollers Jahrbuch, 41. Bd., 1917.

A. Genzmer : Kritische Betrachtungen zur nominalistischen Geldtheorie. Freiburger Dissertation, 1917.

B. Moll : Die modernen Geldtheorien und die Politik der Reichsbank, 1917.

K. Elster : Zur Analyse des Geldproblems. Conrad Jahrbücher, 1917.

L. v. Mises : Zur Klassifikation der Geldtheorien. Archiv. f. Sozialwissenschaften u. Sozialpolitik, 1917.

A. Amonn : Rovert Liefmanns" Neue Geldtheorie " Archiv f. Sozialw. u. Sozialp., 1917—18.

L. v. Bortkiewicz : Die Frage der Reform unserer Währung und die Knapp'sche Geldtheorie. Brauns Annalen, Bd. 6, 1918, S. 57 ff.

S. Budge : Waren-oder Anweisungstheorie des Geldes. Archiv f. Sozialw. u. Sozialp., 1918/19.

S. Budge : Vom theoretischen Nominalismus. Conrads Jahrbücher, 1919.

M. Palyi : Der Streit um die Staatliche Theorie des Geldes. Schmollers Jahrbuch, Bd. 45, Heft 2 u. 3. Als Sonderdruck erscheinen 1922.

E. Lederer : Zur neueren geldtheoretischen Literatur. Archiv f. Sozialwiss., Bd. 47 u. 49.

(川) 貨幣の語源學に就て

Menger : Artikel Geld, Handw. d. Staatsw., Bd. 4, S. 562.

J. Grimm: Rechtsaltertümer, 3. Aufl., S. 601 u. 649.

Schröder : Deutsche Rechtsgeschichte, 1898.

(四) 貨幣形態に關して

R. Andree : Ethnographische Parallelen, 1878 u. 1889.

F. Ilwof : Tauschhandel und Geldsurrogate, 1882.

W. Ridgeway : The origin of metallic currency and weight standards, 1892.

O. Lenz : Über Geld bei Naturvölkern, Virchow—Wattenbach' sche Sammlung g. Vort., 1893, Heft 226.

W. Lotz : Die Lehre vom Ursprung des Geldes. Conrads Jahrbücher, 1894.